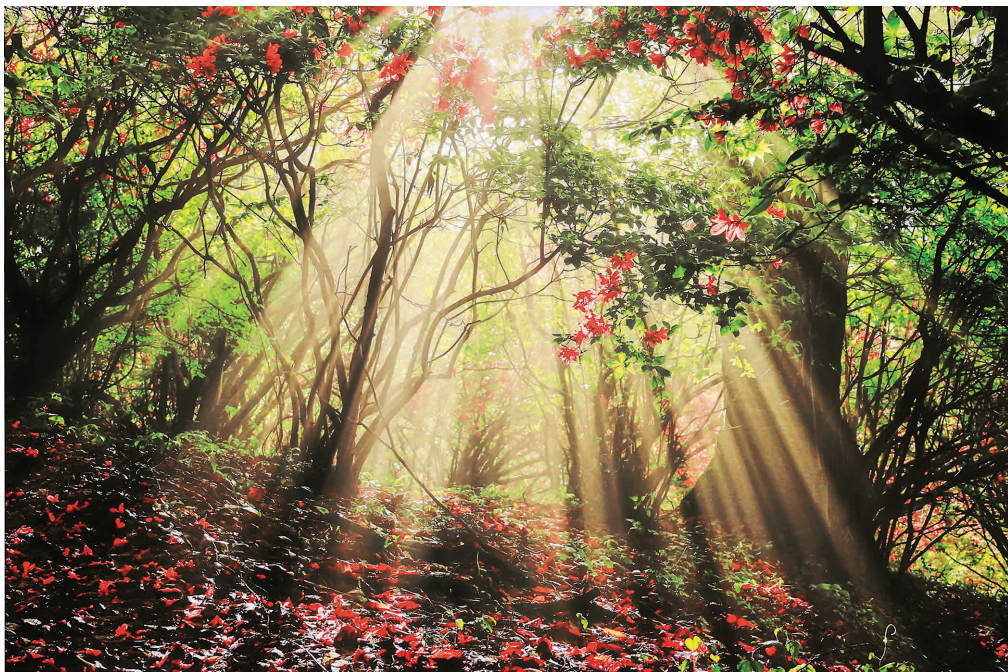


文芸川越

第46号



文芸川越

第四十六号



令和八年二月

川 越 市

文艺川越

第 46 号





第四十六号

目次

俳句	随筆	短歌	詩
俳句の編集を終えて	随筆の編集を終えて	短歌の編集を終えて	詩の編集を終えて
108	96	50	40
97	51	41	5



小 川

柳

川柳の編集を終えて

109

説

小説の編集を終えて

117

市内文芸団体一覧

149

「文芸川越」(第四十六号) 作品掲載者名簿

150

編集後記

153

カ ッ ト

青柳 謹一 指宿 恒子

鴨川 満智子

代田

勉

山本 久美子

表紙について

第72回 川越市美術展覧会
埼玉県知事賞（写真）

『朝の贈り物』

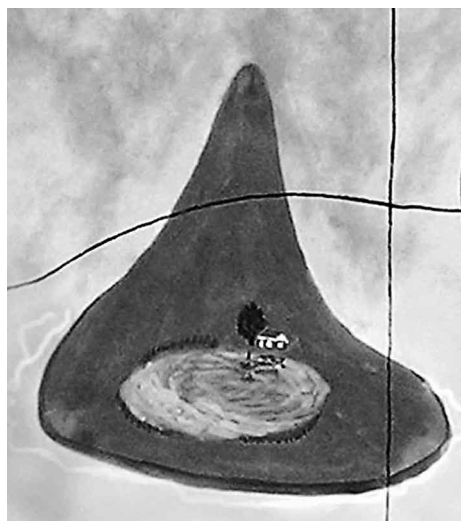
東秩父村の二本木峠にて、ふとした瞬間に太陽の光が差し込み、急いでシャッターを切りました。

何でもない場所で偶然撮れた風景です。

倉浪 輝子 作

河村木			平寺			益石			鈴遠寺			曾小荒			曲鈴天			編集委員	
合上原			三田柳			對崎子			鈴山島			小峯川			曲山木野				
いね子			輝一甚			フミ			正昭悦			恵綾恵			浩東子英				

詩



しろいはな

志
村

奏

雨上がり

ドアを開けると

しろいはなが

ぐつしよりと濡れて

あしもとに落ちている

せわしく過ぎていく日々に

咲いていることにさえ

気づきもしなかった

ヒメシヤラは

下向きに花を咲かせる

繁茂する葉の間から

少しだけ顔をのぞかせる姿が

愛らしさ 謙虚という

花言葉につながっている

俯いてばかりでは

なにも見つけられない

手をすり抜ける花びらのよう

影すら残らない

分け隔てなく

落とされていた

真白の微笑み

このとりとめのない地上から
ただ

見上げればよかったのか

吹く風を受けとめて

歩いてゆけば

目立たない言葉

小
野

浩

座右の銘は　と聞かれると
つい言葉を選んでしまう
気付かぬうちに見栄を張って

早朝の庭に咲く満開のダリア
ラッパの形をした花びらに
前夜の雨の雫を宿して

雫のひとつが光ったような
ああ　母が笑っている

子どもの頃いつも言っていたな

目立たないけれど

自分の経験が刻まれた

地味であたたかい言葉

借り物でなく

その人でなければ

決して出てこない

それこそが 座右の銘なのか

惜春の詩

薫風が頬を撫でていった
新緑まばゆい木洩れ陽に
貴女に戴いたナデシコが
一年ぶりに花を咲かせた

優しい草姿に

薄紅色の可憐な花

白いレースをなびかせ

プランターいっぱい

無邪気な想いを告げた

思いがけない訃報の知らせ

団塊の世代の頑張り屋さん

大
和
友
子

抗がん剤治療を受けながら

老父母を最後まで見届け

二人の息子と四人の孫を育てた

最近姿が見えなかった

病魔と戦っていたなんて

花を愛する人

パンジー、百日草、ペニチア

ムスカリ、ヒアシンス、アネモネ

明日へ種をまいていたのに

走馬灯のように

貴女のオーラが駆け巡る

いつまでもナデシコ

咲かせましょう

あなたに届くように

小畔川のほとり

伊藤 彰 一

小畔川沿いの空き地で

保育園児たちが

棒に結んだレジ袋で

風をつかまえようとしていた

強い風で

はち切れそうになった

レジ袋がひとつ

手をはなれて

空へ飛んでいった

笑い声が

風に乗って

私のところまで届いてきた

一緒に遊びたいと思ったが

保母さんたちの合図で

遊びはおしまい

園児たちは

お散歩カートに乗せられ

夕陽の中へ帰っていった

世の中の出来事

なんだか最近の世の中は
不安定な事ばかりが
増えている

人の列に突っ込む車と
道路を逆走する車

普通では考えられない
交通事故が減らないのは
なぜなんだろう

何の罪もない尊い命が
一瞬にして奪われ
これからの人生は
閉ざされてしまう

ウ
ッ
ド
マ
ン

それは本当に悲しい事

安全に生活できる

世の中になって欲しいと

願うばかり

思えば人間は

危険な事ばかりしている

世界で起きている

紛争や戦争もあり

その中でなんとか

生き残っているんだ

杖をついて歩こうが

車椅子に乗って進もうが

希望を持って

生きていればそれで良い

心さえ折れなければ

幸せはおのずとやって来る

母の日に

大
嶋
一
恵

兄は三十八才

弟は三十五才

毎年それぞれにプレゼントを送ってくれる

誇らしくありがたい日だ

小学生になったばかりの弟をつれて

花屋に行った兄が

カーネーションが買えなかったと

泣きながら帰ってきた日

何度も下見をして

駄菓子を一つ買ってしまったばなくなってしまふ

小遣いをため

いよいよ買いに行ったその日には

ふたりのもつお金では

買えない値段だったという

今年もそのころのふたりを思い出しながら

包みを開ける

あの日のカーネーションは

抱えきれないほどの花束になっている

失望

中山正夫

お前はノラか
刈り取られた田んぼの
たまり水を舐めているお前は
野良犬なのか

艶をなくした黒く短い毛
尻に貼りつくように 垂れ下がった尻っ尾
不安げな目つき
お前は捨てられたのか

飽きられたぬいぐるみのように
捨てられてしまったのか

そうだとしたら

飼い主は流行りの物が
欲しくなったのだろう

飼い主が「待てっ」と言えば　じっと待った

「お回りっ」と言われれば　お回りをした

「伏せっ」と言われたら　伏せの姿勢をした

それなのに飼い主は

情け容赦なく

お前を捨てたに違いない

あぜ道を振り返りながら

去っていくお前の目には

人間への不信と失望があふれていた

アイドル

中
島
貴

二十代も後半になると
女性との出会いも無くなった
結婚は諦めた

三十歳を過ぎてから事業所変更
東京都町田市へ引っ越した
小田急町田駅のデパートにはチケット売り場
アイドルに目覚めた

裕木奈江 坂井真紀 小川範子
コンサートに行った 舞台に行った
ファンクラブに入りファンミーティングにも行った

そんな生活をする中 袴田さんに出会った

初めは電子メールの交換から

やがてプレゼント交換

バレンタインデー チョコレートが送られてきた

ホワイトデー オレンジ色のバラ百本を贈った

拒否されなかった

それからは袴田さんがトップアイドル

電子メールで口説いた

電話で口説いた

秋には婚約

翌年の二月

アイドルの袴田さんは中島さんになった

フナ

中
島
久
美

結婚してから

あなたは度々悪口を言うようになった
とても腹が立った

ある日の夜更け

ふと寝顔を見ると

間の抜けたフナの様な顔だった

次の朝

あなたからおはようの挨拶に

フナちゃんおはよう

と答えた

久しぶりにすつきりした

記憶

実際にあって見たもの
覚えている変わらないもの
そうしたものが記憶だ
でも記憶は

限らない時の中で
脚色と脱色を繰り返し
思い出へと成り下がる

関
根
涼
真



本当に凄いのは

ア
ラ
ン

片

山

偉大なる魂 躍動する肉体

全ては自分のため

全てはチームのため

愛すべきファンや子供たち

白球を追い 白球を打ち返す

孤独の中でも喜んで

全身全霊素振りの毎日

野球シーズン始まれば

毎日毎日夢舞台

ファインプレーとタイムリー

毎日がヒーローインタビュー

疲れてもスランプでも

笑顔ではつらつ受け答え

空振りもボーンヘッドも

全てが絵になるミスタープロ野球

昭和に与えた希望の光

百年経っても色褪せず

誰もがみんな野球少年

寝ても覚めても勝利の日々

いつかはやっぱり来るけども

神様となり糧となり

日本の野球を支えてく

プロ球団はいつだって

ドリームチームで生きていく

勝利に貪欲人材に貪欲

だから人々があこがれる

子供たちに夢を与える

ありがとう神様

ありがとう昭和

ありがとうミスタージャイアンツ

むらさきの堇

その気持ちを何という

いつも近くにあった 疑問符

常に求める 満ちぬ心

いつも死にたいと漠然と

思っていた ある時期

空しいと感じた日常

私から離れない形の見えない不安

それでも ひとりの時間が好きだった

あれは春の日

萌える木々の根もとに

すみれが咲き始めて

あいだ

澄

私を迎えてくれた

紫の花は私を見つめている

それだけで

心がやわらかになった

あれから時は過ぎて

不思議に心が静かだ

何を捨てて 何を得たのだろう

肩も嘘のように軽い

住む場所も変わったのに

菜の花が風にゆれてる

蒲公英が草に埋もれて背伸びをしてる

連翹の花が垣根を独り占め

黄色が目映る

その気持ちを何という

何を捨て 何を得たのだろう

廃屋

昔　そこは旅館だった
風格のある老舗の建物
周辺は荒涼として
雑草が生い茂る

まるで人間を寄せ付けないように
先を競い合って伸びる
形の良かったであろう
松の木の枝は
すっかり無造作な枝振りだ
それでも歴史の風雪に耐えていたのだ
痛々しく荒れ放題の姿に

青
柳
謹
一

廃屋にも栄華を

極めた時代があったのだろうか

見るものに無情と哀れを感じるのだ

自然と時代の狭間に

移り変る歴史の激動を

苔生す大きな庭石に映している

寂れゆく名残りと

栄枯盛衰のドラマを廃屋にみる

今もなお自然と歴史の風が

不思議にも

さわやかに吹いているのだから

若者よ

曲
山
茂

若い男よ若い時の面構えなかなかのものである

若い女よ優しく上品である

この二人の馴れ初めは些細なことである

百円玉がコロコロところがり進む

男が追いかける一分ぐらい

女が立って待っていた わしづかみ

これはあなたの物です 男に渡した

男はどうもありがとうお礼を言う

坂の途中にベンチがあり

又そこに座ってお礼を言う

男は今までに恋などした事はない
女は今までに二回ほど振られている

なだらかな坂の景色をながめながら

二人共背筋伸ばしながら大きく息をする

女は少し姉ごふうで

そこが好きであるような気がした

その時はそのまま別れた

又その場所に用事があり出掛けた

半年は過ぎていた 今は秋である

今度は意識して百円玉を落としてみた

道ではね返りコロコロところがり出した

下をながめると女が立っている

確かにあの時の女性である

心がたかぶり百円玉を追いかけて

その人が私の妻である

春

歩く度、体が軋む

日課の散歩――

菜の花の咲き乱れる人間川の土手で

仰向けになり一休み

果てしなく広がる青々とした空

花の匂い

思いきり深呼吸をして目を閉じる

・・・と 何かが浮かんだ

そっと目を開けて見る

風もないのに菜の花が揺れている

平
井
正
一

紋白蝶が二つ縛れるように大空へ舞い上がり

桜花びらが絶え間なく降り注ぐ

耳に届く川のせせらぎ　鳥の囀りも聞こえてくる

春　再び巡り来た春

去年一緒に旅した友はもういない

私は草の根に身を横たえかろうじて生きている

今　私がここにいる僥倖に

感謝！

人生は前進あるのみ

中 島 幸 男

人の一生は前進あるのみと言う

確かに一日一日と新しい世界が生まれる

その新しい世界に向かって何をするか

目標を持つことが大切だ

身の回りの些細なことでもいい

朝決まった時間に起きる

こんなことでもいいのではないか

それを繰り返すうちに

心に変化が生まれる

それが前進している証だ

人間は希望を持つことにより

明日の一日が楽しみになる

心にもゆとりの中に勇気が生まれる

勇気は努力と忍耐を強いるが

前進するための鍵である

苦しい時でも笑顔で

コツコツと続ける姿勢が必須だ

続けていけば習慣となり

そこに新しい何かが生まれる

ああ人生は前進あるのみ

太陽

竹
内
京
子

明るいでびっくりした

寒い部屋に閉じこもって廊下にはらりと出ると

そこがあんまり明るく暖かいので

ただ明るく暖かいということだけで

なんだこんな簡単なことだっただけ

これまで考えていた問題が

はつきりと分かった様に思うのだ

曇りガラスの先にある

この明るさの原因を知ろうと窓をあけると

満々たる生命力で生き生きと前へ

陽光を幾重にも

またこれは一層透明な明るさ

この曇りもないそのままのものが広がってる

ああ私の顔をはっきり破るこの明るさ太陽

人生を希望の光で照らす太陽

世界を照らす太陽

詩の編集を終えて

この数年は社会状況が不安定なこともあり静謐な情景の描写が多く見うけられた。本号は十七名の投稿作品が寄せられており作品は内部の優しい心情を豊かな言葉で表現されて細部まで考慮されている。

志村奏「しろいはな」見慣れているが美しい花を再度よく凝視することにより私自身を外部へと思考を始動することに出会うことを見詰め見極めている詩である。

小野浩「目立たない言葉」自己の内部から沸き上ってくる言葉こそが真理をもち深く尊重されることを知ることができるという自己発信の詩である。

大和友子「惜春の詩」優しさとはこのように親しみのある交流こそが心を豊かにするのであるが、別れの悲しみを花に語る切なさとしみを感じさせる詩である。

伊藤彰一「小畔川のほとり」優しい視線があるからこそ風景であり心が和み未来を感じる詩になっている。

ウッドマン「世の中の出来事」不安定な社会ではあるが、どのように対すべきか強い意志表示をしている詩である。大嶋一恵「母の日に」子供たちからのプレゼントは何よりも嬉しいことを実感しつつ懐かしい気持と共に伝わってくる温かい詩である。

中山正夫「失望」動物の淋しい風景を見ることはつらいことであるが作者の情愛の視線を感じ救われる詩である。

中島久美「フナ」温かい交流が生じるのは何げない言葉の発声だが内部からの真の声であるという詩である。

中島貴「アイドル」青春物語のように書かれた詩であるが自己内部に時代的な懐かしさが交流する詩である。

関根涼真「記憶」記憶することは思考の体験でもあり行動の習練で意志を育成している詩となっている。

アラン片山「本当に凄いのは」日本でこのように活動した野球選手について人格がにじみでており活躍と人格と共に昭和の風景が描写されて深みのある詩になっている。

あいだ澄「むらさきの莖」花を見詰める視線により自己内部をも見つめる視線となり深い詩になっているのである。青柳謹一「廃屋」建物があるということとは人間が生活をしていたことを知る歴史観のある詩になっている。

曲山茂「若者よ」人との出会いは劇的場面のようにであり、実体のある者が結びつく脚本どおりに進んでいる詩。

平井正一「春」自然の中で生々として深呼吸をしている、情景が眼に浮ぶようなまさに春季的な詩である。

中島幸男「人生は前進あるのみ」勇氣は現代において最も重要な気力でありそれが前進である詩となっている。

竹内京子「太陽」見慣れている日常において驚くことがあり行動力が詩を力量的に強度にしているのである。

日常では疑問をもたない自然現象であっても自己内部に集積されていると思われるがその重さに気付くことが詩になるのである。

(天野英 曲山浩 鈴木東海子)

短歌



山下

安住 信子

エアコンをつけて過ごしし猛暑日は塗装職人の息子を案ずる
運転は無事故無違反数十年免許返納気持ちがいゆる

荒川 恵子

現世の音を消しつつ包みつつ引き明けに降る雪のその音
月映る氷しやりりと踏みをれば月もろともに割れてしまへり

荒木 秀子

独り身を父母は不憫に思ひしか送り火の夜姉急に逝く
夕つ方お墓所に虹たてば姉が渡ると消ゆる迄見つ

飯野 喜代子

霜柱踏みゆくごとくさくさくと朝の厨に大根さざむ
孫が弾く動画のピアノ聴きながら森のベンチに夫とくつろぐ

石澤 昌子

炎天の日陰の風にほっとして手押し車を止めて小休止
彼岸過ぎようやく風に揺られつつ秋明菊はたおやかに咲く

伊藤 富三江

「おいしいよ」口には出せずほころぶ夫秋はほっこりと私の中に
初雪に朝日まぶしい幼き日犬と転がる長い坂道

岩 澤 邦 雄

卒寿超え全身麻醉の手術受く七〇三号個室の
暮らし
右筑波左に成田新勝寺あはひに離陸す旅客機
見上ぐ

大 島 秀 子

人の声欲しくてテレビ付けている見たい番組
何もなければ
ゴム飛びとう遊びのありてスカートの裾を絡
げて飛び越えたりき

遠 藤 洋

一人寝の老いの枕に淡^{うす}かりし灯りひきよせ読
み止しひらく
おしゃべりの合間あいまを娘の眸「きこえま
すか」と難聴われに

小 高 常 代

おそろいの浴衣の新弟子闊歩する大きな体に
あどけなき顔
「入院す」のはり紙ありし喫茶店「必ず戻
る」と店主は書きおく

大 澤 洋 子

雨にぬれ咲く紫陽花やふる里の母も施設で見
るのだろうか
満開や荒れた空き家の木瓜の花その色合いに
寂しさ感じ

金 子 芙美子

突として開くは泰山木の花今日の蕾を確かめ
帰る
高き木に花の所在^{ありか}を見つげんと地から見上ぐ
ることのもしかし

叶 玲子

初曾孫囲みて新年の卓につく老いの愁ひの消
ゆるひととき
卒寿すぎ憂ひも喜びも変はりきぬ如何に生き
なむ残されし日

黒木 萌那

集配車某マンションの一室へなるほどこれで
バレないわけか
ふと壁に目を向けてみて青ざめる思いだすの
は家族戦争

唐 沢 順子

消灯の廊下歩めば看護師が天井見上げ大きく
息す

黒 須 恵

富士山に一番近い山中湖五十年前は中野村と
言えり
実母から代々続くキンセンカの春はビタミン
カラー全開
ゴテチアは色とりどりに列をなし薄い花卉は
初夏にひらひら

栗 原 セイ子

梅雨さむのひと日となりて齢重く早や夫と我
九十歳過ぐ
みどり色なしたる風とたわむる若葉は我に
歌詠めといふ

黒 田 紗 矢

白馬死にその屍は音となり人の心をやさしく
撫でる
悲しみを漂流ポストに投函す名前も知らぬ誰
かに向けて

小 出 い 子

齊 藤 葉

むらさきの似合ひし母を思ひ出づ車窓にけぶ
るは山藤の花
重ねゆく齡とともに生きづらさ増ゆるといへ
ど短歌あれば良し

七桁で示された家ぜんぶ知る配達員は地球を
守る
母に名を呼ばれ始まる毎朝はまだ大人にはな
れぬ確認

古 牧 ゆ き

齊 藤 隆 子

玄関のパンジー、ビオラに見守られやつとこ
さ送迎車に乗り込む
今日もまた洪々デイサービスに行きました自
分のために家族のために

終活のアルバム整理はかとらず部屋にひろげ
て来し方偲ぶ
転勤の娘家族が帰国する同居生活おたおたと
せり

小 峯 綾 子

齊 藤 洋 子

裏庭の「福島」といふ紅椿咲き初むる日よ三
・ 一一
アラームに目覚めし後も温もりて久々母の夢
たぐりをり

ふるさとを後にしてから幾年ぞ住む人のなき
わが家を見上ぐ
限りなく休耕田の続くみち米の価格が過ぎる
一瞬

酒井 真結子

髪揺らし「幸せでした」と笑う君醜いほどに
空は綺麗で
空に咲き音を響かせ皆の的そういうものに私
はなりた

重田 美保

すずみ台に父は将棋す子どもらは線香花火の
昭和なつかし
藤村も泊まりしという佐久間旅館更地となり
て昭和遠のく

佐々木 美千代

健気にも北風受くる庭の辺に臘梅のつぼみふ
つくらを見る
西山の夕やけ空にかがやきて秩父の山並眺め
つつ歩く

関口 和奏

赤ペンに弾丸込めて我を撃つ自己採点の文字
の屍しかばね
ハンガーにちゅうぶらりんのセーラーに淡い
痛みが染みついたまま

里村 広美

オレオレの詐欺の名変わり「特殊詐欺」巧み
な話術に騙されてゆく
今年また夫と育てた紅あずま歓声あげて孫た
ちが掘る

曾根田 恵美子

久し振りに偶然見かけし知る人の瘦せたる姿
に声かけず過ぐ
食品の高騰続き遣り繰りの知恵追ひつかず頭
悩ます

高見沢 登美子

新緑にまじりて咲ける花躑躅川下る舟に見つ
つ過ぎ行く
ユーモアをまじえて語る船頭が急流に来て寡
黙になりぬ

長澤 八千代

改修の前にたましい抜くという読経聞くなり
残暑の墓前に
三十年葉欠かせぬ身になれど憂えほどほど傘
寿となりぬ

土居 かえな

近づけば微かに滲む星の影指でなぞれば夜が
解ける
今週の私の生命線を断つ推しのドアップに恋
焦がれるの

中島 哲朗

高僧の生まれ変わりが羅漢さん口ダニに負け
じ考える人
時告げる鐘の音びびく蔵の街古き良さ残す小
江戸川越

104 hero

あの鐘を見上げてみたら青空と飛行機雲と群
れゆく鳥と
思い出は夜更けの街の路地裏に咲きたる花の
如き儚さ

中添 三代子

いま少し屈まず歩め初夏の街の硝子に写るわ
たくし
南に天狼星みゆる季となりて酒器を替へよう
萩から備前に

永塚 真歩

「雨が降る」フェンスの下で蛙告ぐプール飛び込むぼつけるけろり
ポストまであと三步で鳩と見合うポストと鳩と手紙が逃げて

町田 あや子

静謐な寺の緑陰十体の一尺地藏尊江戸の貌かおみ
せ
ニューヨークのラーメン一杯の値を思ひ寿司を楽しむ世界の日々は

野原 喜代子

ボケないで迷惑かけぬ生き方を米寿むかえて
今感じ居る
夫も子も逝きたる後の我が旅は寺訪ずれる行程多し

宮崎 朝子

「これが良い」の教えを思い迷いなく穏やかに受くガンの宣告
術後すぐ「大丈夫だよ」と吾の肩叩いてくれた医師の頼もし

程塚 文三

上高地の河童の橋に妻と立ちぬ若き日の夢よ
穂高の雪よ
雷雲を裾にはらいて赤城嶺は傾きし陽に輝き
て見ゆ

山田 厚子

歩きたい あの大屋根のリング道おとろふる
脚わすれ羨とほしぶ
万博の大リング道は世界一の木組みと知りて
なほ懂るる

山田 泰子

聞き返す事のさびしさ聞きとれずなおもう一
度聞き返せざり
聞き取れぬ言葉あいまいに受け流し満たされ
ぬもの常抱えおり



短歌の編集を終えて

今年度の投稿者は昨年を四名下回り、四十三名、八十六首の作品がありました。高校生から九十九歳の幅広い年齢層の皆様よりの投稿に編集委員一同、大変感激しました。

編集方針は、従来と同様、原則として可能な限り原作のままの掲載を致しました。作者の方の心の有様の表現としての短歌を大切にしたいと思います。編集委員が会議を重ね、新・旧かなづかい、誤字、脱字、音の調べの整わないもの等、若干の手は入れさせて頂きました。

次に心に残った歌を記させて頂きます。

○独り身を父母は不憫に思ひしか送り火の夜姉急に逝く

荒木 秀子

○霜柱踏みゆくごとくさくさくと朝の厨に大根きざむ

飯野 喜代子

○彼岸過ぎようやく風に揺られつつ秋明菊はたおやかに咲く

石澤 昌子

○人の声欲しくてテレビ付けている見たい番組何もなければ

大島 秀子

○卒寿すぎ憂ひも喜びも変はりきぬ如何に生きなむ残されし日

叶 玲子

○白馬死にその屍は音となり人の心をやさしく撫でる

黒田 紗矢

○重ねゆく齡とともに生きづらさ増ゆるといへど短歌あれば
ばよし
小出 い子

○母に名を呼ばれ始まる毎朝はまだ大人にはなれぬ確認
齊藤 栗

○終活のアルバム整理はかどらず部屋にひろげて来し方偲ぶ
齊藤 隆子

○赤ペンに弾丸込めて我を撃つ自己採点の文字の屍

関口 和奏

○ユーモアをまじえて語る船頭が急流に来て寡黙になりぬ
高見沢 登美子

○南に天狼星^{シリウス}みゆる季となりて酒器を替へよう萩から備前に
中添 三代子

○聞き取れぬ言葉あいまいに受け流し満たされぬもの常抱えおり
山田 泰子

紙面の都合上、掲載できず残念でしたが他にも心の残る作品がありました。日常の些細な出来事や、喜怒哀楽を三十一音の調べに表現する短歌、今後も詠み続けていかれる事を願います。

(荒川・小峯・曾根田)

随 笔



アンコ椿

恵比根 蘭

結ばれる男女は赤い糸でつながっている、と聞く。この話の元は中国の伝奇小説で、そこには糸でなく赤縄と書かれていたらしい。何と太い。私はふと思った。男女でなくても細くても、人と人とを結ぶ糸があるのではないかと。先月、同じ齡の友が亡くなった。彼女のスマホからメールが来たので、お連れ合いが亡くなったのかと一瞬思ったのだが、落ちて書いて読んでみると、

「花田みき子の夫の花田清太です。家内が……」

と書いてあるではないか。まさか、と私は動揺した。三日後がお通夜で翌日が告別式。「関係各位に連絡をお願いします」とメールの最後に書いてあった。みきちゃんとは大学を卒業した年に一年間しか一緒に働いていないので、連絡するといっても同期の二人しか思い浮かばなかった。

私立の女子高校の教師になった年の同期は七人。特に女性教師四人はすぐに打ち解けて、休みの日にもよく一緒にでかけた。みきちゃんは群馬の大学を出て、何と駆け落ちをして埼玉に。密かに同棲生活を始めていた。私達三人は同じ東京の女子大出身なのに、大学時代には全く知らない

同士だった。私と和衣子^{わいこ}ちゃんは同じ日本文学科でも知らなかった。新米教師でまだ学生気分が抜けきらない私達は学校では背伸びをして教師らしく振舞う努力をしていたけれど、一步学校の門から出るとお互いにちゃん付けで、学生気分に戻った。みきちゃんは家庭科、私と和衣子^{わいこ}ちゃんは国語科、葉菜^{はな}ちゃんは数学科だった。よく働きよく遊んだ。みきちゃんは清太君と暮らし始めたばかりだったので泊まり掛けの旅行には参加したことがなかった。

みきちゃんは翌年退職して県内の公立小学校の教師になった。退職する前の二月に故郷で結婚式を挙げた。結局は両家のご両親も二人の結婚を認めて、和やかな雰囲気のことだったと思う。何しろ四十五年も前のことだからかすかな記憶しか残っていない。よく覚えてるのは、私達三人が余興を頼まれて、都はるみのヒット曲「アンコ椿は恋の花」の歌に合わせて踊ったことだけだ。ワンピース姿のまま頭に伊豆大島で買った椿の柄の手拭いを巻いて。高校教師だと紹介された後、イントロが流れ始めただけで会場は何が始まるのかとざわざわして、大いにわいた。

……チャンチャンチャラリチャラリ……の伴奏に乗って私達は屏風の陰から踊り出たのだった。

踊りは三人で適当に考えたいい加減なものだったが、かなり練習を積んではいたのである。三月の卒業式の前に学校行事の予餞会というのがある。在校生と教師で三年生の送別会をするというもので、新任の教師は舞台で余興をす

るという慣わしがあった。

文化祭の代休に三人で伊豆大島へ出かけたときに予餞会は「アンコ椿」と決めて、私達は手拭いを入手したのだった。竹芝棧橋から夜行の伊豆大島行きの船に乗った方がいいが、台風が近づいて海は大荒れ、乗船客はみな床にゴロ寝。トイレの前の床がなく、そこに横になったことは忘れられない。翌朝、島に着くと快晴で、船着き場に「アンコ椿は恋の花」が大音響で流れていた。アンコ椿は椿の名ではなくアンコは姉っこ、椿咲く島の娘という意味だと知った。椿は觀賞用でなく強風を防ぐ防風林で、娘たちは水汲みなどの重労働もする逞しい働き手だという説明もあった。都はるみの歌のアンコは叶わぬ恋を嘆いてはいる。しかし独特のコブシのせい、島で強く生きている女性像が浮かぶ。

結婚式での余興は予餞会のリハーサルでもあった。予餞会の直前には学校の合宿所に泊まり込んで衣装を身に付けて最後の仕上げをした。私はそこまでしなくても、と内心思っていた。本来の仕事ではないのだから。教師の仕事は教えることばかりではなく、そんなことが案外意味を持つこともあると分ったのはずっと後になってからだ。

告別式が始まる前に私達は清太さんにお悔やみを申し上げに行った。

「アンコ椿のお三方ですね」

と言って、清太さんは少し微笑んでくれた。結婚式以来四十六年ぶりの再会である。大学を出たばかりの黒髪ふさ

ふさの青年は、白髪で背中が少し丸くなった孫のいるおじいさんにならわっていた。私たち三人は孫のいないおばあさんになっている。彼女は手遅れのがんで、入院してたった三週間で逝ってしまったそうだ。

一年しか一緒に働かなかつたし、その後会うこともなかったのに親しい気持ちが続いたのは年賀状のお陰だったかもしれない。花田家の年賀状には毎年家族がフル出場していて、その年に話題になった映画やテレビドラマが再現されていた。ミニアルバムに永久保存版にして取ってある。

四年前にみきちゃんと再会した。三十年教員をした私には共通の話題があると思って誘いの電話をくれたのだろう。六十五歳まで働いたからこの先はのんびり過ごすと云っていた。好きな仕事でも苦しいことは山ほど。苦勞の比べっこをし、いつか彼女の故郷の秘湯に行こうと誘ってくれた。

告別式の日には冷たい雨が降って、斎場の玄関先で火葬場に向かう車を見送った。彼女の二人の孫たちも見送りの列の先頭にいた。車が動き出した途端、告別式では涙を堪えていた六歳くらいの子が激しく泣き出した。彼女がいいおばあちゃんだったことが泣き方から伝わってきた。その日の私達は後日またゆっくり会おう、と言って別れた。

数日前にテレビのBSで二〇一〇年の堤真一主演映画「孤高のメス」を見ていたら、手術のシーンで「アンコ椿は恋の花」が流れてきて、何でこのシリアスな場面で、と驚いた。主人公は誰もが認める腕のいい医師なのだが、大

の都はるみファンで、これを聴くと長時間の難しい手術にも立ち向かえるようだった。人情に厚い庶民派医師という意味も持たせているのだらうと感じたし、この歌を聴くと悲しみや困難を吹き飛ばす力がもらえると云っている気もした。みきちゃんのお別れのときも清太さんの「アンコ椿の」の一言で気持ち救われたことを思い出した。

和衣子ちゃんと葉菜ちゃんは学校で四年間働いたところで退職して結婚し、専業主婦になった。それぞれ子供を産み、その子供達がもう独立している。これからまた友達付き合いができたらいいなあ、と思う。みきちゃんの死は悲しいけれど、私達を再会させてくれたのかもしれない。

五月に私達は再び顔を合わせた。お見合い結婚した和衣子ちゃんは九年も前に夫を熱中症で亡くした。亡くなる数年前から認知症になっていたという話にも驚いた。葉菜ちゃんは職場結婚して、今も夫婦仲がいいようだが、お父さんの会社が倒産した後始末や障がいのあるお孫さんの通院の手伝いなどで忙しい日々を送っているという。私は三十年教師をし、介護離職して両親と弟を送る経験をした。

外から見たら分からないけれど、それぞれに大変なことを抱えて生きてきたのだと思う。みんなアンコ椿なのだ。もう娘ではないけれど。亡くなったみきちゃんも含めて。

この先も大学時代からつながっている細い糸がつながり続けて、時々思い出話に花を咲かせ、それぞれの今について話せたらいいなあ、と思っている。

しげまつさん

はつとり かな

短期間、農家でアルバイトをした時のこと。

「はとぼっぱだな」

それは、私が初めてしげまつさんと対面した時に言われたニックネームだった。しげまつさんのフルネームを知らないで、ここでは仮にそう呼ぶことにする。

私はそのニックネームが嬉しかった。というのも、私自身が人を覚える時に、その人の特徴や印象をもとに心の中でニックネームをつけて記憶することがあるからだ。

ある日、しげまつさんと軽トラで畑へ向かう事になった。車に乗った途端、しげまつさんはプハーツと勢いよくタバコをふかし始めた。窓は全開だったし、目的地まではそう遠くはなかったものの、私は思わずギョツとした。いきなり車内でタバコをふかし始めたのだ。「わあ、昭和の親父だ！」と思わず心の中で叫んだ。とはいえ、これはしげまつさんの車だし、私は雇われたばかりの新人、はとぼっぱ。苦情を言える立場ではない。

ちなみに、私は個人的に喫煙を否定するつもりはない。というのも、私はタバコ屋の孫娘で、東京都内に住む祖母

の家に遊びに行くと、よく店番をしたものだ。だから、喫煙を全否定はしない。

だけれども、令和の今どき、車内で何の前触れもなく、タバコを吸いだしたのには正直驚いた。

昭和の親父そのもの、という感じが否めなかった。私は個人的に高齢の男性が少し苦手なのだ。というより、どう接していいのかわからないという思いがある。

同世代であろう男性と私の三人でいる時、しげまつさんが、突然下ネタを話し始めた。「うわあ、昭和の親父……」男性同士の下ネタ系の話題は正直困る。これはもう、お茶を飲んでお茶うけ菓子食べてスンとしているのが一番だろうと思いながら、その場をやり過ごした。

心の中で「昭和の親父代表」と思っていたしげまつさんが、作業時によく着ているTシャツはどこかの音楽フェスのものだ。はじめは、昭和の親父だと思っていたけれど、意外と今風な一面もあるのかもしれない、と思い始めた。

ある日、しげまつさんと二人でほうれん草とカリフラワ―の収穫作業をした。最初にほうれん草の収穫を始めた。私はしげまつさんの仕事ぶりを見て、思わず「すごい！」と驚いてしまい、ポロつと声に出してしまった。

まるでオートメーション化された機械のように、収穫されたほうれん草が縦・横・高さまで整然と置かれていた。コンテナに収めやすいようにだと、すぐに気が付いた。

「※☆×○△◇!」しげまつさんが何を言っているのか、

聞き取れなかった。

どうやら怒られたらしい。当たり前である。その整然と並んでいるほうれん草は、私を感動させるための作業ではないのだから。それは効率よく作業を進め、時間通りに商業ベースに乗せるために必要な事なのだ。

次に、カリフラワ―の収穫をした。しげまつさんは黙々とカリフラワ―を刈り取っていく。

朝露に濡れ、太陽の光を浴びたカリフラワ―は、それはもう美味しそうだった。こんなに美しい状態で刈り取られたカリフラワ―。もしカリフラワ―に感情があるとするならば、さぞかし誇らしいだろう。

またある別の日。

里芋をもぐ作業をした。私は不器用でいつもモタモタしていた。すると、しげまつさんが「上から下に向けて落とすんだ」と教えてくれた。

それまでモタモタしていたのが嘘のように、里芋がスムーズにもげる。土にまみれた里芋をもぐのが楽しいと思う日がくるとは思いもしなかった。

私が小松菜やほうれん草を刈り取るとき、根っこが長く残ってしまいスパッと切れずにいたら、しげまつさんがボソツと声をかけてくれた。

「鎌が下向きになっているからだ」

なるほど、そうだったのかと思った。私は考え足らずの不器用で、人のやっている作業を見て真似して覚えるのが

苦手だ。なので、しげまつさんの私の背後からのつぶやきはとてもありがたかった。

そんな人の振りみて我が振りを直すのが苦手な私が、畑の土の上を掃くとき、しげまつさんの箒の持ち方と掃く方向を見て真似を試みた。

「掃きやすい！」

草や落ち葉などが土の上なのにスムーズに掃ける。掃くスピードはしげまつさんには及ばない。だけど、コツを覚えると、こんなにも体力を最小限に抑えながら効率よく掃けるのだ。もう掃くのが楽しくてたまらない。私にも人の振りみてが出来たのが嬉しかった。昭和の親父の経験値は、素晴らしいと思った。しげまつさんは、こうして長いこと家業を続けてきたのだろう。私が初めの頃に思っていた断りのない車中喫煙も、「ま、いいか」と思うようになった。それが長いこと農作業に携わっているしげまつさんのストレス解消法の一つなのだろう。

その農家で年の瀬に、お餅つきがあった。そこで働いている人たちや、そのお子さんたちがたくさん集まった。

私は臼と杵を使ったお餅つきはテレビで見るくらいで、実際に見るのは貴重な経験だと思い、ありがたく参加させていただいた。

正確な年は忘れてしまったが、「大正〇〇年」と墨で書かれたお餅をのせる台があった。大正時代からの物が大切に受け継がれ、使われていることに思わず感動した。

もち米を蒸すための薪をくべていたら、しげまつさんがやってきた。

「そうじゃない、こうやるんだ」

言われるがまま、かまどに溜まっていた灰を掻き出す。すると、しげまつさんが薪をくべ始めた。

赤々と燃えている。

まるでジブリ映画のカルシファアのようだ。いや、こっちが本物だ。昭和の親父さまの経験値は半端ない。

そのあと、しげまつさんはその農家があるエリアや川越の農業の歴史を話してくれた。

川越市やその周辺に住んでいる人ならご存じの人も多いであろう、あの三富新田よりも、さらに前の時代から、その土地の土壌に合わせて畑と田んぼに分けて開拓されていたと聞いた。私はしげまつさんを、まるで歩く「川越農業歴史辞典」のようだと思った。

他にも話してくれたことはたくさんあったが、覚えきれなかった。きつと博物館や図書館に資料はあるだろうから、ぜひ調べてみたいと思った。

しげまつさん。実年齢よりも若くていらっしゃいますが、お年もお年なので喫煙を否定はしないけれども、ほどほどにして、お体を大事にしていつまでもお元気でいて下さい。

大喧嘩

大 竹 千 穂^{ちほ}

現在五十六歳、専業主婦。

三人の、息子、息子、娘を育て上げ、私の育児は完了したと思っていた三日前、事件は起こった。

場所はキッチン、台所。台所にあるダイニングテーブルを挟んで、次男と向かい合って立ち、人生最後となるであろう大喧嘩は始まった。

もともと大人しくて、手間もかからず、兄弟の中でも一番育てやすかった次男は、今はオタク。いわゆる、今で言うゲームアニメオタク。ついでに、ウルトラマンコスモスが凄く好き。

そんな彼と、一世一代の大喧嘩。

私が少し前に頑張って片付けた、台所にある棚の無印良品で揃えた白いボックス十二個の中の、ストック食材の種類の仕方が気に入らないらしく、大喧嘩が始まった。

要は、彼の目的とするチンご飯が隣のボックスに移っていて激怒り。

日大数学科を卒業した彼の頭の中は、数学的な思考回路で、家族が共有する棚の分類方法が明確でないのは、やり

づらいとのこと。特に感情で動く私としては、ひとつ屋根の下、そんなに生きづらいと言うのなら、ここから出て行けと反撃。悔しくて悔しくて泣きながらの反撃となった。

こんなに頑張って育ててきた結果がこれかと思うと泣けてきた。相手を思いやる気持ちも持てず大人になっていた次男に絶望感しかない。

散々言い争った挙句、何とかお互いの妥協点を見出し、とりあえず母親を泣かすと言う主人の意見で、和解したような、しなかったような。

しかしながら、その日以来、その次男との関係性は俄然良くなり、あの一件がキッカケなのかもしれない。

気難しい次男とは、夕飯のことしか話題に上らず、娘ほどは喋らない毎日だったけど、あれからはとてもお喋りするようになった。本当にただのお喋り。たわいもないお喋り。彼の好きなドラゴンボールの相関図の話や、ウルトラマンの大人向けなシュールなストーリーの話や。

彼の喋りは、私をとてもしきつめる。次から次へと湧いてくる私の疑問を、彼は素人にも分かりやすく解説してくれる。次男のそんな能力を初めて知る母親である。二十八年間もずっと一緒に生きてきたのに。私が産んで、こままで育てたのに。ずっと「コミ症」だと思ってた。会社では、社会では、一応それなりに立派に生きてんだと思った。

それからは、私の考え方の良くない所を教えてくれるようになった。建設的な思考力、感情だけでは相手の心は

動かない事を教えてくれる。

何も出来ない幼なかつた次男が、大きく大人の男性に急成長していた。私が、私だけが覚えていなかっただけで、実は少しずつ大人になっていたのかもしれない。

あの日の大喧嘩が、こんなラッキーをもたらしてくれた。次男の成長に気づかせてくれた。喧嘩してみても良かったとさえ思える。何より、やっぱり娘は、女の子は違うよねと、よくママ友と話すけど。今は、次男が二階から降りて来ると、ほんの少しだけ嬉しい。ちよつとお喋りしようかと思える。以前は、次男の階段を下りる時の、特徴的なあのリズムが正直うつとうしかった。子供三人、分け隔てなく育ててきたし、ひいきする気持ちも無かつたつもりだったけど、きつとどこか気難しい次男とのお喋りには疲れていたのかもしれない。

そんな彼と、今は青天の霹靂。ちよつとウケたかなと思ひながらの喋りの時は、俯き加減ながら、次男の口元は少し緩み、ほんのちよつとだけニヤつとする。私だけが知っている。本人さえ知られていることを知らないであろう。それは母の特権。全てお見通しである。ママが自分の話に食いついてくる喜びを感じて、不器用ながら必死で話してくる幼きままの君が愛おしい。それは、まだあなたが小さかつた頃、近所の公園で、いつもお友達にやられたつばなしの君が初めて、お友達のスコップを取り返した時の、密かなママの隠れたガッツポーズ程の喜びと愛おしさと同等で

ある。

やっぱり、あなたが私の二番目として産まれてきてくれて良かった。私をママと選んでくれて良かった。

最近、親ガチャなる言葉が流行っているけれど、あなたは私をどんな風に思っているのかしら。私は、あなたにとって当たりかな。私はあなたで当たりです。心からありがとう。

明日は、家を出ている長男にラインでもしてみようかな。明後日は、娘と買い物にも出掛けようかな。

母親になれて良かった。私の人生も、私の育児も、まだ終わってはいない。また何か起きたら、泣きながら子供達と闘おう。たとえ、みんながもつとオジさんオバさんになつても、ずっと私の大切な子供。いつでもママはあなた達を育て直す。道を誤っていたら、それを正してあげるのが、母親である私の使命。

おちおちしてられない。いつまた大喧嘩をしなければならなくなるのかも分からない。いつでも、あなた達と闘えるように、テンション高く、みなぎるパワーを持ち続けなくてはならない。

現在五十六歳、幸せなことに、自由気ままな専業主婦。専門職は子育て。

家族のため、ママは太陽であり続けよう。

蔵の町の守り人

校^め條^{じょう} 清

川越市役所に一步入ると、Sさんが人懐っこい笑顔で、「よく来たね」と迎えてくれる。脳裏の中で、だが。

Sさんは、私が十五年ほど前に勤めていた川越市内の介護施設の男性利用者で当時九〇代の半ば。

「俳優だったのですか？」と尋ねたくなるほどのイケメンで、唱歌「富士山（ふじの山）」が大好き。

レクリエーションで、面会にいらした奥様と歌集を見ながら、「あーたまをくーものうーえにだし」と嬉しそうに歌っていた。

Sさんの現役時代を知ったのは、ちょっとしたきっかけだった。

六月の日曜日の昼下がり、ドライブに出掛けた。

利用者は、施設の車三台に分乗し、Sさんは私がハンドルを握るワゴン車に奥様と乗られた。

出発前の職員との打ち合わせで、今回はそれぞれ三〇分ほど好きに走り、戻ることにした。

「行きたいところはありますか？」と聞いたらSさんが、「川越市役所」と即答。

奥様は驚かれ、「日曜日だからお休みよ」と話すとSさんは、「そうか」と照れ笑いを浮かべた。

私は、「せめて外観だけでも」と市役所に向かった。

市内に自宅のあるSさんは、市役所職員時代が蘇ったのか、過ぎゆく車窓の風景に、「おお」と小さな声を上げ続けた。

その後、市役所を裏から見上げる初雁中学校付近で停めると、Sさんは体を震わせた。

涙が溢れ、頬で糸の川と化した。

奥様が、「夫は、川越市役所で土木の仕事をしていました」とSさんの職員時代を振り返り始めた。

「道路を見てくる」と休みの日でも自転車川越市内をまわったという。自動車だと道の状態が分からないから、ペダルを漕いで丁寧に確かめた。

「汗みずくで帰宅してきて『すぐ直さないと』と言っていました」

せっかくの休日も仕事漬けだったのか。休日は遊び一色の私は首をすくめた。

ふとSさんを見ると、「やめてよ」と言うように苦笑いを車窓に映した。

また写真が趣味で自ら現像もしていた。若い人たちを自宅に招いてその技術を教え、天井を振る舞ったそうだ。

若者と接するSさんの姿を想像すると、私も弟子入りを志願したくなった。

Sさんは、今、雲の上におられる。川越の道を気にして
るのだろうか。

顔を上げ、「おかげさまで安心して歩けますよ」との感謝をお伝えしたい。ずっと。

五月の眺め

橋 本 美恵子

初夏の濃さを増す木々の緑の中で、楠の若葉の明るい黄緑色がひととき眩しい季節です。

大阪の淀川左岸、門真かしまの地域は古代河内湖が湿地帯となり、湖沼が点在する肥沃な農地が長い時代を経て、現在は楠の巨木が多く残る住宅地域になっています。

門真南駅で地下鉄を降りて、うらうらとした日差しに深く息を吸って歩き出すと、郊外の民家が続くなかに古い神社の大きな楠が見えてきます。神社の近くの古い構えの家にある「葺島ひんじまのくす」は庭に大きな日陰を作って太い枝先を古川に延ばした、樹齢四百年の巨木です。

古川左岸を北への小道を辿り、突き当たった交通量のあたる十六号線道路を右折し、東の方向にしばらく歩くと、家々の屋根の連なりの奥に遠く、こんもりと泡立ったような

樹冠の萌黄色の大樹が目に入ります。

辿り着いた門真三島神社みつしまの楠は樹齢千年以上と思われ、最寄り駅から遠くの無住らしき神社なのですが、名を知られているらしく、楠を眺めに沢山の人が訪れています。

境内で言葉を交わした人は「大阪駅からバスで一時間かかった」とのこと。本殿脇の注連縄しめなわをめぐらせた、樹高二十四メートルの太い幹を眺め、なでて思うのは、なぜ人は樹齢何百年の古木に心ひかれるのかです。人間の生命いのちのサイクルを越えて生きる巨木に畏敬の念を抱き、大樹に「永遠」を具現した形を見るからなのでしょう。

神社の北側にまわると小さな公園に出ました。公園の説明書きには、もともとは葉種を商う旧家の屋敷跡で、後継者が絶えた平成二年に記念公園になったとあります。公園の築山や涸れた池の名残りの場所からは、三島神社の千年楠の景色を圧倒する迫力のある後姿を見る恰好です。

三島神社の北、京阪電車萱島駅かよしにも樹齢七百年の楠があります。昭和年代の京阪電鉄高架化工事の際、近隣住民の運動が実り萱島神社の楠を残す事になったそうです。

その結果、いまや二階ホームの屋根を越える樹高二十メートルの大きな枝葉の茂みが、五月の風と日差しに、遠目にも白く輝いてゆれています。

萱島神社からほど近くの島頭しまがしら天満宮にも、注連縄が張

られた四本の大楠があります。神社の二つの石鳥居をくぐると、茂る若葉に埋もれて小さな本殿が見えます。瓦屋根の窪みに茶色の枯葉を積もらせて、誰もいない神社はひっそりと鎮まっています。社殿の階段に座り見上げると、大楠の幹が龍の鱗模様をなして、緑の葉群れの間にうねる黒い枝となり、空に向かって延びているのが見えます。

柔らかな若葉の緑越しに高い青空を眺めていると、遙か昔の大地の広がりの中にいる心地です。

三島神社の東、今は高架の第二京阪道路回りでは、全長十七メートルもある巨大な弥生時代のケヤキの刳舟くりふねが地表下一・四メートルに埋もれていたそうです。今いる時間を忘れて、遠い昔に思いを馳せるのは心穏やかな楽しいひとときです。

太古を思う東の間から現実に戻ると、最近子供達が口を揃えたように、私が人の話をきいていないと言ったのを思い出しました。大人になった子供達が、歳をとるにつれ、母親が独善的になるきらいがあると確認しあっているような気配です。そうかもしれないとの自覚はあるのですが、考えてみると昔から相手の心情に思いを馳せたり、静かに相手の話を聞く事が苦手だったような気がします。

過ぎた歳月に思いを巡らせると、いまは亡き父の昔の言

葉が脈絡なく浮かびます。養子を取りながら繋いできた旧家の長男である父が「子供の頃はいつも、塀の傍の槓の木に登ってひとり外を眺めていた」と話してくれたのです。

時を忘れて景色を眺めているのが好きな私の気質は、親ゆずりなのかと思いますが、記憶の中の父は私と違って、九十歳を過ぎても穏やかに人の話を聞く、静かで寡黙な父親なのでした。

幼い頃に一度だけ行った父の故郷の家は、暗い土間があり、奥の明るい中庭の井戸に赤いカラスウリがからまった田舎の家だったのを覚えています。その父の生家もとつくの昔に跡形もなくなり、屋敷跡の槓の木が市の保存樹で残るだけです。

父の登った槓の木は、ここで暮らした人達の月日を越えて日々移ろっていく時代のただなかに、ずっと立ち続けていくのでしょうか。

推しと絵日傘

佐藤 智子

桜満開の艶あでやかな樹々を見上げる時、可愛くてカラフルな絵日傘がいつも思い出される。実用としての日傘でなく、女の子の玩具の部類であろうかと思うが、和紙で出来てい

て、傘いっぱいに花々や着物姿の女の子が彩り豊かに描かれて飾り物としても楽しめるものである。以前は観光地の土産物店には、大中小のサイズのこの傘が壁一面に並べられていたものだが、この頃は見掛けることも無くなった。私にとっては幼い日の忘れ難い記憶の絵日傘である。

今年も各地から桜便りが聞かれる頃、"まちのあかり"がとてもきれいな「ヨコハマ」と「ブルーライトヨコハマ」の曲が流れてきた。何十年前だろう、大ヒットしたこの曲を歌っていた「いしだあゆみ」の計報をテレビは伝えていた。当時の若さ溢れる彼女の映像と共に、曲が妙に心に沁み込んでくる。甘く切ない旋律にのって、ビブラートのかかっていない言葉が、メロディーにしつとりと張りつくように伸びて何とも快い。

いしだあゆみの熱烈なファンだった先輩が、いつも大騒ぎしていたのも思い出された。イベント、コンサート、映画と欠かさず出かけ、今でいう「推し活」に励んでいた。

今、三十代四十代の三五%が推し活をしているという。いつの時代も最^{ひき}肩のスターを推す人達は大勢いる。お気に入りの役者の顔を描いた団扇を振りつつ、歌舞伎役者に声援を送った江戸時代の人達、そして私の年代では、掲載雑誌に時を忘れ、映画を観賞し、意を決してコンサートに出かけ、プロマイドやグッズを少しずつ集めて、ささやかに満足し、多くは離れた所から心いっぱいの応援を送ったものである。今はインターネットの時代であるから推し活も

裾野が広がって、若い人達の「推し」への気持、入れ込み方は時間的にも経済的にも、個人の生活の中になりに入り込んでいくようにも思われる。

私にも推し活に似た意気込みで、大好きなスターをこれぞとばかり論じた時があった。遠い昔、中学生の頃である。映画館は賑わっていて、時代劇も盛んだった。

東映の中村（萬屋）錦之助、大川橋蔵、大映の市川雷蔵の活躍が目立って、学校でも女子の人気を分けていた。私の推す市川雷蔵は少数派だった。人数では負けても論戦では負けじと、その魅力を捲^{まき}したてていたのを覚えている。

歌舞伎の世界から映画界へと移ってスターとなったハシリでもあった。涼やかな切れ長の目、重厚な声は、娯楽映画ながら、何か深い洞察力が感じられ、凛とした雰囲気^{きんき}が漂^{はら}っていた。「雷さま」（ファンはそうも呼んでいた）こそ俳優としても、人としても本物ぞと心の中にあった。スクリーンと素のギャップもファンにとっては喜ばしいことであつた。公達^{きんたち}の役も、殿も侍も、浪人も町人も、ニヒルな役、ヒョウヒョウとした役柄、どんな役も何を演じても、染まりきり、そこにふと感じられる品格に私達は酔っていた。若かったとはいえ、あんなにエネルギーギッシユなファン心理が持てたのは、今思えば恥ずかしくもあるが、愛おしい時間でもあった。その一番の事件は、中学三年での京都大阪への修学旅行のことであつた。

京都での自由行動の時間、太秦^{ふしな}の大映撮影所に行つて、

雷さまに会ってきたという嘘を、仲間と共に真しやかについでしまったのである。信用されるはずも無いと思っただので、冗談のつもりだったのであるが——「そう上手く会えるもんじゃあないけどね」と疑う分別のある友人もいたけれど、「本当！私も会いたかった、一緒に行けばよかった！」とあれこれ質問攻めの友人も結構いて、こちらも面食らいながら慌てて、小さな嘘を重ねて楽しんだ。遊び心の嘘に反応してくれた友人達に対して、満足と罪悪感の交り合った奇妙な感覚が残ったのを覚えている。

その後、京都で学生生活を送ることとなり、東大路に面した智積院と妙法院の間の、豊国廟にも続く坂道を、下宿に帰る折の事であった。途中の新日吉神宮の境内で、映画の撮影をしているようだった。よくある事なので、何の映画だろう位に通りすがり眺めていた。何と、「眠狂四郎」の撮影だった。「まさか？えっ！雷さま!!」

丁度休憩中のような感じだった。ゆったり椅子に座っている黒衣着物の狂四郎姿の雷さまを、近すぎる距離で見つめている私がいたのである。言い尽くし難いほど見事な雷さまのお姿、美しい横顔に惚れ惚れ見入ったものである。

どんな絵画より景色より素敵で、透명한オーラを放っている場面がそこに在った。これは天の思し召しに違いないと思ったことである。自分の推した個性光る役者の確かさに感動し、満たされた思いに包まれていった。中学の修学旅行で、雷さまに会ったという浅はかな嘘までも、消えて

いつてくれそうな、本当の出会いであった。

京都清滝の自宅で、一人静かに酒を味わい『沈思黙考』の雷さまを勝手に想像していたものだが、この事は案外当たっていたようで、素の雷さまのそういう姿も、私には推してやまない心地良さであった。

突然の事であった。市川雷蔵は、三十七歳という若さの中、病で旅立ってしまった。この世の儂さが一挙に押し寄せてくる思いに駆られた。そして、私の頭の中に、色の無い小さな絵日傘が登場した最初だった。

あつという間に手許を離れて、空に飛んでいく日傘を唯見つめている幼い私の、この上ない心細い表情が、切ないほどに思い起こされたのである。

五歳の頃、地域の親睦のバス旅行に、母に連れられ参加した時のこと。土産物屋さんで、欲しかった絵日傘を、それも思いがけず大きめのを買って貰えたのである。零れんばかりに桜の花と女の子が描かれていて、嬉しくて嬉しくて、バスが動き出しても、開いていた窓から、傘を差しかけていたのである。（当時の観光バスは、窓も自由に開け閉めできていた）

強い風が吹いて——あつという間に、絵日傘は、小さな手から抜け出て、高い空へと舞い上がっていつてしまった。おしゃべりで賑わっている母達にも言えず、泣くこともできず、空に消えてゆく『私の傘』を、一人ぼっちでじつと見ているしかなかった。この思いは、私の心の奥底に潜

み続けたようである。私の人生の中で、喪失の思いに捕らわれる度、遠くなっていく絵日傘を見つめている、不安と淋しさいっぱいの小さな表情が、脳裏に甦ってくる。その最初が、雷蔵の死をニュースで知って衝撃を受けた時であった。

雷蔵没後五十六年、遺された作品を観てファンになる人達も多いという。伝説の名優といえるのではなからうか。

プロマイドを飾ることもなく、テレビで再放送の映画もすっかり見逃したり、偽ファンのようであっても、雷蔵を推す私の思いは、静かながら心の中にずっと息づいている。この思いを大切にして、これからも、好きな作品をじっくり味わい尽くし「市川雷蔵」の本物のファンであり続けたいと思っている。

推し活はかわり具合の濃淡はあっても、日常のほんの外側で個々の人達の気持の彩りとなっていく事であろう。

人と繋つなぐ

豊 田 知枝子

毎朝六時過ぎ、いつもは気にも留めずに前を通り過ぎるだけなのに、今朝は銀杏の木の息を呑むほどの鮮やかな深黄色に思わず足を止めてしまった。そしてほんの一瞬だけ

ど見惚みとれてしまう。夜明けを迎えたばかりの白濁した光の中で悠然と存在感を放っていた。まるで、「御神木として九十年もの間、命懸けでこの神社を守ってきたのだぞ」とでも言わんばかりだ。

そんな力強い銀杏の木を横目に、神社に通い始めてかれこれ十年近く経った。住居を移して数日が過ぎたある朝、散歩の途中で、神社からラジオ体操の軽快な号令が聞こえてきたのである。参加して程なく「東京オリンピックの開催を全員揃って迎えましょう」という目標をめでたく達成したものの、オリンピックの年は、不運にもコロナ禍が重なり選手の懸命な頑張りに拘らず世の中の盛り上がり欠けたまま終わってしまう。けれどラジオ体操の会は地域の行事が消えていく中、コロナに負けず休みなく続いていた。そして人との繋がりを保ちながら規則正しく生活を維持出来たのは会のお陰といっても決して過言ではない。

出会う三年前に結成され優に十年以上も継続しているのである。率先してお世話されている伊藤さんの心意気があればこそと思う。毎朝、参加者の出欠を取り五十回参加するとお楽しみ券を用意され地区のお祭りや文化祭に使用出来る仕組みになっている。何よりも三歳の幼稚園児から九十五歳の参加者にとって年初の新たな目標になり元気に通った証になるのである。月初めに用意されるお知らせも工夫され体操の動きの解説や月の異称の豆知識も大いに役に立って楽しみのひとつになっている。

夫と私はお陰で様々な方と顔見知りになり挨拶を交わすようになった。もし参加していなかったら地域の人との交流もなく過ごしていたに違いない。

体操の集まりは過ぎ去っていく日々と共に緩やかに人も流れていく。来られなくなった人が居る一方、新しく参加され言葉交わす人も居てこの先どのように変化していくのか楽しみでもあり誰も予測出来ない面白さもある。

三年前に九十歳を超えた山田さんが新しく参加された。遠く熊本から川越に住む息子さん夫婦と同居の為に聞くが、年を重ねてからの転居はさぞかし大変だっただろうと想像する。早朝、杖をつかれていたものしつかりした足取りで付き添いなしで六時過ぎには定位置に立つておられる。

編物が得意で神社に行くと、年輪を重ねた素敵な笑顔で鉤針^{かぎ}で編んだティッシュ入れ、ベットボトルカバーの小物からベストや座布団カバーまで頂戴した。毎朝、お会いした次の日には編んだ作品をメンバー一人ひとりにプレゼントされる。編物を続ける根気と意欲に脱帽するが聞けば毎日のように手芸をされるとか。世間では手を動かす事は、認知症予防に効果的（脳の前頭葉が鍛えられ思考力、行動力を向上させる）と言われるが実に頭脳明瞭ひたすら長寿の道を歩まれているのである。

ある日、開口一番まるで少女のような表情を見せながら「昨日、毛糸を買いに行きよつと。手芸を続けているのは自分にとって薬と同じじゃけん」と熊本弁で。

今では言われた意味が理解出来る。手芸もラジオ体操も山田さんにとって生きる糧であり前向きな気持ちになれる方法なのかもしれない。

神社に通う日々、参加する子供の成長の早さに驚く。四人姉弟の姉二人が中学生になり三番目のむっちゃん、末っ子のゆつ君が大きくなり、毎朝元気な号令をかけてくれる場の空気を和ませてくれる。大人は体操をしながら笑いみがこぼれてしまうのである。春から小学生のせなちゃん、園児のゆなちゃん姉妹も参加して一段と賑やかになった。寒い朝、始めはぐずっていたが今ではすっかり慣れて大きな声で挨拶をしてくれる。二人をしつかり躰ている若いママをつい応援したくなるのである。

小学生の頃、父の転勤で名古屋に住んでいた。当時は宅地の開発が急ピッチで進められた昭和の時代で造成の為に、至る所に山を削った急な斜面があって足を取られながらよじ登っては得意気に眺めた記憶が。昔からの緩やかな坂に沿って古い木造の家が階段状に建ち、途中、左に曲がると平屋の家が横一列に並んで坂の隣接する角が借り上げ住宅の我が家であった。

坂道を更に上っていくと右手に大きなお寺が見えてくる。夏休みになると毎朝決まった時刻に近所の小学生が友達同志で楽しそうに喋りながらラジオ体操に通ったものだ。境内を囲むように木々の葉が青々と茂り地球温暖化の影響を受けた酷暑の現在では考えられない真正正銘の天然のエア

コンが効いた涼しい夏の朝であった・・。

引越しを終え近所を散歩していると、神社から懐しいラジオ体操の放送が聞こえ郷愁を覚えたのは名古屋のお寺の風景と酷似していたからだ。未だに印象深く目を閉じればその時の情景が瞬時に浮かぶのである。そして何十年経っても似た景色を眺めながら、ラジオ体操を繰り返す自分が居て不思議な感覚を覚える。まるで時空を越えて小学生に戻った気分である。

今年の春、神社の銀杏の木の下が激しくとうとう二本とも根元から切り倒された。夏の日、日差しを遮ろうと葉陰を見つけては体操をしたことや見事に黄葉した銀杏を思い出し悲しかったが、やがて根元から元氣なひこばえ（眠っていた芽が起き出したもの）が育ち大人の背丈まで伸びた清々しい姿を見ると逆に励まされ勇気づけられる毎日であった。

同じ時期、我が家の目と鼻の先にある集会所の木と雑草が厳しい暑さで伸び放題になり、九月に入っても勢いは止まらず、まるでジャングルのように茂ってしまった。縦横無尽に枝を伸ばし、おまけに蔓植物が覆い被さり絡んで集会所はすっかり寂れた雰囲気を漂わせ始めた。ゴミ収集日に前を通る度に見えぬ振りをして数ヶ月、もはや限界と早朝から草むしりを決行。すると体操で顔馴染みになった岡島さんが通りがかり、

「この暑い日に草むしりは大変ですね。ご苦労様です。と

ころでこちらの集会所の木の剪定はどうなってますか？」

「秋に町内会の方が来て刈り込まれますが、今年は酷暑でご覧のように木の伸びが早く思いきって今から切ろうかと」「ちょっと待って下さい。私が明日切りますから」内心半信半疑で聞いていたが翌朝、言葉通り自転車に乗って植木バサミを持参された時は正直驚いた。このような親切な方がいるのかと。「事前に会長に許可を取りましたから」と暑い中、手際良く切ってくれ次の日も。すると集会所は瞬く間に以前の姿に戻った。所構わずお菓子の包み紙やマスクが落ちていたが、やがて見なくなり、綺麗な場所にゴミは捨てられないのだと改めて納得した次第である。

コロナ以降、行事の簡素化が進み人の生き方の意識が変化してしまったが、体操の会は変わらず人との出会いを与えてくれ健康の為とはいえ人は交流を求めて集まるのではないだろうかと思うのである。

珈琲ブレイク

佐藤正子

純喫茶

生まれて初めて珈琲と出会ったのは昭和三十年代。私が小学生の時だった。

ふるさと群馬県の小さな町に、はじめて「純喫茶」ができた。「純」とは珈琲や紅茶だけを提供しアルコールは扱わない喫茶店という意味らしい。

この店に母は私を連れて行ってくれた。店の中はテーブルも椅子も洋風で壁には絵が飾っており、クラシック音楽が流れていた。いつも割烹着姿で化粧気のない母が、この日はよそ行きで、うっすら口紅をつけていた。初めての珈琲は私にとっては苦いだけで、角砂糖（正方形の小さな砂糖）とミルクをたっぷり入れて飲んだ。母はおいしそうに飲んでいた。なんだか嬉しそうだった。珈琲は苦かったけれどいつもと違う母との時間は楽しかった。

茜屋

昭和も最後の頃、三十代になっていた私は、東京タワーの近くで働いていた。職場の近くに茜屋というコーヒー専門店があった。珈琲一杯で千円だったからけして安くはないが、職場の同僚たちと月に一、二度ここでおしゃべりするのを楽しみだった。珈琲の種類もたくさんあったが、珈琲の味よりこの店の珈琲カップ（&ソーサー）をお客のイメージに合わせて選んでくれることにひかれていた。二十〜三十セット。いやそれ以上あったと思う。外国製や日本製の有名ブランドばかりだった。「今日の私のイメージはこの花模様なの?」とか「私のイメージって、ピンクなんだ」と運ばれてきたカップの模様で話題がもりあがった。

ブルーマウンテン

平成に入り四十代になっていた私は、用事があって出かけた初めての町で、香りに誘われ小さな珈琲店に入った。テレビや小説に出てきそうな落ち着いた店で窓際の席に座ってメニューを見ると一番上のブルーマウンテンの文字が目に入り、それを注文した。ゆっくりドリップした珈琲は、今まで飲んだ珈琲の中で酸味も渋みもなく一番爽やかな味わいだった。ゆっくり飲み終わるとマスターが「コーヒーお好きなんですね。もう一杯いかがですか」と声をかけてきた。私は珈琲好きというほどではないが、思わず「ええ」と応えお代わりの一杯を味わった。会計の時、店主に「ブルーマウンテン二杯分で……」と言われて内心「えっ?」と叫んだ。店主のサービスだと思い込んでいたからだ。

独歩

川越に引越してきたときはまだ平成だった。大通りを一本はいったところに「独歩」という名の珈琲店を見つけた。店の中には絵画などはなかったが、古いステレオから流れるクラシック音楽もかかっていた。初老のマスターは珈琲を注文すると黙って淹れてくれた。お客は男性が多く背広姿の人もしれば、ラフな格好の高齢の客もいた。誰も店主同様黙って珈琲をあげわっていた。私は夫と散歩の道すがら月に一、二度訪れた。ある日、いつものようにその店の前を通ると「閉店」の張り紙があった。何の理由も書いてなかった。張り紙には「誠に勝手ながら五月十六日を

もって閉店とさせていただきます」と書かれ顧客への感謝のメッセージがつづられていた。「独歩」の名にふさわしい去り際だと思った。

Laurel café

川越には珈琲店は少なくない。それでも、なかなかお気に入りの店が見つからなかった。

最近、珈琲の飲める感じのいい店をみつけた。その店は、夫が健診で通う病院のちかくにあり名前は「Laurel café」。店の突き当りは公園で落ち着いた雰囲気だ。しかも珈琲一杯が百円。珈琲もおいしかった。この価格は医療系専門学校の学食の中のカフェだからだ。学生が授業を受けている間はだれでも利用できる。その日は、夫の診療が終わって十時過ぎに店に入ると客は私たち夫婦だけだった。珈琲を飲んでいると、何組か私たちと同年代のご夫婦がやってきた。お互いに小声でおしゃべりを楽しんでいる。常連さんのようだ。

いままで夫の健診に付き合うのは何となく気が重かったが、これからは一か月後の健診が楽しみだ。もちろん、帰りに、ここでおいしい珈琲とゆったりとした時間をすごせるからだ。

ブルーマウンテンや有名ブランドのカップもいいけれど、ゆったりした店内で、紙コップでも気軽に飲める珈琲ブレイクもいいものだった。

私の日記帳

粕谷 泰雄

東京に坂が多いわけ

六月の涼しい日を選んで、友人と自転車で東京を探訪した。羽根倉橋から荒川サイクリングロードを走り、鹿浜橋を降りて市街地へ入った。先ず、豊島区の雑司が谷旧宣教師館へ向かった。目的地までの雑司が谷霊園の周囲の道路は、狭くアップダウンが多く、曲がりくねっていた。

次に、文京区の永青文庫を目指した。首都高沿いの道路を走り、護国寺を過ぎ、不忍通りから目白通りに抜けた。道路は、上り坂が多く、自転車を下りて押して上る場所もあった。永青文庫前の坂の名前は、胸突坂であった。

見学後、気合を入れ直して外苑東通りを走り、新宿区立歴史博物館へ向かった。ここには、江戸時代の水道施設に使われていた石樋や木樋が並んでいた。

新宿通りを走り、新宿区立四谷図書館敷地内にある水道碑記と四谷大木戸跡を見た。帰路は明治通りを走り、新宿池袋、王子を抜け鹿浜橋に戻り、川越に戻ってきた。

東京の真ん中を走り、改めて坂の多いことを体感した。一説によると、二十三区内には名前が付いた坂は八〇〇以

上もあるという。九段坂、乃木坂、道玄坂、神楽坂などはよく知られている。暗闇坂、幽霊坂、おいはぎ坂、鼠坂、鉄砲坂、のぞき坂などユニークな名前の坂もある。港区にあるまぼろし坂は、最大勾度二九%の激坂である。

東京都の地形を見ると、東部には低地が多い。武蔵野台地と呼ばれている西部には河川によって刻まれてできた谷があり、商工業地や住宅地が広がっている。糎谷、雪谷、渋谷、千駄ヶ谷、富ヶ谷、幡ヶ谷、市ヶ谷、四谷、阿佐谷、世田谷、祖師谷、入谷、碑文谷、粕谷などの地名がある。

多くの大小河川によって刻まれた谷が複雑に入り組んでいるため、東京には坂が多いことがわかった。坂道を自転車であつてみると、坂の高低差の変化に足の筋肉が敏感に反応することがよくわかる。走ったコースの中で最低標高は鹿浜橋の3mで、最高標高は新宿駅の三十五mであつた。高低差三十二mの範囲で、上り下りを繰り返したのである。今回のサイクリングでは、総延長九四kmを走つたが、平地をこぐのに比べると二倍以上のエネルギーを消耗したように感じた。とびっきりいい汗をかいた。

図書館巡り

一〇月に入り、読書週間が始まつた。私は、通年図書館を利用してゐるが、特にこの時期になると、閲覧席で本を開き、静かな空間の中で満足した時間を過ごしてくる。

川越市立図書館は四館あるので、図書館巡りを楽しむことができる。令和三年度の蔵書数は、中央図書館では約五

〇万冊で、楽譜を蔵書していることで知られる。西図書館では約一八万冊で、録音資料が充実している。川越駅東口図書館では約七万冊で、CDやDVD資料が多く、他の三館の休館日が月曜日であるのに対し、火曜日が休館日である。高階図書館では約一二万冊で、閲覧席が多く設けられている。それぞれ特色を活かして運営されている。川越市でも令和三年三月から電子書籍サービスを開始したので、これも頻繁に利用している。市内にある東京国際大学図書館には、川越市図書館貸出カードを提示すれば入館できる貸出はできないが、仕事上必要な専門書を閲覧してくれる。

遠方に出かけたときも、図書館巡りを楽しんでいる。三重県の桑名市立図書館に行つたことがある。民間資金を利用して建設から運営までを民間事業者が委ねる「PFI方式」を全国で初めて採用した図書館である。蔵書数は約三八万冊で、一冊ずつICタグが付けられ、貸出しには自動貸出機を利用する。開架書庫にない図書を見たいときは、職員に依頼し操作してもらつと、数分後に自動的に図書が出てくる。ガラス張りの明るい空間が印象に残つた。

岡山県の高梁市立図書館に立ち寄つたことがある。JR高梁駅に直結している。民間書店とコーヒー店が併設され、指定されたエリア内限定ではあるが、コーヒーを飲みながら閲覧できる。平成二九年二月に開館し、休館日はない。蔵書数は約一四万冊で表紙が見られるように並べられた書架が目立つた。うらやましく思つたのは、ゆつたりとした

椅子やソファに座り、静かな空間の中で落ち着いて読書が楽しめる環境が整備されていることであつた。

図書館職員の努力の成果を見ることも興味深い。図書館の顔ともいべき入口に近い場所に、司書の方が書いたと思われるポップが付けられたお薦めの図書が並んでいる。

母校の図書館を巡ることもある。高校の図書館では、受験用図書が目につく。大学図書館では、学生時代によく利用したお気に入りの席に坐つて、当時を懐かしんでくる。

余談であるが、令和四年五月から国立国会図書館では、絶版等の理由で入手が困難なもの約一五三万点を個人のスマホなどで閲覧できるサービスを始めた。

図書館は、知識の宝庫である。図書館巡りは、これからも楽しみながら続けていきたいと思っている。

普通の生活の有難さ

二月の朝のこと、いつものように妻から「できましたあ」の声がかかり、茶の間で朝食のお膳に向つた。一晩寝かしたカレーライスであつた。私は、カレーライスは好物で、時間がたったものほどおいしく感じる。ところがその日は一向に食欲がわかないのであつた。ほとんど手を付けず、ヨーグルトを食べて終わりにした。

妻から体温計を出してもらい測つてみたところ、三八度五分もあつた。私の平熱は三六度台であるので、水枕を用意してもらい寝ることにした。三日前、風呂の中で耳を指でかいたことで、左耳に熱があるのが感じられた。左向き

に寝ると、心音が絶え間なく聞こえてきた。

新型コロナウイルスに感染してしまったのではないかという考えが、熱のある頭の中を駆け巡つた。潜伏期間とされている二週間前の行動を思い浮かべてみた。

感染すると味覚が失われることを聞いたので、最中を食べてみた。濃密な甘さを感じた。まだ安心できないので、塩をなめてみたところ、確かに塩辛い味覚があつた。夕食には、卵入りのおじやとリンゴを食べて、就寝した。途中トイレに起きたが、下着が濡れるほど汗をかいた。のどの渇きがあつたので清涼飲料水を飲んで、再び休んだ。

翌朝起きて、体温を測つたところ三六度二分に下がつていた。二度計測したが、同じ値であつた。体のだるさ加減は治まり、せきや鼻水も出なかった。両目の瞼の上に赤みがあり耳が腫れていたの、耳鼻科へ行つた。診察の結果、外耳炎が原因の発熱であることが分かった。

「有り難い」とは、存在が稀で、なかなかありそうもないという意味である。日常生活は、起床し、食事をし、活動し、団欒を楽しみ、就寝するという繰り返しである。しかし、このリズムがどこかで変調をきたすと、途端に精神的に不安になり、肉体的に苦痛を感じる。新型コロナウイルス感染症は沈静化しつつあるが、まだ油断できない。

私は、普通の生活が送れることは何ものにも代えがたい有り難いことであることをわずかに二日間ではあるが、体調を崩したことで心の底から実感した。

両親と過ごした最期の時間

スマイリーのぶ

介護はすばらしいもの、美しいものだと思う。

三年前の正月、突然、親父との別れがやって来た。入院先の川越市内の病院からまさかの電話が……。私はすべての予定をキャンセルし、病棟に駆け込んだ。親父は危篤状態だった。せめて最後のお別れは、住み慣れた自宅のリビングで、家族やみんなで囲んで、あたたかく見送りたい……。それから二日後の夜、親父は何とか自宅リビングへ。

家族、ケアマネ、訪問医師、看護師らが、すっかり弱々しく小さくなってしまった親父を待ち構えていた。「あと数時間もつだろうか……。」私はなりふり構わず、友人知人に最後のお別れの時間を呼びかけた。「一分一秒でも長く生きていてほしい……。」最後の願いだった。そして深夜にかけて、友人知人が我が家の小さなリビングに駆けつけてくれた。親父の大好きなお酒に囲まれて、大宴会が始まった。しみりと静まり返った、あまりにも寂しいお別れは、親父らしくないので、みんなの明るい笑顔に包まれながら旅立たせてあげたかった。

そして翌日の朝、信じられない光景が……。我が家に戻

って来たことを感じとったのだろう、親父の表情が別人のように明るくなっていた。訪問医師も看護師もみんなみなビックリしていた。それはまさに最後の奇跡だった。そして、次から次へと来訪者が絶えず、親父が横たわる介護ベッドの前で、音楽ライブも始まった。みんなのあたたかい気持ち、親父の心にもきつと響き渡っていただろう。

そして帰宅してから三日目の朝、私はいよいよだろうと予感した。朝から私は、友人が差し入れてくれた金ぶんに入りの日本酒を、親父にたっぷりなめさせてあげた。親父はまるで少年のように、それはそれは最高に幸せいっぱいな明るい最後の笑顔だった。そして午後三時過ぎ、みんなでお茶していると、親父の呼吸が目の前で、ついに止まってしまった。親父の大好きな大相撲中継を楽しむ直前だった。九十一年六月、小さな人生を全うした、親父のすばらしいエンディングだった。その日の夜、まるで凍りつくように冷たくなった親父の小さな体を、私は抱きしめて朝まで眠った。弱くて頼りない小さな親父だと、ずっと思っていたけれど、最後の三日間は歯を食いしばり、「生きてやるぞ!!」と苦しみと闘い続けていた。その勇姿は、生涯忘れることができない。世界最強の親父だった。本当にありがとう。

そして翌年、親父を追いかけるかのように母親との別れがやって来てしまった。まさかの脳出血。まるで日本の太陽のようにいつも明るくて、やさしい自慢のかわいらしい

母親だった。しかしながら晩年は、不運な寝たきり全介助生活だった。私は職場の老人ホームを介護離職し、二年七ヶ月の在宅介護を続けた。一日三回の経管栄養、そして母親は痰がらみがあまりにも酷く、吸引は日々二十四時間体制だった。週三日の通所リハビリに訪問看護。訪問リハビリもお願ひし、ケアマネさんをはじめ、とにかくにもみんな必死に、母親の小さな命に全力で寄り添ってくれた。そして何よりも地域住民のすばらしき仲間たちが、大きな心の支えになってくれた。

私の少年時代、母親は自宅リビングで、エレクトーン教室を経営していた。子供の頃から音楽が大好きだったようだ。在宅介護生活中、我が家の小さなリビングが音楽会の会場となり、たくさんの夢人たちが集まってくれた。そして母親の小さな命があと数日、あと数時間となった時でも続々と楽器を持って、我が家の小さなリビングにやって来てくれた。みんなのあふれるおもいは、苦しみと闘い続けている母親の心にも確かに響いていた。

そして毎年恒例、美しい桜の花が咲き乱れる直前に、母親は私の腕の中で旅立って行った。私はいつまでも母親の小さな体を抱きしめていた。八十八年七ヶ月。母親も小さな命を全うしてくれた。本当にありがとう。

両親の希望通り、我が家の小さなリビングで、家族やたくさんの方々に囲まれて、両親は安らかに旅立って行った。今振り返ると、両親に寄り添った在宅介護生活が、

私の人生の中で一番幸せな時間であり、未曾有の壮大なドラマだった。そして、愛、家族、命。人生で最も大切なものを、私は両親の在宅介護から学んだ。世界一の両親に産んで育ててもらったことを誇りに思い、これからの人生を精一杯歩んで行きたい。両親のエンディングに寄り添って頂いたみなさん、心からありがとうございました。

「手作りテニス」を楽しんで四十年

渡 邊 明

霞ヶ関駅近辺のスナックで知り合った同年代のサラリーマンとテニスを始め早、四十年近くになります。

年々メンバーの数も増え数年経った頃には、ちょうど十名にまでになり、越生にある厚生年金休暇村(当時)で一泊二日の合宿することとなりました。その折、第一回総会を開催し、tennisのtenと十名のテンとをひっかけて「クラブ・テン」と会は命名されました。

スタート時から毎週土曜休みの二時間から四時間、御伊勢塚コートをはじめとしてほとんどの市営コートを利用させていただけてきました。

最近になって会員全員が現役を引退し平日も集まれることに気づき、ここ数年は火曜日と金曜日のインターネット

抽選でコート確保できた日に汗を流しています。

埼玉都民とも呼ばれ、都心への通勤と仕事からくる心身の疲れをテニスとそのあとの飲み会で癒やしてきました。

これまでに、転居された方、残念ながらご逝去された方もあり、メンバーの増減・入れ替わりもありましたが、現在八十歳台が五名と七十歳台五名。そして最近入会の六十歳台後半の計十一名の会員構成となっています。

仕事の現役時代も、引退後も、健康維持のためにテニスという運動をいかに活かしてゆくか。上手い人、そうでない人でも、又途中入会の人であっても、目的は一つ。

練習試合形式に工夫をし、機会均等に全員の出番があり同じ量の汗をかく。公式の対抗競技には出ないと決め、従ってそれに備えての偏りかねない特別な練習をすることもなく、仕事と家庭を犠牲にすることもないように、会の活動の在り様にはお互いに気を付けてきたつもりです。

プレイ後の飲み会で少々度が過ぎたこともないではないですが、皆比較的長寿でテニスを続けてこられている現状から、運動と会話が心身の栄養となってきたのは間違いないと信じています。

山王コートや安比奈コートそして御伊勢塚コートといった市営のテニスコートをこれまで利用させていただいてきました。

これらのコートを無料であるいは安価に、又、使い勝手よく利用することができました。そのことが我々のオープン

ンで柔軟性のある会として長く続けてこられた大きな要因であったことも間違いありません。川越市政に感謝する一点です。

「クラブ・テン」は昨年十月、越生で第三十二回合宿を行いました。今年四月には第三十三回総会を開催。

令和六年度活動報告・決算。令和七年度予算・行事及び役割分担などが例年通り審議・決議され、年会費も一会員当たり二千円も維持されることとなりました。コート代とボール代に充てられます。

六十歳台の新会員の加入も正式に承認されました。

日頃のテニスプレイや飲み会を通して気心の知れた仲間が力を合わせ独自の工夫もし、この会を育ててきました。

私自身も四十歳台の血気盛んな仕事人間だったころから八十一歳になった今日まで、この四十年熟成の「手作りテニス」に育てられてきた気持ちです。

この間の家族の理解と協力を忘れてはならないでしょう。愉快な仲間そしてテニスコートにも大感謝です。

藤沢周平の周辺

小畔川 霞

藤沢周平のファンは多い。人間的に魅力あふれた作品が多い。「蟬しぐれ」など時代小説に登場する海坂藩が一体どこにあるのかと真剣に探したことがある。このような経験のある読者が実は多いそうです。

探しても無駄です。決して見つかりません。架空の藩名ですから。実際は、生れ育った庄内であることはまちの地形や山や川などから明らか。

では、なぜ、海坂という名を使ったのでしょうか。

藤沢周平は、師範学校を出て学校の先生になりました。ある年の健康診断で当時不治の病とされた結核に冒されていることが分かり、東京の多摩地区の結核療養所で長期の療養を余儀なくされました。

病気とはいえ、若いしエネルギーがあふれています。やることがなければつらい毎日となります。そこで、何かの縁で俳句に打ち込みました。また、同人誌にも投稿するようになりました。その雑誌が「海坂」でした。

治療の効果もあり完治しました。そこで、山形県の学校の教職に復帰しようと教育委員会にうったえましたが、認

められることはありませんでした。

教え子に教室で再会することを楽しみに励み治療に努めていたのに、若き日の藤沢周平にとっては、たとえようもない絶望と悲しみだったと思います。

藤沢周平が後年作家として世に認められた後、かつての教え子と再会した時、教え子から「なぜ、私たちを捨てたのか」とせめられた時、答えに詰まってしまったということです。

教職に復帰する道を断たれ、やむなく、業界紙などに勤めるかたわら小説を書きました。

このような経験が小説に生きているんですね。

藤沢周平の性格というか信条というか、真つすぐに、コツコツ、誠実にどんな運命にあつても生きることこそ大切だ。たとえ運命が悲しい結果となつても。実はかような人が多いんだという現実から目をそむけない姿勢こそ彼の優れた資質です。

だから、藤沢周平が、一番書きたかったのは、人を踏み台にし、蹴落とし、おのれの名誉や欲を満たそうとする人と誠実に真面目に生き死んでいった人を対比させた作品です。それは、「白き甕」の正岡子規門下の二大歌人の長塚節と伊藤左千夫です。

藤沢周平は伊藤左千夫に厳しく、長塚節に対してはあたかも自分を見るかのように描いています。

また、小林一茶に対しては、事実を淡々と描いているに

すぎないけれど、かえってそのために、一茶の作品とは切り離れた人間そのものの「悲の器」を浮き彫りにしています。

老後、元気に過ごす

加藤 伸次

私は、現在、七十四歳。小学校に、学級担任、教頭、校長として三十八年間勤務し、定年退職後、幼稚園の園長として十三年過ごした。何とか無事に過ごせ、関わった皆様に感謝申し上げたい。私の教育信条は、「すべての子が親の宝」「後ろ姿の教育」「継続は力」である。校長を定年退職した三月、東日本大震災だった。夕方、テレビに映し出された光景は「現実なのか」と思った。定年退職と共に、地元幼稚園の園長になった。送迎バスが動き、登園時二時間、降園時二時間等、一日五時間、園児を見るため、外にいた。顔は日に焼け、健康的な生活である。卒園するまでに、縄跳びの前回しを跳べるように、園児と努力した。また、鉄棒や登り棒の遊具でいっぱい遊ぶようにした。そして、「○○ちゃん、おはよう」「○○ちゃん、○○が上手だね」などと、園児一人一人の名前を呼び、関心を持つようにした。学校でも家庭でも、子どもたちをほめ、自信

を持たせることである。そのためには、子どもたち一人一人をよく見、その子に寄り添うことである。日々、「師弟同行」。いっぱい話し、親も教師も、いつも笑顔で、一緒に頑張ることである。幼稚園に勤務した最初の頃、小・中学校時代の同級生、同年代の孫が通っていた。運動会などで会うと懐かしかった。そして、我が子が結婚し、幼稚園勤務の後半には、幼稚園の子どもたちが、私の孫の姿となり、子どもたちを見ていて楽しかった。遊びでも、夢中になり、一生懸命なことが、生きていくうえで重要である。現在、いじめ、不登校が大きな課題だが、これをやれば解決するというほど簡単な問題ではない。勉強がわかり、みんながお互いに相手を思う気持ちがあれば、安心して学校に通える。よく、「勉強だけではない」と言うが、勉強がわからないと、学校生活は苦しいのである。

そして、三年間にも及ぶコロナ禍で、世の中の状況は、大きく変化した。現在、少子化が進み、幼稚園の経営は厳しい状況である。「私の力ではもう限界」と思い、昔、一緒に勤務した、私より若い知り合いに、園長をお願いした。今は、自由な毎日で、一年が過ぎた。責任やプレッシャーのない生活が嬉しい。仕事に毎日通っていた時は規則正しく、健康にもよかった。緊張感があり、張りがあった。今は、毎日が楽だが、時折、働いている人に申し訳ない気分になる。高齢者のうつ病など、何となくわかる気もするが、「とにかく、老後は動くことである」と考えている。

退職後、私は、テニスの仲間に入れてもらった。大学時代、硬式テニスをしたが、今は道具がいい。ラケット面は広く、反発力があり、ラケットが扱いやすい。テニスは大学三年の夏休みの前で退部した。補欠どころか、ほとんどワースト3だった。高齢の今、テニスは、自然に体を鍛えてくれるいい運動である。隣のコートで、高齢の女の人のグループが楽しそうにゲームをしている。どうみても、卓球テニスである。そんなことを言うと、「あなた達も同じです」と言われそうである。

そして、ゴルフだが、四十歳頃より、年に四、五回、コースに出た。仕事が大変で、やらない時期もあり、上手くはない。ゴルフは大自然の中でプレーし、知り合いと話ができる。あるとき、こんなことがあった。雨上がりの時、一緒に回っていた人が、虹を見て、「あ・だ・き・み・あ・あ・む、だよね」と言った。虹の色の順が、赤・橙・黄・緑・青・藍・紫なのである。私と同じことを考えていたのである。虹の色の順を覚える必要があるかどうかは分からないが、こうすれば、簡単に覚ええられる。私は、教師をしており、心から、全ての子ども達に、毎日、毎日を笑顔で、明るく、元気に、生き生き楽しく生活してもらいたいと願っている。親が、「頑張れ、頑張れ」ばかりではなく、勉強も運動も、「真ん中でいいよ」と、我が子を安心させることも一つである。女の人には、友だちとランチなどと言うが、男はゴルフでもない限り、人に会ったりしない。

高齢になると、ゴルフ場までの高速道路の運転が心配だが、年をとってからこそ、ゴルフはすべきだと考える。

一方、テニスの時の話で、「彩湖まで自転車で行った」と聞き、ママチャリで行ってみた。彩湖まで、片道二時間程かかる。そして、荒川の自転車道から見る景色はすばらしい。彩湖は、昔、健康マラソンで参加したことがあり、懐かしかった。一方、川越狭山自転車道もいい。我が家から入間川にかかる八瀬大橋まで行き、そこから上流の終点、豊水橋まで行つた。途中二ヶ所、ダムがあり、湖のような広々した景色である。また、芝生の公園や運動場等、緑がいっぱいである。家の前に自然豊かな景色が広がり、リゾート地のような場所もある。水害は恐ろしいが、水辺の景色はいい。反対に、八瀬大橋から下流に向かい上江橋近くまで行き、自宅まで戻るというのもある。三月末、土手は、黄色い菜の花でいっぱいである。高齢者は、「人とのつながり」と「楽しみ」が大事である。テニス、ゴルフ、自転車などはいい。何でも、楽しみが幾つかあり、普段の生活で、「ちよつと楽しい」を積み重ねることである。

四月、深谷に住む初孫の男の子が小学校三年生になった。私の二女の子であるが、その初孫が何年生になるまで、仙元山公園を発着点とする深谷マラソンを走れるかと思う。この二月に五キロを走つたが、七十歳の部で、着順が真ん中より少し後ろだった。マラソン大会の参加は体力の指標である。体力をつけておけば、ゴルフ・テニスに生かせる。

自転車も同じ理由である。私は、中・高で野球部の経験はないが、七十歳まで、地域の壮年ソフトボールをしていた。若い頃より、ウインドミルで投球練習をしたが、ものにならなかった。プロ野球は巨人、箱根駅伝は東洋大学、実業団駅伝はホンダを応援している。応援するチームがいつも勝つわけではないが、年間を通して応援するチームがあると、結構、楽しめる。好きなチームを応援するのは、自分自身の姿と何か重なるからである。「推し活」というのであるが、好きなチームを応援することは、自分の生き方を応援してもらっていることになる。そして、日々、いろいろ試してみても、自分の体を通した実験である。選抜高校野球も、浦和実業がベスト4になった。全国の強豪を相手によく戦った。

終わりに、平均寿命は八十一歳だが、平均寿命まで生きられるとは限らない。私の兄も、七十四歳で、血液の癌により亡くなった。映画「釣りバカ日誌」のハマちゃん役などで親しまれた俳優の西田敏行さんも、七十六歳で亡くなった。私は、子どもの頃より、回遊魚みたいなものだった。以前は、一日中運動しても平気だったが、近頃は、寝ても疲れがとれない。これが年をとるということである。また、書くことは勉強であり、勉強は「若返りの薬」である。歩くなど、人生の最後は努力次第だ。高齢者の健康法の「一読、十笑、百吸、千字、万歩」、「健康でいることが一番の節約」、「人生は思い出づくり」を合い言葉にし、日々、

笑顔で機嫌よく生活している。誰も、人生の終わりは、わからない。その日がいつであろうと、家族を始め、身近な人と生き生きと人生を歩みたい。

無口

河 辺 順

西武新宿線南大塚駅。かつて入間川で採取した砂利の運搬を目的とし、安比奈駅までの3・2kmを結ぶ貨物線が存在した。

安比奈線と呼ばれる非電化路線は、関東大震災の復興需要により増大したコンクリート造りの建築物。その材料に砂利を用いるため、一九二五年の開業から河川での砂利採掘が禁止される一九六〇年代までせつせと砂利を運んでいたというから、なかなかの働き者である。

一九六三年の休止を経て、二〇一七年に廃止されるまでかなりのブランクがあったが、今も痕跡はそこかしこに見ることができる。駅構内にはメモリアルコーナーなるものが設置され、当時の蒸気機関車を間近で見ることができるし、北口からゆつくりと左へカーブを描くように続く廃線跡は、池辺方面へ向かっていくとNHK朝の連続テレビ小説『つばさ』のロケ地が見えてくるはずであった。

とはいえ近年、線路はアスファルトや樹木等に埋もれ、立ち入り禁止の柵が張り巡らされている。国道十六号線や八瀬大橋を支える橋台部分により断絶された今となつては、昔のように全線を踏破することなど夢のまた夢であらう。

こうした砂利鉄道の終焉を尻目に東京郊外の宅地化が進み、輸送量が増えていった結果、鉄道は多くの沿線住民が利用する通勤路線として発展していった。現在の西武新宿線である。

今の南大塚駅は、都内から川越までを結ぶ路線の一駅に過ぎないが、日々多くの乗降客が通勤や通学の便として利用している。

線路をまたぐ跨線橋の天辺に改札がある関係上、駅舎から望める景色はどこまでも続く線路と、遠くにうつすらと見える濃緑の稜線ばかりである。山奥で暮らす仙人ならともかく、時間に追われて足早に通り過ぎる者にとっては、消え去るべき日常の一部でしかない。

たまに窓から見える景色を見る時は、定刻通りに発車する電車が今まさに到着せんとするときであり、その様子を見て自分の脚が、心臓が、車内滑り込みまでに無事持つかどうか、非常に現実的な心配がある。

都内へ出勤する際に多くの時間と労力を要するため、昨

今の状況を鑑みた現場からは遅めの出社を許されている。蓋し夜勤であらう。家へ帰りつく頃には日を跨いでおり、ほんやりと光る月の下、物も言わずただ足早に住宅街を通り過ぎていく。

眠れぬ眼を擦りながら風呂に入り、布団へ潜り込むと、もう明日が待っている。自宅で借用端末を開き、月次の予定表を確認しつつ、今日の朝会では何を喋ろうかと思案する。画面越しの挨拶もそこそこに、今の懸案事項、やるべきこと、直近でやらなければならないことを頭の中で整理し、言葉として発しながらまた頭の中を整理する。

表情が見えないからこそ、言葉一つにも注意を払う。自分の言葉は相手にとってどのように聞こえ、見えるのか。たまの面と向かったコミュニケーションであればなおさら、表情が見える分、やり取りの難度は増す。

消え去るべき日常が次から次へと目の前に現れては消える。そのうち、いつ来たかも忘れて脳の狭間に知らず埋没していく。生きることがカメラのシャッターを切られることなのだとしたら、自分はボタンを押されたまま右から左へ歩いて行く人の様だ。心に残る一瞬を切り取るのではなく、連続したパラパラ漫画の一コマをただひたすらに積み重ねていく。

——なあ、教えてくれ。あんたはこんな日々に興味があると思うか——

いえるはずもない言葉を噛み殺し、日々を過ごすうちに季節は巡り、新しい年度を迎えていた。肌を感じる風が心地良い。電車から降り、改札を通り抜けて左へ折れようとする。駅の南口から出て、住宅街を抜けていくのがいつもの帰宅ルートだ。

ふと、風が止んだ。

窓の外に見える景色を見る。その日はちょうど空が晴れ渡り、透き通って見える程の良い天気だった。駅舎から望める景色はどこまでも続く線路と、遠くにうつすらと見える濃緑の稜線、それと白く光る山が見えた。

言葉も忘れ、ただ見入っていた。

鍛冶屋さん

山下 克吉

「鉄は熱いうちに打て」と云う諺があります。熱い鉄を叩くのを生業にしている職業は鍛冶屋さんです。

鍛冶屋が扱う鉄の歴史を調べてみると、鉄は四千年ほど前にトルコ半島のヒッタイト人が鉱石を発掘し、溶かし鉄となることを発明しました。これにより鉄を使った道具造りは世界中に広まり、文明の発展に大きく貢献しました。そして、欧州からアジアへ伝わり、大陸との交流が始まる

弥生時代に鉄の文化が日本に伝わりました。鍛冶屋の始まりです。

鍛冶屋は身近な町工場として町や村に存在していました。家内工房の中では火窪で木炭を燃やし、轆で送風するので作業小屋の中は火花が舞っていました。

鉄を加熱する火窪の中から真っ赤になった鉄を金床に取り出しては叩き又加熱を繰り返し形を整えていきます。

正に「鉄は熱いうちに打て」の諺の如くです。その様な火花と戦っている鍛冶屋さんの仕事を子供のころ飽かず眺めていました。その中で特に印象に残っているのは鍛冶屋の軒先につながれた農耕馬の姿です。

農業機械の無かった時代、農耕馬は農家の重要な労働力であり、馬は重量物の運搬で蹄を痛めるので、蹄の形状に合わせて蹄鉄を造り、取り付ける鍛冶屋の作業は見事なもので鎌や鍬などの農具だけでなく幅広く手掛ける鍛冶屋さんの存在は地域に貢献する物づくりの名人でした。

品質の良い鉄製品を造るためには強い鋼を造ることが重要なので炉の中の鉄の色具合、焼けた鉄を冷水につけ硬度の調整、薬灰に混ぜ炭素濃度の調整等を繰り返し、切れ味の良い製品を造る。冶金工学の理論を経験から学び、地場産業の要として日本の工業力の源でありました。

戦後の焼け野原の中から立ち上がり高度経済成長を遂げた日本。何故に焦土の中から短期間で高度経済成長を成し遂げられたのか要因分析してみました。

財閥系や軍需産業等の企業が国策に添った物づくりをしていた戦前の時代から、戦後は占領軍（GHQ）の財閥解体令により重厚長大の財閥企業に変わり、市井の企業が大衆の求める商品を手掛ける企業体へと変わりました。

便利な生活用品が生まれ、生活が豊かになると共に高度経済成長を成し、新たな企業が生まれました。

その様な戦後に企業を興し成長した例を紐解くとホンダの創業者、本田宗一郎が居ました。氏は村の鍛冶屋に生まれ尋常小学校卒業後、丁稚奉公に出て技を磨き、戦後は大衆の足として自転車に補助エンジンを付けた、原動機付自転車を開発し企業を興しました。バイク生産に続き、農業機械、自動車、更には独自の技術力でジェット機にまで挑戦しグローバル企業へと成長しました。この例の様に戦後の産業界は官に縛られない自由競争と自由な発想の下で発展し、日本の産業界は工業力を高め、グローバル化しました。

鍛冶屋に話を戻すと、会社時代の先輩の実家は静岡県天竜村（現、磐田市）で鍛冶屋を営んでいました。農林業が盛んな時代で先輩の兄さんは九十歳過ぎまで村の鍛冶屋さんを営んでいましたが高齢で鍛冶屋を続けられなくなり、鍛冶道具すべてを寄贈したいと公的機関を通じ公募しても鍛冶屋に興味を抱く人もなく、代々営んで来た鍛冶屋は廃れたと語っていました。

この様に古より引き継がれてきた鍛冶屋は消えてゆく時

代となりました。その原因は半世紀前から普及し始めたデジタル化です。デジタルによる物づくりは職人技を必要としない世界となり物づくりの環境は大きく変化しました。

働くと言う字は人が動くとき、あくまでも人が主なのですが、デジタル化の進展は人間が従となる方向へと労働環境が大きく変わり、この先さらにAI化の時代になると人間の思考力は失われ、労働の達成感や喜びが薄れ、知らず知らずのうちに人間の感性も失われてゆく事が懸念されます。

以前読んだ本の中に伊勢神宮の式年遷宮のことが書いてありました。式年遷宮とは最高の技で造られた神宮を二十年ごとに立て替える儀式で立派な神宮を二十年で造り変えるとは何ともったいない事かと常々思っていました。

神宮を造り替える遷宮は山で切り出す木材の選定から輸送、建築まで伝統技法が廢れることの無いよう千年以上も昔から続いており、建築に使われる道具のノミや手斧等は鍛冶職人の手で造られ、伊勢神宮の立柱祭は神官を先頭に鍛冶職人、大工職人が共に練り歩く儀式です。

司馬遼太郎の書の中に世界の国々では職人の仕事は低く見られているが日本では尊敬されているとありました。その職人が尊敬されていたのは昭和の半ばの時代までで、デジタル化が加速している現在では職人技を必要としない時代となっています。

職人技が消えてゆくと云うことは人から人へと伝承され

て来た文化が消えてゆくことになります。

身近な町工場で造られた手造りの物には職人の魂がこもっており職人は物造りに加え修理もする技術師でした。

近年は大量生産大量消費の時代となり修理できる物でさえ新しい物と交換させられる社会となっています。

一度失われた職人技は蘇ることは難しくデジタル化がさらに進むと人間味のない社会になることが懸念されます。

そこで人間味のあった時代の童謡「村の鍛冶屋」の詞をかみしめ職人文化を称えたいと思います。

しばしも休まず　つち打つひびき

飛び散る火花よ　はしる湯玉

甕の風さえ　息をもつかず

仕事に精出す　むらの鍛冶屋

歌は世につれ「流行歌」でたどる思い出

はやりうた

竹宮吉保

序

令和になり、父や母が大正・昭和・平成という三つの年号を歩んできたことを思い、同じように私も昭和・平成・令和と三つ目の年号を歩んでいることを思う。すでに後期

高齢者と呼ばれる年齢となって、幼い日や若い日のことが思い出されてくる。

思い出

いま、私は生まれ育った川越に戻り、暮らしている。もう戻ってからでも三十年余りになる。

地域の集りや同級生、知人など、多くの集りでカラオケを楽しんでいる。

「あの歌がいい、この歌はどうか」などと、こどもの頃にかえたような感じがしている。

そう言えば、生活の中には幼少時から身近に音楽が溢れていて、いつも聴いていたと、頭の中をめぐることごとを寄せ集めてみて痛感する。

物売りの歌や宣伝カー、ちんどん屋、ラジオ体操に盆踊り、秋の川越祭りのお囃子など。

私の幼少時の川越は空地や野原がまだ多く、外遊びには困らなかった。近所にはこどもたちが大勢いて、缶けり、縄跳びやメンコにベーゴマ、チャンバラ、ボール遊びからかくれんぼ、“かごめかごめ”“花いちもんめ”などにぎやかに、日が暮れるまで遊んだものだ。道路もまだ砂利道も多く、自動車も少なかったもので、いまほど危なかった。

雨の日は、友だちの家などで、折り紙にマッチ棒遊び、糸巻きとマッチ箱などを使った工作や将棋（本将棋の他に

はさみ将棋、まわり将棋、積み将棋などいろいろな遊び方があった）から指すもう、にらめっこ、絵描き歌など、時間が経つのも忘れて遊んだりしたものだっただ。

学校から帰ると、ランドセルやかばんを家の中に放り投げて、遊びに出たりしていたことを思い出す。

このこどもの頃から、もう少し勉強をしていれば……と学校を出て成人してから思う。が、時すでに遅かった。しかし、いまでは、それはそれでよかったのではないかとも思っている。こどもの時期をこどもとして充分にすごしていたのだから……と。

その頃はスマホ、パソコン、DVD、CDもなく、まだテレビやテープレコーダーも各家庭に普及していなかったりと、いまとは大分様相が違っていた。

レコードプレーヤーもまだ私の家にはなかった。「流行歌」はラジオで聴いて、雑誌で歌詞を読んだりして覚えるくらいで、こどもたちの歌う歌は、学校で習った歌、遊び歌、他に童謡と替え歌が主で「流行歌」はあまり思いつかなかった。

が、小学校に入学した頃のこと、＼お富さん（歌手 春日八郎）＼という「流行歌」を知らずに歌っていたのに気がつく。意味もよくわからなかったのに、調子のよいリズムに乗り、歌っていた。

周囲のこどもたちの間で歌われていて、近所の小学校年長のNちゃんがこの歌をハーモニカで吹いていたのが思い

返されてくるのだった。

四年生になり、気がつくと、＼チャンキおけさ（歌手 三波春夫）＼という歌も歌ったりしていた。

＼大人っていいなあっ、お酒飲んでさわいで……＼

などと、思ったりしていたのが、どこか懐かしく感じられてくるのだった。

この歌では、＼月が侘びしい路地裏の……＼のところが＼月が侘びしい路地端の……＼と歌ってしまっていたことまで思い出してしまうのだった。

六年生になり、午後のホームルームの時間だった。教室の前に出て歌ったM子ちゃんの歌声に驚いてしまった。節まわしといい、歌声といい、何より心地よかった。

＼古城（歌手 三橋美智也）＼という歌だった。

この歌によって、歌を歌うことが、歌の気持というものが、こどもなりに少しづつわかってきたように思えてくるのだった。

この年の四月には、皇太子殿下（現上皇様）の御成婚パレード中継があり、校内のテレビのニュースで観たことも思い出されてくるのだった。

テレビもしだいに各家庭に普及していき、中学生になると、私の家でも、家族で共に楽しむようになっていた。

ドラマや歌と踊りのショー番組などが家庭で気軽に観ることができた。

当時、川越には映画館が五館あり、各館共、主^{おも}に三本立を週替わりで上映していた。

総天然色、大きなスクリーンで観る映画は迫力があり、やはり魅力があった。テレビはまだブラウン管、白黒画面で、映画で観る人気俳優は出演しない時代だった。

身近な娯楽として、この頃はよく足を運んでいた。

“霧笛が俺を呼んでいる（歌・主演俳優 赤木圭一郎）”
“さすらい（歌・主演俳優 小林旭）” などの映画主題歌

もよく歌っていた。“さすらい”の他、この俳優の歌では、コミカルな“自動車ショー歌”“恋の山手線”なども覚え、いまでもカラオケで歌うことがあるのだった。

「流行歌」は、テレビの普及と共に、ドラマや時代劇の主題歌の他に若い人向けのポピュラーソングなどが盛んになり、視て聴いて楽しめるようになってきていた。

“ごどもじゃないの（歌手 弘田三枝子）” “ルイジアナ・ママ（歌手 飯田久彦）” “悲しき六十才（歌手 坂本九）” などで、歌が年代的に近寄ってきているのを感じ、楽しみが増してきていた。

歌謡曲も十代の歌手（橋幸夫）が“潮来笠”を歌い、その後、“雨の中の二人”デュエット曲の“いつでも夢を”などで、世代にあった青春歌謡へとつながっていく。

楽しかった。勉強や日常のいろいろなことを忘れて、楽しむことができた。一方で、これでよいのか、時間を有効に使わなければ……との思いがあった。

それでも、何とか地元の高校に進学することができた。まだ砂利道の残る中を三年間自転車通学をする。十六号バイパスもなく、川越駅も西側はまだ簡素で、少年刑務所もあった。

当時、“高校三年生（歌手 舟木一夫）”という歌が周囲でよく歌われていて、同じ歌手の“修学旅行”という歌も流行り、歌うようになっていた。修学旅行の時期と重なったこの歌は、いろいろな意味で懐かしい歌となっているのだった。

その後

その後も歌を楽しむ、カラオケの時代となっていく。しかし、それも私が三十歳前後、昭和も後期に入った頃だった。平成を経て令和の時代になり、通信カラオケ、AIカラオケなどと発展、隔世の感を覚えるのだった。

偉大なる水に感謝

鈴木 高雄

台風や大雨、津波などで起きる災害のニュースを聞くたびに心が痛みます。水に関する災害を少しでもなくすために、思うところがあります。

マザー・テレサの「愛の反対は無関心」という有名な言葉があります。私たちは、水に対してどれだけ関心を持っているでしょうか？

朝起きて一杯の水を飲んだり、歯を磨くときに水でうがいを使います。ご飯を炊くときも水を使います。皿を洗うときも水で洗います。掃除のときも、雑巾を水で濡らして床を拭いたり窓を拭きます。洗車も水のお世話になります。洗濯やお風呂のときは大量の水を使います。そのたびに、水に関心を傾け、感謝をしている人は少ないと思います。水は自分が汚れて、周りを綺麗にします。自己犠牲の最たるものです。しかし、一言も文句を言いません。逆に多くの人が、水を邪魔者あつかいにして文句を言います。

「あいにくの雨」

「うつつらしい梅雨の季節」

「じめじめした嫌な雨」

「悪い天気」

「天気が崩れる」

雨は「かたき」のように言われることが多いです。雨や水に心があつたら、どんな思いで聞いているでしょうか？

私は雨の日の朝、三つの「儀式」をします。一つ目は、まず雨に感謝をします。人間の体は約三分の二が水です。地球は水の星でもあります。雨が降らないと、日常生活や自然界のさまざまなことに支障をきたします。

二つ目は、「雨ふり」の歌を口ずさみます。

「雨 雨 降れ 降れ 母さんの……」

から始まって、最後は

「ピンチピンチ チャンスチャンス ランランラン」

（参考『ツキを呼ぶ言葉』五日市剛 エキサイトブログ）で締めくくります。この歌は「ピンチをチャンス」に変える歌です。雨の日は絶好のチャンス到来です。

三つ目は、ベランダの鉢を外側に寄せます。雨がかり、水やりが省け、少し楽ができます。毎日たくさんの鉢に水をやるのは大変です。水も節約できます。

地球に人間が生きていくことができるのは、太陽、空気そして生命の水のお陰です。植物も動物も同じです。

「愛の反対は無関心」

ということ、人間から感謝もされず、関心を持たれない水は、愛の反対の波動をたくさん受けています。すなわちマイナスの波動です。その波動が雨や川や海に充滿して

います。考えるだけでも恐ろしいと思うのは私だけでしょうか。もっと雨や水に感謝したら、水害が少なくなるような気がします。

その意味で、私は水に感謝することを心がけています。感謝してから水を飲みます。顔を洗うときに感謝をします。雑巾を絞った汚れた水を流すときは感謝してから流します。お風呂の栓を抜くときに水に感謝をします。

黒田官兵衛の水五訓というのがありますが、私なりの言葉で、水の十二の持ち味をまとめてみました。

①水は自己犠牲の精神で、自分を汚して周りを綺麗にする洗濯、掃除、風呂、トイレ、洗車など、水は自分が汚れて、他の物を綺麗にします。自己を犠牲にして、他のために尽くす最たるものです。

②水は我^がをとおさず、素直と謙遜で、器^{うつわ}の形に収まる。水は丸い器には丸く、四角い器には四角に収まります。素直と謙遜で、自己主張をしません。

③水は自然の理に従い、高い所から、低い所へ流れる。水は自然に逆らわない従順さをもって、自然の理に従い、高い所から低い所に流れます。

④水は生命の源、地球は水のある奇跡の星

人間の体は約七十%が水です。水は人間を生かし、動植物を生かす生命の源です。生命は海で誕生し、人も羊水の中で育ちます。水は天からの尊い恵みであり、地球は奇跡の星です。

⑤点滴岩をも穿つ 水は岩をも砕き、砂とする

水滴が落ちるような微かな力でも、いつかは石に穴をあけるような大きな効果を生みます。また川を流れる水や海の波は大きな岩を砕いて砂にします。積み重ねた小さな精誠や努力が大きな結果をもたらします。

⑥水は石や障害物があっても、流れを止めない

水はさまざまな障害物があっても、流れを止めません。かえって流れを早めていきます。水はピンチをチャンスに変えるチャンピオンです。

⑦水の上を進み、舟は遠くまで物を運んでくれる

水を利用すれば、重たい物を遠くまで運ぶことができます。水はなんと有り難い存在でしょうか。水を敵にまわすと厄介ですが、味方になると最強のパートナーです。

⑧水はほとんどの物質を溶かす万能溶媒といわれる

水は自分の中にさまざまな物質を溶かして一つになろう

とします。器の大きい人は水のように、どんな人をも受け入れ、つつみこんでしまえます。

⑨ 水は大自然の造形美を創造する偉大な芸術家

水の結晶は、それ自体が美しい宝石です。また川の浸食や波に削られた岩、氷河が削った山や谷は大自然の美しい造形です。水は偉大な芸術家です。

⑩ 水は手や心身を清めることに用いられる

神社に参拝するとき手水で清めたり、さまざまな宗教が洗礼や川で清める儀式をします。水は心や体を清めます。

⑪ 水は人間の心や言葉の波動を受け取る

水に愛や感謝の言葉をかけて凍らせると綺麗で美しい結晶ができます。しかしマイナスの言葉をかけて凍らせると醜い塊になります。プラスの波動を発することが大切です。（参考文献『結晶物語』江本勝 サンマーク文庫）

⑫ 水は万民の上にそそがれる神の愛を象徴する

聖書の中に、

「天の父は、悪い者の上にも良い者の上にも、太陽をのぼらせ、正しい者にも正しくない者にも、雨を降らして下さる」

と書いてあります。水は神の愛を象徴します。

妻籠宿の良寛歌碑に想う

菅 沼 眞 二

良寛歌碑

中山道の宿場町である妻籠宿に良寛の歌碑が建てられていたことを今回の旅で知る。

木曾路にて

この暮れの もの悲しきに 若草の

妻よびたてて 小牡鹿鳴くも

碑面の文字は万葉仮名にて彫られている。

（幾曾知耳天

己乃久礼乃 毛乃可奈之起耳 我可久左乃

津末与ひ堂天、左遠志可奈久毛）

歌意は、「夕暮れ時の物悲しさを搔きたてられるように牡鹿が雌鹿を呼ぶ鳴き声が響いているよ」というものである。

木曾路にてと詞書がある^{ことばがき}ので、良寛が中山道の木曾路の

どこかで詠まれたものであろうが、その時期や場所を推定することは難しい。良寛と木曾路との関係を知る術は無いが、天明四年に良寛と同時代の人菅江真澄（三河渥美郡〈現愛知県豊橋市〉の生まれと推測される）が、良寛の師

国仙和尚（備中玉島の円通寺の高僧） 一行と湯の原という温泉（筑摩の御湯、現在の松本市の郊外の浅間温泉と言われている）にて遭ったという記録が、真澄の『くめじの橋』という紀行文に遺こされている。国仙和尚の巡錫の従者の中に良寛がいたかは定かでないが、天明四年と言えば良寛二十七歳に当たり、国仙和尚の元で修行に励んでいた頃になる。

鹿のうた

小牡鹿の鳴く声は秋の愁いを助長するものであらう。古くから多くの和歌に詠まれている。

「万葉集卷十（鹿鳴を詠む）」に

あしひきの 山より來せば さ男鹿の

妻呼ぶ聲を 聞かましものを

秋萩の 咲きたる野邊は さ男鹿そ

露を分けつつ 妻問ひしける

妻すなわち雌鹿を恋慕う牡鹿には秋の代表的な萩の花が似合うようである。

「古今集卷四」にも

奥山に 紅葉ふみわけ 鳴く鹿の

こゑきく時ぞ 秋はかなしき

山里は 秋こそことに わびしけれ

しかのなくねに めをさましつつ

良寛が帰郷後生涯の大半を過ごしていた国上山にも鹿が生息していたものであらう。良寛の鹿を詠んだ和歌に

秋の野に うらぶれをれば さをしかの
妻呼びたてて 来鳴きどよもす

このゆうべ 寝ざめて聞けば さを鹿の
声の限りを ふりたてて鳴く

秋の愁いを鹿の鳴く音に感受する良寛である。

良寛を想う

良寛は、江戸時代後期の越後の僧である。生まれた越後出雲崎は、江戸時代佐渡の金山で産出される金の陸揚げの港として幕府の直轄地となり大変な賑わいであった。良寛の生家である山本家は屋号を橘屋と称し代々名主をつとめる名家であった。

良寛は齡十八のころ出雲崎の隣村尼瀬にある光照寺に入り、玄乗破了和尚の下で禪の修行を続けていた。安永八年良寛二十二歳の時、備中（岡山県）玉島にある円通寺の高僧国仙和尚が光照寺の夏安居に請ぜられ、各地巡錫の途次立ち寄られた。この時、良寛は国仙和尚により得度を受け随行して玉島の円通寺に行くことになる。玉島までは国仙和尚に縁のある寺々を訪ねての旅であったであらうが、その経路については詳しくわかっていない。良寛の遺した「再游善光寺」と題する漢詩の一節に「曾従先師游此地（曾て先師に従て此の地に遊ぶ）」と詠まれているので、国仙和尚一行は信州を経由して玉島に向かわれたものと推測される。

国仙和尚の下で修行研鑽を積み、良寛三十三歳の時、師

国仙和尚から印可^{いんか}の偈^げが与えられる。その後、諸国遍歴をしたと考えられているが詳細は不明である。唯一、土佐の国（高知県）にて遭ったという江戸の近藤萬丈が遺した『寢覚めの友』と題された文章がある。文中で出会った僧侶の名は了寛と書かれている。その後、三十九歳頃、故郷越後には糸魚川經由で帰郷したと言われている。帰郷後は暫く生家のある出雲崎近くの郷本にある空庵（塩炊き小屋）に居たことが崑崙橘茂世の著した『北越奇談』の中に紹介されている。その後、国上山にある五合庵や麓の乙子神社脇の草庵を中心に過ごしている。

良寛とこどもたち

良寛と言えば、寺も持たず托鉢にて生活の糧を得る行いを実践した人として知られている。托鉢の途次、寺社の境内や集落の外れなどで里の子供らと出会い遊びに興じたようである。良寛の晩年を知る解良栄重が書き遺した『良寛禅師奇話』の中に「手マリヲツキ ハジキヲシ若菜ヲ摘里ノ子供トトモニ群レテ遊フ地藏堂ノ駅ヲ過レバ児輩必相追随シテ……」また「師至ル里毎ニ児輩多群ヲナシテ戯ヲナス……」など具体的な遊びが綴られている。良寛自身も携行品を記した控に「第一受用具、頭巾、手拭、鼻紙、扇子、錢、手毬、ハデキ」と記した遺墨がある。

良寛の詩歌の中にも里の子供らとの出会いや遊びを詠んだものがある。「十字街頭乞食了 八幡宮邊方徘徊 兒童相見共相語 去年癡僧今又来」。托鉢帰りの良寛を待つこ

どもたちがいる。他の詩の一節にも「陌上兒童忽見我 拍手翬唱放毬歌」。毬つき歌を唄い良寛を迎い入れているこどもたちの様子が思われる。その様な毬つきの風景を彷彿とさせる長歌がある「あづさゆみ 春さりくれば 飯乞ふと 里にい行けば 里子ども 道のちまたに 手まりつく われもまじりぬ そがなかに ひふみよいむな 汝がつけば 我はうたひ 我がうたへば 汝はつきて つきてうたひて霞たつ ながき春日を くらしつるかも」。毬つきは撞き方と唄い方が交互に入れ替わるのが普通であるが、我（良寛）は何時も歌い手に廻り子どもたちに毬つきをさせて楽しませている。此処にも、子供らを愛でる良寛の微笑ましい姿が感じられる。

霞たつ ながき春日を こどもらと

手まりつきつつ この日暮らしつ

晩年は庇護厚い島崎（長岡市）の木村家にて七十四歳の生涯を閉じている。良寛の墓所は木村家裏の隆泉寺にある。

【参考図書】「良寛歌集・詩集」渡辺秀英（木耳社）

「万葉集・古今集」（岩波古典文学大系）

「寢覚めの友」近藤万丈

相馬御風「良寛百考」より

「北越奇談」橘 茂世（復刻版野島出版）

「良寛禅師奇話」加藤儼一（考古堂）

懷古

山口 英次

人と人の出会いは不思議なものです。その時だけの出会いもあれば、又、いつまでも一生続く出会いもあります。例えば男と女が出会い、そして結婚生活が一生続く出会い、その夫婦が健在で二十五年目を迎えた時、祝う式、銀婚式や更に、健在で五十年目の金婚式を迎えた時、お二人の出会いには素晴らしいです。お互いに思いやりの心で共に生きて来た証です。

共に励まし合い人生を過ごされた事でしよう。

又、生まれた年が同じで、幼い時から顔なじみで竹馬の友と言われる出会いもありますね。

お話しは変わりますが、住まいも近く、数十年のお付き合いをしております私とS氏先輩との関係は男同士の出会いです。自然と出来た素晴らしい出会いではないかと思っております。私にとっては、この出会いは大切にしなければと考えております。

ちよつとした他人への思いやりや、ちよつとした手だすけに感謝と安心を感じて生きている事を教えてくださいました。人々の生活の喜びは小さな足元からの行いから受けたり、

また与える事もできると教えてくれました。

S氏先輩は私に思いやりの心で、共に生きる大切な事も教えてくれました。

S氏先輩との出会いは丁度、私が退職した時期であつたので、自由になる時間もあり、お互い大変有意義な意見交換を交わし共感しました。

退職後自由に過せる時間もあり、今後は地域の為に、役立ちたいと考えるようになり、地域の皆さんが安心して安全に生活出来るよう自治会活動に参加し、自治会会長を二年間引き受けました。その間、地域の多くの皆さんと新しい人間関係が出来ました。

この出会いがその後大いに役に立つ事になります。

私は二年間の自治会会長を辞めた後、任意の地域ボランティア団体（こどもクラブ、平成十一年設立）のこどもクラブの代表を引き受け活動を始めました。

次世代を担うこども達が、地域社会の中で健やかにのびのびと育つて欲しいとの理念で活動を始めた団体です。

この地域は川越市の北西部に位置、自然に恵まれ周り一帯は田んぼや畑の多い所です。他と同じように、年々農家の皆さんは超高齢化し日々の農作業が難しくなり、休耕田や畑が大変目立つようになり、一面雑草がおい茂り農地が有効活用されず、もったいない事です。

私は地域ボランティア活動を通して近くの農家の方と親しくなり、この休耕畑を貸し農園として活用してはどうで

すかと、提案したところ賛同して頂きました。

団塊世代の方々が退職され、時間に余裕のある方がこの貸し農園を通じて出会い、人間関係が希薄になりがちな地域の人と人がお互いに理解し合い、助け合い、共に生きる、そうした一つのコミュニケーションの場となり、大変意義があったかと思っております。

休耕畑のままでではもったいないの思いから…、私のちょっとした提案は皆さんから大変喜んで頂く事になりました。十四名の方々は楽しみながら野菜づくりをしています。

次世代を担うことも達が、地域社会の中で健やかに育って欲しいとの理念で始めた団体、こどもクラブの主な活動の幾つかの中で年明けの行事、火祭り（どんど焼き）そして、春の親子もちつき大会、夏恒例行事（七夕飾り作り）そして、休耕畑を借り各種の野菜づくり（じゃがいも、さつまいも）等々。

みんな一緒に楽しみながら行動が出来る有意義なふれあいの場となり、人と人が共に思いやりの心で生きるのには素晴らしい事です。

いつの世も、人は心のやすらぎを求めながら生活をしています。家庭であれば楽しい我が家ですよね。

又、地域も居心地のよい所で住みたいと思うのが人の常です。心豊かに生きられる地域づくりは、人々の小さな足元から生まれるものと確信しております。

現代社会は人の心のありようが荒廃している様に思えて

なりません。自分さえよければよい、他人はどうなってもよいと。そんな気がしてなりませんでした。

会社経営は儲かればよい、不正は発覚しなければよいと。少子高齢化が同時に進行する中、人々の心のあり様もとで様々な社会問題が発生し、後を絶たない現実です。

私の一番心を痛めているのが幼いこどもが被害者に、また、加害者になる事です。相手の立場に立つて考えることの出来る思いやりの心や、人の喜びや悲しみを感じられる心、そして自分を反省し、相手を許すやさしい心があれば無くなります。

人々の心が荒廃している現代社会から幾らかでも安心して暮らせる、地域づくりは人々の小さな足元からの行動にあると確信しております。

お年寄りには長い人生経験を持っております。自分の持っている知識や技術や能力を、こども達への良き助言者、となつて役に立つてもらえるのです。自分も喜びを感じる事が出来ます。そして会を重ねる度に顔見知りになり、お互いに相手を知り自然に会話も弾み、そこから仲間意識や連帯感が自然に生まれてくるのです。

それは地域ぐるみの生活共同体です。みんなが助け合い、支え合い、信頼し合いながら、共に生きる地域社会をみんなで作くり上げる事になります。豊かな心は人と人との出会い、交流の場から生まれてくると思います。

このような活動は、地域の調和と発展に効果的であるこ

とから高く評価され、埼玉県知事賞（平成二十一年度「あしたのまち、くらしづくり活動賞」優秀賞）を頂きました。このように思いかえすと、いつの世も人はみんなが寄り添いながら生きていくのです。

地域社会づくりは、相手の小さな足元から受けて、そして自分の小さな足元から与えるものと確信しております。

そして、高齢者も子ども達と今を楽しみながら思いやりの心で共に生きましようよ。

岬

井 原 正 人

山里の家から、岬の上に建つ母子住宅に引っ越したのは、中学一年の三学期であった。生活の勝手が違って見えた。

以前は外に出ると、山や畑や林が陸続とつづいていたのに、新たな地所は、街を縦貫する路線バスの終点があるだけで、その先は、果てしなく日本海の広がる行き止まりであった。

ある日、ちらほら近づきになった仲間達で、海辺の道を歩いていたときであった。ある漁具置き小屋を覗いたら、梁からロープでぶら下がった、男の死体が見えた。怖いもの見たさで小屋に入ったが、一人の「現場維持じゃネエ」の声に、皆で慌てて小屋を出た。早く遺体をロープから下

ろしてあげなければ、と思いつながら、怖さや気持ち悪さで手足が竦んだ。戸外で遇った近所の人らしい親父さんに死体のことを告げて、小屋を後にした。こんな所で、人知れず死を選ばなければならなかったことが、憐れであった。何があっても、こんな死に方はすべきでない、と思った。

母子住宅は海を臨む高台にあり、その突端には、遙か沖を行く船の目印に、白い灯台が建っていた。あと一つ、高台の下の方から沖へ延びた堤防の先に、赤色の灯台が港の入口を示して建っていた。その堤防には、波の高い日のために、一部テトラポットを増設している所があり、ある日数人で跳び伝い遊びをしていたら、私が海に落ちた。テトラポットはどれも水平な所や掴まる所のない構造物で、山育ちで知識のない私は、気づいた時には海の中であった。私は泳げない。寄せ波が体をテトラポットに押し戻したが、掴まる所がなく、すぐに引き波が体を奪っていく。私は溺れるのではないかと、必死に犬掻きをした。寄せ波と引き波に二三次同じことを繰り返して、漸くテトラポットの表面に、指の腹が沈むほどの窪みを見つけた。と、堤防の上でただ右往左往する仲間に、長い竹竿を持った漁師を連れて来るよう叫んで、助かったのだ。ずぶ濡れで、まだ雪の残る道を帰ったのに、足元の冷たさを全く覚えていないのが不思議だった。気が動転していたのだろう。

初夏の、印象派の点描画のような一日もあった。

仲間の内の一人に、漁師の息子を友人に持つ少年がいた。

その漁師の息子が、父親の艀か漕ぎの船を操り、大きな岩場に居た我々の前に現れた。赤の灯台を回って、港に着けるのだと言う。皆で乗せて貰い、艀を漕がせて貰うことになった。見よう見まねだが、立って漕ぐ艀は、座って漕ぐボートと違い、爽快であった。皆で船を沖に出し、広い海原を往くと、蒼い空に行き交う船もなく、舳先しゅせんの白い波と、頬を過ぎる風に、十五少年漂流記のようだと思った。

岬の夏は、数少ない貴重な磯浜の海水浴場であった。

大方の海水浴客は、母子住宅前のバスの終点で降り、坂を下って磯浜に出る。帰りは逆になるので、バス停の回りは人で溢れた。なかには最寄りのバス停から家が近いのか、海水着の上にバスタオルを覆っただけで、浜から上ってくる者もいる。中学二年ともなれば、女子では既に大人の体つきの生徒もいて、知っている女生徒に遇うと、目のやり場に困った。青春真っ盛りの頃だった。

秋に入ったある日、裏の家の母親が、腸捻転で一晩の内に亡くなった。母一人子ひとりの家庭で、葬儀が終わると親戚が集まり、子どものことで話し合いとなった。小学三年の男の子だった。

「話し合いが済むまで、外に出ていてって、言われたん

だ」

道路脇の空き地で出会ったとき、男の子が言った。

私は持っていた玩具のハーモニカを、「饞別だ」と言って渡した。男の子は嬉しそうにハーモニカを鳴らした。

別れ際、無邪気に鳴らしつづける男の子の、風に千切れるハーモニカの音は痛ましかった。

高台の崖下のところに、兄と同級のS君が住んでいた。小五の時に母を亡くし、父親と二人暮らしで、父親が出勤すると、干渉者がおらず、中学生になると不登校になった。兄が彼のクラスで級長に推されると、面倒見の良さから、夜に私を伴い、将棋盤などを持って通うようになり、やがて彼は登校するようになった。暗い海を臨む岬の叢で、灯台の灯の下を潜るように走る二人の姿は、どこか警戒心の強い、夜行性の動物のようであったに違いない。

そのS君が遠足の前日、一緒におやつを買いに行こうと、兄を誘いに来た。兄は、家はお金がないから遠足には行かない、と言った。S君は驚いて兄を担任の先生の家に連れて行つた。先生はS君から話を聞くと、「これを持って行きなさい」と百円札（当時）を数枚、兄に握らせ、氣を楽にさせるためか、「家には百円札なんぼでもあるんだ」と言い、ややおいて、「これ、弟さんの分です」と、新たに同じ枚数の百円札を差し出したのだった。私はそのお金を兄から受け取りながら、誰にお札を言っているか判

らなかった。ただ、兄の担任は、随分気の優しい、心の温かい先生なんだな、と思った。

高校二年の夏休み、私は岬の入江で貸しボート屋のアルバイトをした。乗下船するお客への介助と、閉店後、ボートを陸上げし、ロープで繋いでおくのが主な仕事である。海がベタ風のある日、ボートの陸上げが済むと、誰もいなくなった湾に一隻を漕ぎ出し、バタ足や息継ぎなど、泳ぎの練習をした。舟尾に掴まり、首まで海に浸かると、茄子色だった廻りは、早一面に暗く、陸続きの岩場や海面から突き出た岩礁は、更に黒々として、海と夜が交わした默契の、厳かな記念碑のようだった。私はその岩礁のどこにも人影のないのを確認すると、舟に上がり、櫂をひとかきして進ませ、巡ってくる灯台の灯を頼りに着替えをした。着替えと言っても脱ぐのは海水パンツ一枚である。着替えると布地の暖かさに、心は爽快であった。

ゆつくりと舟着き場手前の岩場を曲ったときであった。「しまったー」と思った。大きな岩を背に並んで座っていた一組の男女の横顔が、巡ってきた灯台の灯りに浮かんだのだった。私が岩場を曲る迄は、二人の背にした大きな岩が、灯台の灯に影を作り、全く見えなかったのだ。

男は同級生で、野球部の主力選手であった。愛くるしい女性の顔は、校舎を出入りする運動部の下級生に見覚えがあった。ただ、その後クラスの中で、私の失態が噂にもな

らなかったのは、あるいは、ボートの漕ぎ手は帰還の際、陸と背になるため、最悪の事態は免れたのかも知れない。

夏が終わりにかけていた。部活から帰り、時間があつたので、ボートの陸上げの手伝いに向かった。岬の名を黄金岬と言った。由来は知らなかった。高台の坂を下り、途中で思わず足を止めた。

夕陽が沈む水平線から、遮るもののない海の上を、金色の帯のように敷かれた光の輝きは美しかった。

小さい別れにあらす

村上 トシ子

「私、今月いっぱい、このスーパ―を辞めさせてもらいます」陳列棚に商品を並べていたと思われる小柄で、一見二十代後半と見られる女性は、何時ものように目ざとく私を見つけて駆け寄り、そう言った。心なしか目が潤んでいるように見える。

「え！そうなんですか。それは寂しいですね。それでこれからどうするんですか？」と聞き返す私に、彼女は、「若葉ウオークにある『魚べえ』という回転寿司店に転職します。でも妹もここで働いていて、妹はこのままずっと

居ます。なので妹の事よろしくお願い致します」と言う。

「ああそうですか。寂しいですけど、そこなら私の家から近いです。そこで又お会い出来ますね」と言いつつ、一瞬なんとも言えない寂しさが胸を掠めた。

だが、それ以上の会話は、彼女の業務に差し障り、強いでは上司や同僚に咎められると思い、「それじゃまたねお元気で」と努めて明るく言って元の処へ戻るように促した。ここで言うとは、実は私は、彼女の名前も素性も全く知らない。年齢は前にも触れたが、推測するに二十代後半か。身長は一五〇センチに満たなく、体重は五十キロ前後？

風貌は決して、美人とは言えないが、何処か人懐っこい処があり、誰からも好かれそうな面持ちである。それにしても彼女との最初の出会いにはあまりにも、シンプルで面白すぎるとしか言いようがない。

ある日の事、件のスーパーで買い物済ませ、駐車場に向かった。が、すぐに大根を買い忘れたことに気が付き、売り場へ戻った。その日の第一の目的は大根を買うことだったのに。こんな事はよくある。

そして大根を手にしたときのこと、「あら〜こんにちは。しばらくね。お元気ですか」とさも懐かしそうに話しかけてきた見も知らぬ若い女性。そのスーパーの店員とすぐ知った。あまりの事に一瞬驚いたが、そこは年の功、「ええ、元気よ。ほんとしばらくね、あなたも元気そうね」と調子よく返事をした。これが私にとっての彼女との初めて

の出会いである。

それから、そのスーパーにいくと、どんなに遠くにいようとも、私の姿を目ざとく見つけて、駆け寄り、「こんにちは」と満面の笑みを浮かべて言う。私も、「ええ、この通り元気よ」と返事する。たったのこれだけ。

だがこのようなことが二度三度続くと、「今日はほかのスーパーにしようかな」なんて思っても「彼女が待っているのでは」と思い、ついついそのスーパーに足が向いてしまう。

スーパー「バリュー」。私の家から車で一〇分ほど走らせたところにある。今時のスーパーにしては珍しく駐車券の発券もなく、ポイントカードもない。駐車券はどこ？ポイントカードは？と帰り際いつもハンドバッグをこそこそ探す私にとっては、面倒でなく、ある意味都合なところである。

そう言うことからして最近足を運ぶのが多くなったのだが、彼女の存在を知ってから、以前にもまして足を運ぶのが多くなったようである。

この不思議な関係を短歌の友人Hさんに話すと、「気持ち悪い。かつたるいわ。私ならそのスーパーに二度と行かないわ」とにべもない。もう一人の友人である三重県に住む小説家のMさんに話す。すると彼女は小説家らしい探求心からであろうか、「名前と素性を聞くべきよ」と言う。うーん、しかし最初ならともかく今更、「ところで、あな

たはどなた様ですか？」なんて聞けない。聞けない。聞いたところで一体何の意味があるのだろうか。

何せ彼女との逢瀬と会話はこのスーパードの一瞬だけなのだ。「このまま、名前知らず、素性知らずで行こう。その方がロマンがあつていいじゃないか」と。

このような不透明な関係が半年近くも続いただろうか。にも拘らず、「彼女は一体私を何者と思っているのだろうか」の見当が全くつかない。又そのことを敢えて知ろうとせずあたかも百年の知己のように調子を合わせて来た自分も自分だ。彼女との年の差は孫ほどもあるのに。

そして彼女との別れはやつて来たのである。その日訪れたスーパード、駆け寄ってくる彼女の姿がなかった。予告されていたとは言え、えも言えぬ寂しさで一杯だった。

巷に雨の降るごとく

わが心にも雨のふる

この寂しさはなにならん

ふいに、フランスの象徴派詩人ヴェルレーヌの雨の一節が心を過った。私の好きな詩である。そしてあえて彼女がいなくなったことを「小さい別れ」などと心に言い聞かせ粹がついてたのだが、決して「小さい別れ」ではなかったと、スーパード「バリュエ」に行く度思う。



随筆の編集を終えて

今年度の随筆部門の応募作品は二十一編、男性十三編、女性八編であった。昨年度より三編の増加であり、また、新たに巧みな書き手が応募してくださっていることはまことに喜ばしく、今後も幅広く、各世代からの、さらに積極的なご投稿を大いにお願したいものである。

優れた作品も少なかった。応募全作品について紹介を行いたいところだが、残念ながらスペースに限りがあり、特に印象に残った作品について感想を述べるにとどめ、筆者名は省略させていただく。

○『アンコ椿』 友の死から若き日の回想へ。ユーモラスなアンコ椿の余興のエピソードから、人生の強風にあらがう逞しいアンコ椿の象徴性が生きる感慨深い作品。

○『大喧嘩』すでに社会人となっている次男との大喧嘩を契機に、オタクと捉えていた次男の優れた能力に気付かされてからのママの心の動きが、生き生きとした喜びとともに描き出され、躍動する文体が快い。

○『私の日記帳』サイクリング、図書館めぐり、外耳炎の三つからなるオムニバス。図書館めぐりでは、日本の図書館の進化のありように眼が向けられているのが興味深い。また、「移動と非移動」対比の構成も面白い。

○『しげまつさん』しげまつさんの農家でアルバイトをし「はとぽっぽ」のニックネームで呼ばれる筆者。年配の

重松さんに戸惑うが、やがて「昭和の親父」の実力に敬愛の念を抱く。軽妙かつ心地良いテンポで人と人との縁が描かれる。

○『小さい別れにあらす』人の縁の不思議さ、奥深さをさり気なく描いた秀作。互いの名前も素性も全く知らないが、なぜか惹かれ合う二人。年の差があっても心を開くと自ずと絆は深まる。しかし、やがて、別れが訪れ、詩が生まれる。

○『藏の町の守り人』立場、年齢はそれぞれ異なるが心の深いところで人間として響き合う二人。共に自己の生き方に素直に真摯に向き合っている姿に美しささえ感じさせる。やや言葉足らずではあるが、心打つレクイエム。

○『推しと絵日傘』推し活とその対象喪失の体験。筆者若き頃の推しは市川雷蔵だった。雷蔵夭折に筆者幼き頃の記憶が重なる。やっと買ってもらった絵日傘を車中でひろげ、風に飛ばされてしまった色彩鮮やかな記憶のイメージ……。

○『珈琲ブレイク』小学生のとき初めて味わったブルーマウンテンの苦さ。時代の変化、年齢の重なりとともに好きつけの珈琲店も変化していった。今は、高級な珈琲店も良いが、夫の健診に付きあう筆者にとって、医療系専門学校の学食のカフェの珈琲は何と素敵な味であることか。

(寺島、鈴木、遠山)

俳句



新井 咲那

息止めて櫛の通らぬ髪洗い
夕立ちやガラスを越えて声混ざる
若草や机に並ぶシャープペン
妹に身長抜かれ春の星
寄居虫にバケツ被せる子供おり

大河内 喜久子

神慮かな真白き富士や美の極み
突堤や闇に溶け込む夜釣人
大揺れの蜘蛛の巣つがいの赤トンボ
ひぐらしや古いこそ自立と寄らず立つ
富士を乗せキバナコスモス天空へ

池田 隆生

カレンダー捲り終りて去年今年
近代化年越し蕎麦はカップ麺
年玉を孫より貰い照れる爺
一族に埋もれ卒寿の敬老日
絵日傘が波打ち続く登校路

大矢 真紀子

あたたかやうなじに届く風ふはり
落日の黄金染めゆく夏至の海
水澄むや龍神さまは嫁募集
猫群れて小春日和の裏の藪
かはりなく寝息と鼾寝正月

内田 清子

桜の空怪我で見送る夢ゴルフ
幸せはいつもの暮らし悟る春
春の窓怪我して想う広き愛
久しぶり我が家の春に深呼吸
見えそうな桜も我が家はるかなり

岡本 好央

畏れつつ鯨祭を踊るかな
金継ぎの新たな世界天の川
氏生まれ八尾にあるや風の盆
色褪せしオルガン一つ啄木忌
聖域に生きし狼狽太の忌

小川 房子

移りゆく時代を留めて変り雛
里山を辿りて仰ぐ花の雲
青葉風吹けよ世界の人々へ
浴衣の手をつなぎてゆくや蔵の街
雪避け翹折りたたむ秋の蝶

勝 田 雅 夫

「すきです」と言へず卒業今八十路
いつの日か並木になれよ若櫻
ベタル漕ぐ逞しき腿風薫る
店蔵の高き税や夕焼空
境内のミニ霊場をめぐる冬

小 倉 佐 紀

星の下悩みを抱く春の夜
「三角形」先祖が言った春の星
遠足で小さな楽しみ背負い行く
秋の空地面に広げるレジャーシート
雨上がり曲がり角に咲く躑躅かな

葛 城 ゆうこ

仏壇に告げる婚礼桜餅
暁に町家揺さぶる猫の恋
老い桜伐るを寝かすと僧は説く
指揮棒に静寂宿る春おほろ
十三夜切り絵のごとく時の鐘

勝 田 仁 恵

廃校の思ひ出つなぐ八重桜
深谷から土のおまけや葱の束
絵手紙の柘榴大きく届きけり
春風やサドル上げたる一輪車
白鷺や水面に映る羽の裏

加 藤 幾 美

兜太忌や父も南の帰還兵
完走のほうび小春の川越汁
走るほど初冬の富士に近づけり
のび太らのゐさうな土管花吹雪
制服は真さら大さめ風光る

金子隆司

下校の児水飲み切りし炎天下
稚児ユリの咲きて待たれる新学期
満開の桜に積る雪白し
散る桜川面に浮きて花筏
子どもらの帰省待ちつつ盆支度

小林勝子

正月や家族写真の膨らみて
尾道の投句ポストや青葉闇
だんだんに近づく雷や子らを待つ
あなたへの文記したき良夜かな
待ちわびる友の便りや漱石忌

木内勝代

冬ごもりこの世にひとり生きてをり
石露の花気分で替へる柔軟剤
主治医診るパソコン画面春浅し
はだれ野に息づく土の気配かな
夜桜や夫を見し日の深眠り

小林ケイ子

成人式紅差し臨む写真かな
春雨や零れ尽くせし砂時計
ぶらんこや青き空ゆゑ漕ぎ行かむ
打ち水や甘味処の紺のれん
赤鳥居踏み入る杜の青葉風

神山喜美代

満開の花は風道待つて居り
花吹雪風よ此方に向ひて吹け
花にけむる校舎おぼろに彼彼女
残花なほ影なき風の音を聞く
しみじみと紀寿ふり返る花の雨

小林幸二

こころざし持ちて上京父子草
はんなりと心ひらくや桜漬
百足這ふ揃へて悲し脚線美
漂泊てふ旅の心得草の絮
忘却の彼方に詩あり日向ぼこ

齊 藤 博

住職の若替へりをり花菖蒲
夕映を写して植田となりけり
青梅雨や妻の薬も切れしまま
湯治湯は雨音ばかり松の蕊
朴の花風したがへて空に澄み

佐 野 功

酔ひごち胎内のごと夕桜
校庭の鉢植トマト背比べ
真心を秘めたるごとし万年青おもとの実
冬ぬくし犬の名で呼ぶ顔見知り
鎮魂のサイレン空へ春の海

坂 根 陽 子

抱き上げてあやすをさなに梅香る
木道に聞こゆる雷や尾瀬ヶ原
朝の日に新緑まぶし湖畔径
秋風や醬油匂へる団子茶屋
朝露の枝に並ぶやガラス玉

塩 野 薫

韋駄天のトライ一瞬ラガー吼ゆ
仏心のきざす朝なり竹の秋
田にそそぐ水の勢ひ雲の峰
十二打つ柱時計や敗戦忌
老幹の脈々とあり冬の雨

佐 藤 俊 春

屋根の無き風呂に入りけりおらが春
こゑのして墨の一点揚雲雀
サングラス掛けて僧形急ぎをり
空のほかなんにもなくて蕎麦の花
平穩の世上到来 鷓鴣もくろ

清 水 次 男

この酒は茶ばしらが立つ花見かな
沢庵がかまぼこになる花見かな
秋の宵越路吹雪のダンス唄
そぞろ寒姉に似てたる通夜の客
寝押しする母の重さの蒲団かな

清水久枝

花冷や鏡にうつる柱の傷
取りまはしをり卓袱台の蓬餅
子の髪の長くつやややか聖五月
芋の露硯の海の紺匂ふ
外国語の数多なる絵馬春隣

高木茉莉

初恋の人思わせる春の星
失恋も青空の下皐月かな
手の甲の血管青し春の星
繋ごうか迷っていたり春の星
タイムカプセルの上に躑躅かな

鈴木敏雄

調教の馬が蹴ちらすはだれ雪
天翔ける龍の筆文字いかのほり
片蔭の動きだすとき貨車うごく
やまびこの帰る学校赤とんぼ
サーカスの枯野へつづく楽屋口

高瀬チエ子

ゆづりあふ稲荷小路や春しぐれ
花冷や祈ぎ事ひとつ忘れきし
かがなべて四万六千日のなか
祭灯の余熱を解かしゆく星夜
走り去るドクターイエロー寒茜

鈴木海南

二学年消した名残や春の星
夏の星湿った本を避難させ
滝壺の鯉を羨む帰り道
東京のビルの鼓動や春の星
コーヒーの味連れてくる春の空

高野英次

正月の櫓渡せぬ箱根山
春の日の杖なし散歩一〇分間
日盛のトイレ掃除で新たな気
夜の空湯槽に浮かぶ柚子の花
冬ぬくし孫のかわいさ底なしよ

瀧沢潤子

正月や夫のあいさつほろ酔いに
菜の花や右や左と続きおり
大皿に優しき色の春野菜
手作りや子等の手形のこいのぼり
孫達の大きくなりしこたつかな

露崎榮三

初御空雲を集めて富士の嶺
夜桜や恋の闇へと漕ぐボート
背面跳揺るるバー越す雲の峰
長き夜や母の巧みな糸切歯
湯豆腐の踊る踊らぬコンロの火

田中信子

菜の花や今宵食しよくそか咲かせよか
寄合うづひの議題も空ろ宵の蟬
免許終へ愛車と別れ秋の天
昆布巻の味見を終へて忘年会
冬満月影の真中に吾一人

中島光江

道の辺に杖をあづけて土筆摘む
送迎車賑わふ花の中を行き
青鷺のふはり飛び立つ浅葱空あさぎぞら
休耕田ひまはり咲かすコミニティー
小江戸を行く市民マラソン小春かな

對崎フミ

短命の父を思へり種たね吠かます
多喜二忌や金平糖は瓶の中
白日傘もう振りむかぬ母がゐる
青い空それだけでいい秋桜
凍星を拾って帰る離職の日

中村和子

異国いこく人びとの笑顔満つるや花衣
南風みなみと帆を友とし奔はしる黒き腕
目映まはゆきは見下ろす湾や稲穂波
老体により添ふ柚子の湯や優し
一列に賽銭さいせんにぎる春着かな

並木伸雄

初蝶やひらり飛び交う野良仕事
冠毛舞い次の世代へバトン次ぐ
古雛に懐古の想い祖母の顔
蘇える母の手温し手袋に
勢揃い野山を染める更衣

野村桂子

薄氷を船頭の竿容赦なく
みどり児や戦なき世と春の月
春立つや湯の町所々と俳句箱
言へずしてまた逢ふときの桜餅
燻されて縄文住居梅雨寒し

新村洋子

春の雪木屑の匂ふ町工場
路の葉やコロボツクルの家探し
蝙蝠の飛び交ふ宵の生臭し
じデオ観るは「猿の惑星」終戦日
滾る湯に八の字を描く走り蕎麦

長谷部澄香

遠足や隙間開きたるお弁当
線上のミイラめきたる花躑躅
遠足や列崩したる虫が居り
初恋の肩を撫でたる春の星
つま先のその先に咲く躑躅達

忽滑谷春雪

改修のドア広く開き春の風
この春も鴉の運ぶ棕櫚の皮
真菰馬飾りし父の指太く
昼下がりにシヨパン流れて障子貼る
寒風や行くあてのなきレジ袋

平田記美代

足止めの色なき風や廢線路
亡き夫の堅き背中や後の月
震災や長きブザーに凍りつく
街歩きちよつと若目の春シヨール
城下町薄墨煉瓦秋時雨

深見 眞貴子

夫想う遠くなりけり壺岐の海
一人来て山に抱かる晩夏の夜
凜として仕事帰りの月仰ぐ
晩秋やふるさと遠く友想う
友逝きて見送る列に小雪舞う

星野 直子

枚数は減つて手書きの賀状出す
嫌なこと忘れたやうに山笑ふ
コロナ禍の面会回避五月憂し
目隠しの中で微笑む西瓜割り
窓下の老いて小さき冬の菊

細野 榮美子

初御空いまだ戦の止まざるを
しやらしやらと傘に刻つむ春の雪
白梅や人見送れば匂ひくる
何処へか風の意のまま飛花落花
誰彼を想ふ故郷の青山河

益子 さとし

嗚呼あれはムンクの叫び虎落笛
流水のあをき翳りを尾白鷺
原発の骸の沖を烏賊釣火
八月や石に成り果て箱の中
蟻地獄砂の女のこゑすなり

舛田 智哉

隣室の灯りも消えて風邪薬
枯れてなほ一般名詞なる椿
亡き祖母の髻のひとつに触れにけり
夜空にもピアニシモあり沖縄忌
海瀬もただ浮くばかり半夏生

松本 みち子

江戸城の天守嘆願春愁ふ
花吹雪和舟に乗するハングル語
新妻のエプロン白し五月来る
秋桜湖畔にひとつ忘れ舟
雪しんしん漢が唄ふおんなうた

丸山靖子

葬送や茶碗割る時花吹雪
さざ波のままに寄り添う花筏
船上の挙式見ている花菖蒲
よく晴れて植田の葉先風なびく
新茶の香喉過ぎゆくほのかなり

矢島祥子

年始酒駅伝談議交はしつつ
薄氷や今朝の青空手のひらに
城跡の門よりたどる花菖蒲
駅前の生家更地や蚯蚓鳴く
時の鐘告ぐる三時の路地寒し

三浦知栄子

桜舞ふ「ここに幸あり」口遊ぶ
涙ふく手に小鳥きてこうべ上ぐ
色変へぬ松のいのちよ父母よ
蠟梅のつばみ落つるを連れ帰る
秋月夜ひとつひとつが愛おしく

山野さくら

元日や平和な朝の窓開く
寒晴や秩父連山青やかに
春暁や紫けぶる島の湾
地に届く枝垂れ桜の裳裾かな
微笑みて寝入る嬰兒や聖五月

村田由紀子

揺れ動く花を離さず揚羽蝶
春めくや歩きつつ抜く遠き船
製紙所の眠らぬ煙春の月
息深く夏帯締めて躑口
新米をもう一杯に割る卵

山本直子

極寒や空一面に隠れなし
如月や冷氣凜凜神目覚め
冬桜朝日待つ鳥戴冠す
レジ袋空高く有り春風
冴返る草に倣いて地に伏せる

横 沢 和 子

雉^{きじ}子が鳴く何より妻へラブコール
お目ざめか桜ひよっこり開花する
父定年子が出世して春うらら
蜘蛛の糸光照らされ芸術品
一枚の刈田に群れる鳥の声

横 山 功

花葉中出口も戻り口も無し
ゴールデンウィークの道蛇に会ふ
苗青く水青き中若き農夫^{ひと}
採りたてのピーナツ味噌の今朝の顔
着膨^{とむ}れて輩^{とも}集ふ講習所

吉 野 一 男

元旦や話し相手の孫二人
古墳群案内板に春の風
風を待つ風鈴を手でゆらしけり
新しき簾^{はうき}の先の彼岸花
地図開き何処^{どこ}にも行かぬ日向ぼこ

米 須 あや子

読初の歳時記に知恵多くあり
寒明ける前頭葉の動き出す
麦の芽や秩父連山晴れ渡り
春^{しゅん}筍^{じん}の顔出すまでや無音界
雑談中雲雀空より仲間入り

渡 邊 美智子

幸住む山から山へ春の虹
麦秋や宙^{そら}の青さの山河行く
花火師の一夜の奢^{おご}り乱れ咲く
庭の香や五代の愛^めでし金木犀
昇陽の光を抱^{いだ}き寒櫻



俳句の編集を終えて

今回、五人、二九五句の応募の中から、三名の編集委員が優秀として選出した次の八句を紹介いたします。

畏れつつ鯨祭を踊るかな

岡本 好史

宮城県塩釜市の鯨祭の盆踊りなのです。かつて塩釜の沖の島である金華山の付近は鯨漁が盛んに行なわれ、塩釜の町は大変に賑わい榮えていたのです。塩釜の民は、今も繁榮をもたらしてくれた鯨をあがめ、うやまうために踊っているのです。地方の一行事を取り込み、巧みに表現をした一句です。

春風やサドル上げたる一輪車

勝田 仁恵

この句の「サドル上げたる」が、暗に、子の一輪車が上達したことを表現していて巧みです。春風に乗って、一輪車を操る姿が浮かび上ってくる句なのです。

のび太らのあさうな土管花吹雪

加藤 幾美

ドラえもん達のかくれんぼ遊びなのです。「花吹雪」が情景をなお鮮明にしています。ファンタジックな面白い句になっています。

しみじみと紀寿ふり返る花の雨

神山 喜美代

紀寿（百歳）の作者なのです。毎号、素晴らしい句を発表されていることに、頭の下がる思いがします。この句は、桜の花に、やさしい雨が降る中、百歳の来し方を、しみじみとふり返っているのです。ただ胸を打つ句ではありません。

いつまでもお元気で句を作り続けられることを願ってやみません。

韋駄天のトライ一瞬ラガー吼ゆ

塩野 薫

韋駄天走りのラガーが敵のタックルを躲しながら、一瞬のトライを決めて、空を仰ぎ吼えたのです。まさに、巨体のラガーが叫ぶさまは、野獣の吼えるさまなのです。ラグビーの流れるようなリズムと臨場感のある一句です。

サーカスの枯野へつづく楽屋口

鈴木 敏雄

巨大なテントの中で演じられる華やかなサーカス。それに反して、色々な人生が混じり合う楽屋なのです。その、何かもの哀しい楽屋口から枯野へと道は続いているのです。ジンタの音の聞こえてくるような句です。

夜桜や恋の闇へと漕ぐボート

露崎 榮三

恋人達の漕ぐボート。今、ボートはライトアップをされた桜の下を抜けて、夜の闇へと入ってゆくのです。果たしてこの二人の行く末は、ミステリアスな句ではありません。

蝙蝠の飛び交ふ宵の生臭し

新村 洋子

この句の眼目は「生臭し」なのです。うす気味悪い生き物のこうもりが登場することで、一句が俄然生臭くなっているのです。嗅覚に訴える句なのです。

星野学園より五名の出句があつたことを申し添えます。

(石田・對崎・益子)

川 柳



新井しま子

初孫で新河岸農家鯉のぼり
おとお坂おばあの話追い剥ぎが
田植時新河岸河に水多く
サイレンでここ救急の通る道
ダイケアで川柳仲間顔合せ

伊藤南美

筋トレに脳トレ老いを突き付ける
朝昼晩服薬のため食べている
百歳へ導かれてる葉漬け
昨日今日皆過去にして明日へ向く
米よりも食べ物欲しい飢餓の民

新井紀男

春の宵値千金花ざかり
おせち炊き紅白みつゝ忍ぶ妻
おぼろ月値千金春がきた
柱きず高三息子我同じ
糸川氏黄泉で喜ぶH3

指宿恒子

選抜の若人の目に澄んだ空
なるほどと聴く耳持つて好々爺
似たくない親の遺伝子まる移し
新札の顔も覚えずキャッシュレス
美貌武器勝負できない年となり

榎本 スミ子

新之助せがれ持ち来る母の日に
断捨離も時期をのがした大仕事
又値上げまとめ買いにも限度あり
最近 は 昔の病氣ぶり返す
好きですと書いて見たいなラブレター

金剛とみ

共白髪昭和百年無事傘寿
一枚の写真が語る家族愛
日々感謝三食昼寝医者いらず
歴史あるお宝眠る蔵造り
将来の夢語る子の輝く目

栗原 正歩

星条旗唯我独尊突き進む
図書館の予約切らさぬ本の虫
外人に富士見る名所指南され
愚痴を聴く医師に傘寿があやされる
古古古米餌と発言非難浴び

島田 繁夫

春近い雪室リング目覚め待つ
恋の声田植を終えた田に響く
早乙女の八十八夜手摘み歌
静寂の湖面に映す赤紅葉
誇らしげ熊手手にする事業主

島田精一

痛みさえ甘い思いの古い傷
お荷物にならぬためにも趣味を持つ
自らを誉めてやりたい歯が二十
せかせかと歩く気配で友と知る
外つ国の乙女装うランドセル

関徳二

川柳の作句の悩み高い壁
誰からも制約されず日が暮れる
農続け老いも限界やつとやめ
身の努力やつとの作を馬鹿にされ
さびた脳昨日の約をもう忘れ

清水元氣

耐える事苦手が増えた平和ボケ
長寿国少子化子らが背負わされ
人類の自然破壊で温暖化
出不精に人情減らすテレワーク
見栄と欲減らせば日々を楽に居れ

田中耕平

お互いが杖となってる共白髪
老いて尚夫婦喧嘩もいい薬
惚れ合った二人は同じ枯れススキ
顔よりも優しい気持ち二度惚れる
直ぐに効く地獄の沙汰も金次第

寺 本 甚 太

補聴器と杖を頼りに趣味の会
いつか来る神のお告げに逆らわず
生かされた命精進して暮らす
子の杖に守られ暮らす老いの日々
支え合い山河を越えて共白髪

戸 住 澄 枝

麻雀は楽しいけれどあがれない
百歳の母の笑顔が可愛いな
夏休みあまりの暑さかき氷
高すぎる土用の丑のうなぎ買う
梅雨明けの危険な暑さ命とり

時 枝 利 幸

仮設小屋出たら笑える窓にする
少年の地図へ多彩な夢がある
除幕式終り記念碑呼吸する
開け閉めで不満をドアに喋らせる
名水へ遠くの喉が溶けに来る

中 村 紀 夫

開かれる道を見定め突き進む
世界中続く和平を望む日々
地震帯終の住み家は避けて建て
闇バイト軽い応募が仇となり
八十路すぎほどよく忘れ生きて行く

中村久雄

お願いのその一言に踊らされ
静寂が心を洗う古寺の道
スッキリと見えぬたんこぶ取り払い
惚れ惚れと魅せる踊りの身のこなし
蛇年に一皮剥けて育て孫

平柳一帆

先生が好きで苦手も好きになり
恩恵を受けて残った核のゴミ
未来から来てる信号読み取れず
円安へ爆買いツアー押し寄せる
不揃いでいいオンリーワンになろう

野本一史

買っても腹に込めたい肝っ玉
否と応折り合いつけて酒旨い
歯車が噛み合う仲はいつも酒
愚痴こぼす度に余生が褪せて行く
幸せのピークはもつと先にある

細田良雄

米米と歌う人たち今いずこ
父百俵子は六十万トン大出世
あれ買った高いお米は未開封
麦押して丸一米と呼んだ頃

本間 四郎

平凡が日々好日と樂天家
江戸っ子のどんなもんだい矜恃あり
守備範圍自覺しているテリトリ―
頑張るな医者が手抜きを唆す
盆栽へ枯淡の境地追い求め

我妻 信子

口上のうまさで今日も客を寄せ
ストレスも解消します家事放棄
手を合わせ今朝の元氣にただ感謝
うっかりと押してしまった削除キ―
どの子へも不変無限の母の愛

三田 地輝 憶

まだ夜空三・一一の後拝む
靴底に未練残さぬ明日を追い
米寿来る生きる知恵練る昨日今日
御互いに認め会えてる共白髪
五感追ひ日々の平凡糧に決め

渡辺 健男

好奇心楽しく生きる糧にする
お金より愛を選んで五十年
好きな事まだまだやるぞ傘寿過ぎ
もう一歩夢が膨らむ自己ベスト
好きな子が座った椅子がチョイ温み

川柳の編集を終えて

本年度は文芸賞は有りませんが、経験豊かな方々の暖かい投句が一二〇句あり、掲載致しました。編集委員一同感謝しております。これからも、より一層のご応募を頂けるよう努力して参ります。

高齢化が進み、川柳人界の変遷を強く感じる今日です。日常の生活リズムも年々進化し変化し、流されることなく日々努力して進むことが重くのしかかってくるように感じられます。時に畏縮する場合すらあります。

各地で行われる川柳会も、人数や費用の関係で開催出来ないという話も聞きます。こうした厳しい現状と戦っている今日と思っています。時世がめまぐるしく変化している現状を考慮し、少しでも対策の手が必要と思われまます。

「文芸川越」は、川柳愛好者にとって、貴重な発表の場であり、また交流の場でもあります。これからも、日常や社会を題材とした川柳をつうじて「文芸川越」の発展に寄与したいと思ひます。因みに十年前の第35号の投句数が二二五句、今回は一二〇句という現状でした。市の文芸創作活動の一環としてこれからの希望につながるよう懸命な努力をしていきます。

川柳を愛する方の増加を見守り育てるために、関係する方々に御支援を願うとともに、文芸を楽しむ川越の川柳会の今後の繁栄を願っています。

今年度の目に止まった佳句を列記させていただきます。
ディケアで川柳仲間顔合せ

新井 しま子

百歳へ導かれてる葉漬け

伊藤 南美

新札の顔も覚えずキャッシュレス

指宿 恒子

おぼろ月値千金春がきた

新井 紀男

好きですと書いて見たいなラブレター

榎本 スミ子

外人に富士見る名所指南され

栗原 正歩

将来の夢語る子の輝く目

金剛 とみ

恋の声田植を終えた田に響く

島田 繁夫

お荷物にならぬためにも趣味を持つ

島田 精一

人類の自然破壊で温暖化

清水 元氣

誰からも制約されず日が暮れる

関 徳二

顔よりも優しい気持ち二度惚れる

田中 耕平

除幕式終り記念碑呼吸する

時枝 利幸

麻雀は楽しいけれどあがれない

戸住 澄枝

開かれる道を見定め突き進む

中村 紀夫

お願いのその一言に踊らされ

中村 久雄

否と応折り合いつけて酒旨い

野本 一史

守備範囲自覚しているテリトリー

本間 四郎

どの子へも不変無限の母の愛

我妻 信子

好奇心楽しく生きる糧にする

渡辺 健男

(寺本・平柳・三田地)

小説



夢

青 木 洋 平

夕陽が下りの列車の窓から車内に入って来て、明るかった。林幹彦は顔を右手へ向けて、自分以外に誰か乗客はいるのかなと思い、見てみた。彼の乗っている車両には誰もいなかった。彼はほっとして車窓の景色を眺めた。誰もいなくていい、気楽でいいと思った。未だコロナが完全に終息してないので、もし近くですごい咳をしてウィルスを周囲に撒き散らしている人がいたり、ブツブツ独り言を言ったりしている人がいたら、もっと別の車両へ移っていただろうと思った。林幹彦は、眠くて眠くてしょうがなかった。うつらうつらする中で、ふと自分は何時からこの列車に乗っていたのかと思った。

全く記憶がなかった。何処から乗車したかも、全く憶えてなかった。そして、自分がこれから何処へ向かっているのかも分からなかった。

「次はU駅ー、U駅ー」

若い男性の車掌の声で、アナウンスが聞こえて来た。三十秒程して、ガタンと音をたてて前後に大きく車体が揺れると、列車はU駅のホームに停車した。

林幹彦は窓ガラスを持ち上げて、窓から顔を出してホームを眺めてみた。誰も座っていない緑色のベンチがあった。林幹彦の心の中に、ある光景が浮かんで来た。少年時代の自分である。

日公園は結構広く、自転車で一週約十五分程かかる。公園内には、あちこちに小山があつて毎年三月になると梅が満開になり、澄んだ香りが漂っていた。公園の東門の向かいにあった家は猫屋敷だった。白色の壁と青色の屋根を持つ二階建の西洋風の邸宅の広い庭は、常に芝生が広がっていた。中央のスプリングラーからは、噴水のように水がまかれていた。邸宅の門構えも立派で、二メートルはあるのかと思われる堅牢な扉が立っていた。門の側の煉瓦塀にブラスチック製の看板が掛かっている、〈生徒募集 ピアノを教えます〉と黒字で印字されていた。一階のリビングと思われる所の窓が開け放たれ、美しいショパンのピアノの調べが通りの方まで聞こえた。(どんな人が弾いているのかなあ)

邸宅の前庭にいつも猫が二十四くらいいた。猫は庭からじっと塀の外を歩いている通行人を眺めているようだった。

トラ猫、黒猫、白猫、黒と白のパンダのような猫、一見すると野良猫のような、俊敏で逞しそうな猫ばかりだった。この邸宅に通いで来ている白いエプロンを着けたお手伝いさんが、銀色の小皿にキャットフードを入れて餌をあげているのを見たことがあった。お手伝いさんと思われる人が

通いと知っていたのは、毎朝七時頃と夕方六時頃に鞆を持った私服姿のお手伝いさんが出入りしている姿を、何回か見たことがあったからだだった。

この邸宅には、学校が夏休みや冬休みになると、何処か遠方から女の子と男の子の姉弟がやって来て、一ヶ月程滞在していた。今もリビングの方から姉弟の笑い声が通り迄聞こえていた。

猫達を見渡すと、その中に一際引き付けられる美しい白い子猫がいた。芝生の上を歩いていた。林幹彦は昨日の昼過ぎに、女の子が白い子猫を肩にのせて、門の外で立っていたのを見た。白い子猫の両目は美しかった。右目が赤色で、左目が澄んだ水色であった。他のトラ猫などはハサミで切られたように、シッポが短いのが多かった。その白い子猫は、長い白色の尾であった。

林幹彦が扉の下にしゃがんで、チュッチュツと唇と舌でやさしそうな音を出すと、白い子猫は幹彦を見て、すぐにスキップをするようにして彼の方へやって来た。林幹彦が子猫を抱き上げると、白い子猫は彼の両腕の中で小さく円くなった。林幹彦は、ちょっとだけ遊びに行こうと思い、子猫を抱いて駅の方へ行った。U駅のそばのアスファルトの道路の上に、白い子猫を下ろしてみた。白い子猫はキョロキョロと頭を左右に振って、周囲を見回していた。子猫は急に走り出したりすることなく、お座りをしてじっとしていた。

「かわいいなあ」

大学生風の若い男が、近付いて来た。

「君の猫？」

うん、と林幹彦はただ頷いた。

大学生は、道路の上にじっとしゃがんで座っていた白い子猫を抱き上げると、頭を右手でなでた。

「きれいな目の猫ちゃんだね」

林幹彦はうれしそうに微笑した。

「ありがとう」

大学生はそう言うのと、白い子猫を林幹彦に手渡した。そして大学生は道を行ってしまった。林幹彦は白い子猫を抱いたまま、近くの空き地へ行った。空き地の入口に着くと、そばで縄跳びをして遊んでいた三人の女の子達が、縄跳びをやめてやって来た。

「触らせてー、触らせてー」

女の子達は交互にそっと白い子猫を抱いた。やがて白い猫は少し疲れたのか、美しい両目を眠そうにしながら、女の子達のなすがままになっていた。

「ありがとう、ありがとう、ありがとう」

三人の女の子達はもう飽きたのか、林幹彦に白い子猫を手渡すと、また向こうへ行って縄跳びを始めた。

（どうしようかなあ、この空き地で飼おうかなあ）

林幹彦はふと白い子猫をこの空き地で育てようかなと思った。と同時に、あの邸宅の姉弟のことを、思い出した。

(今頃、あの女の子はきっとこの美しい白い子猫を探しているのではないだろうか……)

林幹彦は、そのことを少し心配した。しばらく林幹彦は、白い子猫と遊んでいた。やがて、辺りは次第に薄暗くなっていた。西空が夕焼けで赤くオレンジ色に横に広がっているのを彼は見た。

(どうしようかな……)

白い子猫を空き地にボンと置いておくことは出来なかった。そしてマンションに住んでいる林幹彦は、白い子猫を家へ連れて帰ることも出来なかった。

(……そうだ、やっぱりあの邸宅の女の子が抱いているのが、この子猫には一番ふさわしい)

そう林幹彦は思うと、夕焼けでやさしく染まる町中を、あの邸宅へ向かって行つた。角を曲がって、真つ直ぐ歩いてだんだんと邸宅に近付くと、女の子の白い子猫を呼んでいる大きな声が聞こえて来た。

「ミャオー、ミャオー」

女の子の澄んだ声は、通りの端にまで聞こえていた。女の子の声は、少し悲しそうであった。

「ミャオー」

男の子の声も聞こえた。

(悪いことをしたな)

林幹彦は抱いている白い子猫の小さな頭を、右手でそつとなでた。

林幹彦が邸宅の前に着くと、庭にいた姉弟が幹彦の前へ走つて来た。

「駅の近くにいたから持ってきた」

幹彦はそう姉弟に言つた。そして腕に抱いている白い子猫を女の子に手渡した。辺りはすっかり薄暗くなりかけていた。姉弟はうれしそうな声で、林幹彦にお礼を言つた。

「ありがとう、ありがとう、ミャオを見付けてくれて」

庭の中で、女の子は白い子猫を両手で高く空へ向けて持ち上げた。

姉弟と遠くのまだ微かに赤く染まっている西空が、一枚の美しい影絵に林幹彦には見えた。

「ピンポーン、ピンポーン」

列車の扉が閉まる合図の音が聞こえて、林幹彦は、はつと我に返つた。

「扉が閉まります。ご注意ください」

車掌の小さな声のアナウンスが、車内に流れた。扉が閉まると、列車はまた発車した。車窓からは列車が、青々と広がる森の中を走っているのが分かった。窓から少し顔を出すと、日差しがとても眩しかった。

(これからこの列車は何処へ行くのかな)

林幹彦は車内を見回した。誰もいなかった。

夕陽が、車内に入り込み始めた。

(一人の方が気楽でいいや)

「おじいちゃん」

ふと何処から自分と呼んだ声が微かに聞こえた気がした。本当に微かにという表現がびつたりの声だった。その声は誰の声だろうか考えた。分からなかった。でもよく聞いていた声のような感じもした。分からなかった。空耳だろうと思った。列車の窓から入って来る森の風が、気持ちよかった。深呼吸をした。

「次はS駅ー、S駅ー」

若い男性のアナウンスが、車内に流れた。すると、林幹彦はまた強烈な睡魔に襲われた。その睡魔にどう抗おうと全く無駄であった。その時、またさっきの若い女性の声がした。

「おじいちゃん！」

(……もしかして、もしかしてその声は明子なのか?)

S駅から徒歩で十分程の所にあるマンションの屋上にいた。屋上の柵は二メートル近くあったが、Mは柵によじ上はって柵の上に座っていた。地上十四階の建物の屋上だったから、万一Mが柵から落ちたらどうなってしまうのだろうと林幹彦は思っていた。Mは林幹彦にとつてどういう関係なのか、本人もよく分からなかった。幼稚園、小学校、中学校、そして高校まで全て同じ幼稚園、学校に通ったが、一度も同じクラスになったことはない。ただ同じマンションの住人だったというだけで、一緒に遊んだりしていた。

ただMと林幹彦は全くの正反対であった。Mは、容姿端麗で学業優秀、スポーツ万能だった。林幹彦は全てにおいて普通であった。本当はあまり合わない関係であったのに、Mに呼び出されると屋上などで会話をしていた。Mは意地悪な性格であった。人間が努力しても変わるものがない点を、本来なら口には出さないことでも、あえて話し手に突きつけて反応を楽しむ悪い趣味があった。その時もMが、林幹彦に何かを言った。幹彦は急に怒りがこみ上げてMを突き落とそうと一瞬思った。もしそんなことをすれば、Mは地上へ転落し死んでしまうのだ。ただMはすぐ「幹彦と自分は同志だ」と言った。同志……、何故かその言葉だけで、林幹彦の激怒は消えた。

「おじいちゃん！」

林幹彦は目を覚ました。一体どのくらい眠っていたのであろうか。首が痛い、体も重い。白衣を着た若い女性が自分の顔をじつとのぞきこんでいる。

「明子か」

あの声は孫の明子の声と分かった。医者となった孫の勤めている病院に三ヵ月前から入院していたことを、思い出した。枕元の目覚し時計は、朝の六時を示していた。

「もう大丈夫。また来るわね」

若い女性外科医は、颯爽と病室を後にした。

風

浮橋透徹

潮騒が絶え間なく周囲一帯に響くなか、太陽はすでに西へと傾きかけていた。

光線がたゆたいがちに、一本の線をこちらむきに引かれ、ある場所を境により太く、海面をのんびり戯れている。

光の散らばりが潤いを与えながら隅々まで広がりをもせている。そのなかを小波がゆつたりと規則的に次々通り過ぎてゆく。

そんな光景を目の当たりにしつつ、こちらもただ眺めるだけで、ほかにすることがない。

海は青々と穏やかに、水平線まで続き、そこから青空となつてせり上がり、横雲が静止画のごとく水平線近くを優雅に棚引いている。

しばらく経った。その間に、雲の形状にも変化がみられ、水平線近くの横雲は、静止したまますぐ下の海の色に染まりかけ、上空は色鮮やかに、夕空を装飾させている。

それにしてもこの時間、一体何を考えていたのだろうか。冷静さを取り戻そうとしていたはずだが、いまだ鹵車が嘔みあつてくれないようだ。

心穏やかでないのに、その理由もまた今一つ分からずにいたのである。

忘れたか、思い出さないようにしているだけか。

分からない。いや、分かりたくもない。ただ、目前に広がる景色に感情すべてを埋没できたらと、臆に願う程度である。

もちろんそこに、然したる理由はなく、安っぽい思いつきによる現実逃避に過ぎないことも分かっている。それでもここがよりよい場所、心地よい場所だといひ聞かせ、安住してもよいくらいに思っている。忘れたい事柄を引きずりつつも、こうすることに、なにがしかの意味を持たせたいのだ。

ところで一体、何を忘れようとしているのだろうか。

もう一遍考えようとして、すぐやめる。

そうしないでおくのが、とりあえずの目標だから。

そうだ。今までずっと、とりあえずの寓居となるべき場所を求めて彷徨い、ここへ来た。せつかくたどりに着いたのだから、しばらく閉じこもり、出る術ごと忘れたつもりで英気を養いたい。そしていつの日か、夢のような未来へ踏み出すタイミングが訪れた時にでも、正々堂々、飛び出せばよい。

目に映る範囲のなか、その中央付近を最前から一隻の漁船が右から左へ、手前側へと斜めに動いている。帰港するところであろうけれど、堤防は左右に幾つもあり、その一

つには灯台が、青空の下、赤い光を淡く明滅させている。

どんなふうにも航跡をたどって行くか興味深く見守りたい。渚近くでは子ども用の赤い小さなバケツが僅かな範囲ながらむこうとこちを行き来している。

現在、潮は引いていて、波が速やかにバケツを連れて逆回転しながら膨張し、一列に高くなった姿を見せつけてから一気に濡れた砂浜へ、白波を塗しつつ低く低く突き進んでゆく。バケツは勢いよく海水を敷いた砂上を転がり、転がっている最中潮がバックし、バケツまでも再び攫われる。上空の明るさが少しずつ薄れてゆくなかで、海面はひたすら同じ彩色を増長させるがごとくオレンジに変色している。

そんななか、漁船がさらに近づいて、斜め左へ目前を通り過ぎようとしている。ドドドドドド。ドドドドドド。そんな音がしているはずだが、すべて潮騒に掻き消されている。海面はコーティングされているかのように玲瓏と、光沢を帯びた艶めかしさをそこかしこに放っている。

これはきつと何もかも忘れさせてくれるための暗示に違いない。潮騒こそが今最も聴きたい音で、現在それに浴している。これ以外に聴こえるといえ、せいぜい時折強く吹く風くらいだ。

バケツはいつの間にか、姿を消していた。視界の範囲にあるとは思うが、海面の下深く、潜り込んでしまったのだから。

陽光はあまりに眩しく、直視しようとするば目が眩み、しばらくは視界そのものがおかしくなっていた。

きつく目を閉じてなお、光の残像がじれったくも目の奥に蔓延り、消えるのを待って、再び見渡すことにする。

青空も今やすっきり青ではなくなった。夕焼けがより一層鮮明に、雲の下半分を赤く燃やし、空全体が透明度をどんどん増してゆく。

堤防むこうに岬が張り出し、窪んだ内側へ、漁船が吸い込まれてゆく。港は堤防の高いコンクリートに隠れ、間もなく姿ごと消している。

水平線のすぐ上を棚引く横雲も一部が夕陽に隠れ、その上に空色の層ができ、さらにその上にも横雲が棚引いている。眩しさは相変わらず強度を保ったまますべて眩ませ、こちらも再び海面の方へ視線を移す。

一本の導かれた光線は、今も煌びやかに揺れていて、その間を一定のリズムで波がゆつくりと斜めに泳いでいる。

太陽が岬の先端辺りまで下りてきて、下方部分が海のかへ沈み込んでいる。すこしずつ日が翳ってゆくにつれ、昼間の明るさを無理やり取り戻そうとしているようだ。

そしてこのまま、太陽が前方から姿を晦ました。かわって灯台の小さな赤い光が、存在を発揮させるまでになっていた。雲間が層を為すなかで、青空がより透明度を増している。

海面は今も穏やかに揺れていて、灯台の明かりが明滅す

る堤防付近を境に、外海から水平線にかけて、すっかり黒ずんだ。

西の空に夕景を残し、着々と夜を迎える最終段階へ突入している。水平線の上を這う横雲がゆっくり動きだし、岬の奥の上手側へ移動している最中で、透明化する空の層が高く広がりを見せつけて、その上の横雲は分解されて上空へ高々と吸いこまれてゆく。

あちこちで雲が誕生し、そのいくつかが消滅し、残りは成長著しい姿を披露する。生まれたての雲は生きがよく、天高く上昇しながら居場所を見付けて膨張し、存在を誇示している。

さらに夜が進行し、水平線の辺りだけ赤く、辛うじて昼間の状態を留めているが、上空はすっかり夜になり、雲は闇に紛れ、灯台の明かりがいよいよ発揮されだした。

それでもなお、潮騒は風の音を呼び寄せては、この辺りを支配し続けている。

宵闇が一带を包み、風の音をまき散らすなか、見上げれば月はなく、疎らに星を配置させているのみである。星明かりはまるで役だたず、上空しか照らしてくれない。目前では灯台の赤い明滅が、冷たい風に凍えそうになりながら、僅かばかりの温もりを連れてきてくれる。

ゆっくりと時間をかけて宵闇に赤々と灯り、すーっと消える。それをただ繰り返すだけで、あとは何もないらしい。寒さに耐えるのも次第に限界を覚えるまでになつてきた。

目前の光景にすべての感情を埋没させるつもりでいたけれど、これ以外何も見せてくれないのは、さすがに堪えたものではない。

さらに時間が経過して、いい加減、ここを離れたくなつた。

せっかく見付けた場所だけど、諦めてまた別を探し、よいところが見付かり次第、そこでの暮らしを始めたいと思う。

ただここは取りあえず普遍的な寓居であるし、居心地自体悪くなく、時間をたてずにきつとまた誰か入ってくるに違いない。（退室）

まずは前方に灯台の赤い光が確認できる。それはまるで線香花火のようで、海面に反射するでもなく、風と波が暗闇のなか、寒々と奏でられた空間を築くのみである。

灯は灯り、灯は消えて、また灯る。

また消えて、また灯り、また消える。

いつまでこの状態ばかり繰り返すのだろうか。

ひよつとして、永遠に続けるつもりか？

いやまさか、時間がくればきつと朝になる。

だがそれまでずっと、赤い点しか見せない世界に居座り続けるのは苦痛であり、退屈極まりない。

いっそのこと、すこし色を付けてみてはどうだろう。

そもそも、あの光を灯台などと決めつけるのはあまりに

勿体ない。じっと灯っているよりも、回転させてみた方がよくはないか。

よし、早速始めてみることにしよう。

長々と続いた点滅が終わり、赤い光が灯ったまま、ゆっくり回転し、みるみる速度を上げていく。

こうなるともはや灯台とはいえず、緊急車両とみた方がよさそうである。

潮騒はどうか。どっちみち暗闇でしかないのなら、潮騒というより、何らかの喧騒に変化させてみてはよくはないか。

いや、さすがにそこまでとなると飛躍のしすぎで、波音だけは、今もこのあたりを支配し続けた方がよいかもしれない。

そうこうするうち、波音に被せるようにパトカーのサイレンが鳴り響き、回転灯も左へスーッと揺れ動いた。波打ち際近くに人の遺体が浮き上がり、暗闇のなか、誰かが砂浜に引っぱり上げて横たわらせているらしい。

回転灯を乗せたパトカーが手前の海岸道路にブレーキ音を立てて停車し、余韻とともにサイレンが鳴り止み、再び潮騒だけが周囲に響くなか、すべてのドアが開いて警察官が飛び出し、ひび割れたコンクリートの細い階段を一行に下り、砂浜へ到着した。これから実況検分が行われるのだろう。

砂浜は大勢の住民らにより埋め尽くされ、懐中電灯の弱

い光がそこかしこに向けられている。警察官が群衆の輪の外側に張りつく格好で横へ広がり、列の内側へと浸透されてゆく。投光器が複数台置かれて明かりが灯り、砂浜を照らすその先で、白波が黒々とした海面に無数の粒子を弾かせている。遺体はまだ照らされてなく、再び誰かがそこへ行き、両脇に腕を通し、砂浜の中央あたりまで後ろむきに運んだ。踵だけが生きてきた証であるかのごとく砂浜に蛇行した二本の跡を残し、複数の投光器が照らす場所まで運ばれ寝かされている。その姿は残念ながら人々に隠れて見えないが、老若男女を問わず、死んでいるのだけが確実視されていた。

遺体はひよつとして、あなたかもしれない。唯一ここにいるのがあなただから、それだけの理由ながら、そうではないかとも思われる。

大勢たむろする人々のうち、幾人かが蟻のように集団の外側を駆け回り、様々な声が飛び交っているはずながら、すべて風と潮騒によりかき消されている。投光器による複数の明かりも、周辺しか照らさず、それ以外強いて挙げるなら先程と同様、人々の間隙からうつすらと白波の先端部分が見える程度だ。

そのため、横たわるあなたと思しきその人が、腐乱しているか否か、顔や体に損傷があるかどうかも含め、さっぱり分からなかった。警察官や住人らによる人壁に、何もかも閉ざされているのだから仕方ない。

だが、もしこれで横たわる遺体があなたでないとしたら、
一体誰が死んだことになるだろう。

遺体が発見されたとばかり思っていたのに、それすらも
違うのか。

ならば一体何が正しいといえるだろう。

投光器による明かりはいつの間にか消され、砂浜に集つ
ていた人々も、足跡も、警察官も、パトカーも、あなたと
思しき遺体も、何もかも消え去った。

再び灯台の赤い光が、深呼吸でもするように、ゆっくり
灯り、消えて闇となり、また灯る。

これ以上はもう何も描けず、ここにいる必要すらもなく
なった。この辺りでまた別のものと入れ替わった方がよい
かもしれない。（退室）

再びここが空いたから戻ってきた。どこか別の場所でも
と思つてはみたけれど、踏み出す勇気がなかった。だから
こそ来たのだし、せっかくだから、しばらくゆっくりして
いればよい。

ここでは今も灯台の明かりが明滅し、星明かりはなにも
照らしてくれず、一帯を闇と化す空間だけが延々と披露さ
れている。

寒さもまた相変わらずで、一向に朝を迎える気配がない。
こうしたなか、無数の場面が脳裏をかけ巡っては消えて
いった。そのほとんどが、ここ以外の場所だったから、で

きるかぎりここだけに限定し、抽出しようと心がけるうち、
なにも浮かばなくなってしまった。

いずれにせよ灯台の明かり以外なものも見えないのだから
仕方がない。結局こそも、とりあえずの世界でしかない訳
で、寓居まで用意されているとはいえ、そもそもここがな
んという場所か、どこにも書いていなかったし、気にもし
てこなかった。

どこへ視線をむけても、暗闇から逃れることができず、
聴こえる音も今では延々と続く潮騒のみである。

こうなったらせめてもの救いとして、目前の海が風であ
るのを祈りたい。

たしか先程までそうであつたと記憶しているし、ここへ
戻つて以降は、ずっと風も収まっている。

だからこそ、そうであつて欲しいと思う。
特に意味はないけれど。

絵本

加山 聡

長女を背負って、乾燥しきった灰色の耕作地を貫く真つ直ぐな道を歩いていく。センターラインも歩道もガードレールも何もないアスファルトむき出しの道路が遥かに続いている。時折、スピードを上げた自動車を通りかかるが、申し訳ないくらいに大袈裟にハンドルをきって私の脇を抜けていく。対抗する車が道いっぱいに避けなければすれ違えないほどの道路幅である。そんな道をとぼとぼと歩いていく親子はさぞかし邪魔な存在であろう。漸く緩くカーブになるあたりに公団住宅群、これも灰色一色の高層建築物が見える。あそこに辿り着くまではこのまま歩き続けて、あと七、八分間はかかる。

陽が傾き始めたこのような時間に娘を背負って住宅の狭間を、田んぼ道を黙々と歩く父親の姿を近隣の人ほどのように見るであろうか。自宅を出てから暫くは、そのようなことをひどく気にしていたが、冷気に晒されているうちについに忘れてしまった。今はただひたすら歩いているだけである。画一的に区割りされた一塊の住宅地を抜けてしまつと、殺風景な広大な耕地が広がっている。空間の広がり

が柔弱な父を卑屈な男に下落させることを辛うじて阻んでいたのかもしれない。

師走の乾いた寒風が絶え間なく、そして容赦なく顔面を叩く。額、頬、耳と順番にその温もりを奪った冷風は勢いを保ったまま背中に回り、三歳になったばかりの長女の顔に吹きつける。無言で歩き続ける私と背負われて静かなままの長女のそぞろ歩きである。

（ひどく寒いだろうな。寒くて声も出せないにちがいない）

そう思った。

玄関の三和土で長女の恵を背負った。妻が恵に何枚か重ね着をさせ、トップに羽織^{めくみ}らせたオレンジ色のフリースが膨らんでいる。頭が寒かろうと妻が言い、髪を襟足で切りそろえた小さな頭がピンク色のニット帽で覆われた。

恵が外に行きたいと言ったのではない。恵は居間にあるファンヒーターの近くの床に座って静かに絵本を見ていた。ひとりで、全く気配もなく絵本に向かっている。ページを繰って終わりまでいくと、再び始めに戻るといふ繰り返しで一冊の絵本を相手にして長い時間を過ごしている。絵本は、主人公のウサギが森の動物たちの生活を助け、皆にやさやかな幸福を与えるという優しいお話である。妻は巧みに時間を作って、しばしば絵本の読み聞かせをする。恵はその時間をこの上なく楽しみにしている。妻の読み聞かせは大人の私が聞いていても惹かれる。情感が豊かな十分に

練られた音読するのである。

けれども今、妻は夕飯の準備に忙しい。おんぶひもで次女の萌を背負い、絶えず背をゆすり、萌に話しかけながら米を研ぎ、野菜を刻んでいる。生後八ヶ月になる萌は母の背中にいるときが最もおとなしい。母の背の暖かさを全身に感じることで何よりも安心感を得られるのであろう。

私は絵本の読み聞かせをしたことがない。怖いのである。妻の上手な音読しか知らない恵が、私の読み聞かせを体験したときにどのような表情を見せるのか。その表情を見ることが恐ろしいのだ。学生の頃、授業時の音読で、その稚拙さによってどれほど恥ずかしい思いをしたことか。その痛みを今でも引きずっている。私はただ文字を追って声を発するだけで精一杯なのだ。

「お外に行ってみようか」

ひとりおとなしくしている恵に声をかける。恵は顔をあげ、表情のない目で私を見る。自分の名が呼ばれたので反応しただけというような表情である。意図がうまく伝わらなかったことが分かった。もう一度、同じ言葉を投げかける。少しの間があつて、小さな声で「うん」と応える。

自宅を出てから二十分、恵は黙ったまま私の背中に乗っている。防寒をしてきたとはいえ私の肩越しに冷え切った風を受ける素顔には、刺さるほどの痛みがあるはずだ。私は黙ったまま、ただ歩き続ける。明確な目的があるわけではない。同じ姿勢で同じ絵本を静かに繰り返ける恵が切な

く見えて散歩に誘ったのである。けれども、このような寒風にただ晒されるだけならば居間にいた方がどれほどよかったことか。恵は外に行くということがこのように辛い体験になるとは思ってもみなかったことだろう。親がこうだと決めればその通りになるしかない年齢である。

「おとうさん、おやまがまつしろ」

突然、恵が話しかけてきた。

「お山？」

「うん、しろいおやまがみえる」

高層住宅の左に視線を振ると積雪した師走の富士山がはつきりと見える。

「ああ、白いね。お山に雪が降ったんだね」

「ゆきがふった」

「そう、白いのは雪」

「うさぎさんみたいだね」

「そうだね、白い大きなウサギさんだ」

「まつしろのうさぎさん」

「真っ白だね」

恵は黙った。恵は富士山を見続けている様子だ。黙ってしまったことがそのことを思わせる。

「公園に着いたら、お休みしようね」

「うん」

公団住宅群の中にある児童公園に歩き着く。

木製のベンチに恵を下ろし、私は自分の首元にあったマフラーを幾重かに畳み、その上に恵を座らせる。タイミン
グよく寒風が小休止に入っている、いくらか暖かい気
分になれる。私は隣に座り、コートポケットから小振り
のペットボトルを取り出す。家を出るときに空のペットボ
トルに白湯を入れて持ってきた。ありがたいことにまだい
くらか温かい。反対のポケットから個別包装になったクッ
キーを二つ取り出す。家を出るときに、キッチン「お菓
子箱」を探って二枚だけ持ってきた。

「恵、お湯を飲むかい」

「うん」

キャップを外して、ペットボトルを恵に持たせる。

「クッキーがあるよ、食べなさい」

「ううん、うちで、もえちゃんとたべる」

うちには、まだいくつもあるよ、と口から出そうにな
ったがやめる。それを言っても恵は、「萌ちゃんと」と繰
り返すだけだ。

「うん、そうしようね」

恵は時間を掛けてペットボトルの一口を飲んだ。

「おとうさん、おやまにいつでもいい?」

「いいよ」

公園の中央に大人の背丈よりも若干高さのある土盛りの
小山がある。周囲をコンクリートで固められた小山は、山
頂部が一メートル四方ほどの平らなスペースになっている。

正面と背後には幅一メートル弱のステンレス製の滑り台が
設置されている。左右は石材ブロックで組んだ上り下り用
の階段になっている。子供の遊具施設なのに何故あのように
不便な大きさのステップの階段にしたのか、あれでは小
学生でも難儀する。ここに来るたびにそのように思う。

恵はその不用意な階段を全身の機能を使って登っていく。
ひとつ上のステップを両手で掴むようにして一段、一段と
慎重に上がっていく。登り切ると、恵は山頂のスペースに
しゃがみ込んで地面をいじっている。恵はその遊びが好き
なようだ。山頂のコンクリートの床面に様々な色タイルが
貼り付けてある。私は恵と一度だけ階段の途中まで登って
いき、山頂の設えをチラリと眺めたことがある。それが何
かの絵になっているのか、ただの装飾模様なのか、分から
なかった。恵はそれを指でなぞって時間を過ごす。声を掛
けるまでそうしているのである。

小山の上で恵が不意に立ち上がった。そして、西の方角
に目を送り、見つめている。何を見ているのであろうか、
いつまでも恵は姿勢を変えない。私はその不可思議な恵の
姿をぼんやりと見ている。やがて、恵は私に顔を向けた。
ピンクのニット帽から覗く小さな顔に柔らかな笑みがある
ように思えた。私がその対応に躊躇している間に恵は姿勢
を変え、足元のタイルを触り始めた。そして、再び恵をぼ
んやりと眺めている時間が過ぎていく。

私は三週間ほど前に仕事を失った。私には今、仕事がない。

いのである。当然のことながら収入がない。我が家は収入がないまま年を越すことになる。専門技術職なので解雇はないと思っていたが、呆気なく失職を宣告された。与えられた仕事はきちんとこなしてきた。しかし、それだけである。自分の仕事ぶりを上司に褒められたことはない。同僚に頼りにされたこともない。事業所の発展に努力したという気負いもない。いくらでも取り替えのきく人間だったのである。事業所の対応に恨みはない。安閑と漫然と仕事を続けてきた自分に失職に至る全ての原因があった。

機材を更新する予定であると上司から告げられた。

「新しい機器を扱えるか」

「基本システムは同じなので研修を受ければ出来ます」

「研修が必要ということか」

程なく新機材が設置され、ひとりの若い専門技術者が新規採用になった。配置転換の辞令があつたが、口下手な自分には出来るはずのない対人の業務であつた。異動当初は丁寧な業務を教えてくれた同僚たちの表情が日毎に強ばっていく。続けられないと思った。

いつの間にか時間が経ってしまった。公園のベンチや遊具の足元に、はつきりとした闇が生じ始めている。急いで帰宅しなければならぬ。立ち上がると、ベンチの上にあつたクッキー二枚を手に取り、そっとポケットに入れる。すっかり冷えたペットボトルは手に持ったままだった。

恵を見た。恵は、ステンレス製の滑り台を滑り降りようとしている。恵は滑り台を降下した経験がない。いつもは頼りない足つきで長い時間を掛けて不揃いなステップを下りてくる。あつと思ひ、滑り台に向かって走り出したが、同時に恵がステンレス板を滑り始めた。身体がすっかり緊張し、目を固く閉じている。足が着地点に触れると滑り降りた勢いで上半身が前方に傾いて顔面から地面に倒れた。ザザッと乾いた小砂利が動く音がする。全てが一瞬間の出来事だった。駆け寄り、恵を抱き起こす。唇の上の部分が擦れていて、血が滲んでいる。恵は泣かなかつた。痛がりもせず、何も言わず普段通りの表情をしている。ペットボトルの水でハンカチを濡らし、恵の顔を拭いた。そして、恵の鼻の辺りから肩までを私のマフラーでぐるりぐらりと巻く。恵を背負い、後ろに回した腕に力を入れる。

歩いて来た道に戻って行く。耕作地の間の長い直線道路を小走りに進む。延々と続く乾いた地面の向こう、右手に棟を寄せ合つて佇んでいる住宅群が見えてくる。防犯灯と各家の玄関灯が慎ましくオレンジの輪を作っている。そのオレンジが大きくなるにつれて頬を流れる厳しい寒気がいくらか緩くなる。そう思えた。帰途は急いだ。師走の寒さに加えて、傷の痛みが恵の顔を覆っている。

「おいて行かれると思ったんだね」

「いいえ、帰り支度をしているお父さんに手間をとらせた

くなかったのです。階段を下りていたのでは、お父さんを待たせると思ったのよ」

「それで滑り台を」

「よその子が滑り降りるのをよく見ていたでしょ。滑り降りた方が早いと思ったのね」

「散々な初滑りになってしまった」

「怖かったでしょうね、きつと」

一瞬に見た固く目をつむって、口を真一文字にした恵の顔が頭に浮かぶ。

妻がカット絆創膏の台紙を剥がしながら言った。

「もう、滑り台のお山には行きたがらないかもしれませんね」

いつもより少し遅くなった夕食の卓を囲む。両隣に娘を座らせた妻の食事は大忙しである。私はぼんやりと恵の顔を見ている。唇の上に絆創膏を貼ってもらった恵がいつもと変わる様子もなく、黙々とスプーンを口に運んでいる。唇を動かせば傷の痛みがあるはずである。

娘ふたりの食事が落ち着いた頃、私は妻に話しかける。

「家計は苦しいだろうね」

「もう少しは何とかなりそうです」

「早く仕事を探さない」と

「お父さんが、これはと思うお仕事があるといいですね」
私には応える言葉がない。ハローワークからすっかり足

が遠のいている。

「お父さん、相談があるんです」

「あつ、はい」

「本を一冊買ってもいいですか」

「本ですか」

「はい、本です。今日、商店街で買いい物をして、本屋さんに寄ったんです。そうしたら、恵が気に入った絵本があったんです」

「欲しいと言ったのですね」

「いいえ、恵は欲しいとは言いません。欲しいという素振りも見せませんよ。それはいつものこと。でも、私は分かるんですよ、あの子の気持ち」

恵は両親に気遣いをしている。両親と一緒にいるその場面、その場面での雰囲気を感じ取り、自分の対応を操作している、そのような気がする。いや、間違いなくそうしている。妻が萌を抱いて面倒を見ているとき、仰向きに寝かせた萌に手間を掛けているとき、恵は存在を消すかのように息を潜めて座っている。勿論、そうしなさいと仕付けたわけではない。恵が何らかの意図をもって自発的にそうしているのである。何が恵をそのような行動に至らせているのか。恵にその理由を問うことは恐ろしい。操れる単語が少ない幼児の口から出る飾りのない言葉を聞くことは勇気のいることだ。それにしても……。

「お父さん」

「はい」

「買ってあげたいんです、恵の絵本。絵本にしては少し高価なですけど、やりくりしますから」

「わかりました。買ってあげて下さい」

妻と恵が入浴している。先に入浴を済ませた私と萌が居間に残り、恵が生まれた際に、お祝いにいただいた子供サイズの蒲団の上で萌は一人遊びをしている。一緒にいただいたブランケットが半身にかかっているが、どうにも邪魔そう。仰向けになって黄色いキリンのぬいぐるみをもてあそんでいる。時折、まあー、まあー、と声を発するが、おとなしくしている。私はその横に座り萌を見ている。ファンヒーターの燃焼音が低く響く。

この子が生まれたとき、考えるのは未来のことであった。幼稚園入園から成人式、そして社会人、どのような未来がこの子に訪れるのか。どのような華やかな場面を経験するのか。どのような幸福な時間を手に入れるのか。娘たちの未来を思うとき、私たち夫婦は幸いに満たされた。今思うのは今日のこと、明日のこと、さらに明後日のこと、それが精一杯である。幼い子の記憶はどれほどまで残るのである。無精ひげの生えた青白い顔でほんやりと座る父親をこの子は記憶するのであるか。所在なく不確かな表情で自分を見詰めている父親の姿を覚えているのであろうか。

「お父さん、恵ちゃんが出ます」

浴室から妻が呼んだ。

足拭きマットの上で恵の身体の水滴を拭い、パジャマを着せる。

「お父さん、傷に薬を付けてあげてください」

居間のファンヒーターの設定温度を一度上げる。薬箱から外傷用の軟膏を取り出そうとしていると、恵が呟いた。

「おとうさん、おやまからゆきのおやまがみえた」

「お山からお山」

「うん、おやまのうえからおやまがみえた」

ああ、あの時に恵は滑り台の小山の頂で富士山を見ていたのだ、と合点した。軟膏を手にして恵に向き直ると、恵は緊張した顔つきになった。両掌を大腿に付けて真っ直ぐに立つ恵の前に座り、軟膏のチューブから薬を指に取る。

「薬、塗るよ。少し痛いかもしれないね」

すると、恵がはつきりとした声で言った。

「おとうさん、あしたもおやまがみたい」

「えっ」

「まっしろなおやまがみたい」

「お外は寒いよ」

「おとうさんのおんぶはあったかい」

「おんぶでいいのかい」

「うん、おんぶがいい。おんぶでおやまにいく」

恵の傷が堅くなりかけている。薬をのせた人差し指をそ

つと近づける。全身の神経を指先に集中させて、静かにそつと恵の傷に触れた。ゆっくりと塗り伸ばしていく。塗り終えた指を恵の身体の水滴を拭ったバスタオルできれいに拭き取った。そして、蒲団の上に仰向けになっている萌を抱き上げると左腕で抱え、目の前できょんと立ち続けている恵の手を引いて洗面所に歩いた。浴室のドアの前に萌を抱いたまましゃがみ込み、恵を右手で引き寄せる。恵は不思議そうな表情を向ける。恵に笑顔返し、右腕で抱き寄せると、恵は小首をかしげて私を見る。私は、半透明のドアの向こうにいる妻に向かって話しかける。

「お母さん」

「はい」

「明日は朝からハローワークに行ってきます」

「それではおにぎりを用意します」

「ありがとう」

「お父さん、おにぎりは少し大きめに作りますね」

「はい」

居間に戻ると、萌を蒲団の上に横にしてタータンチェックブランケットを丁寧な身体に掛ける。それから私は、ファンヒーターの横に座ってウサギさんの絵本を広げている恵の隣にそつと腰を下ろし、あぐらを組む。恵は手に持った絵本を私に差し出し、顔を上げて言った。

「おとうさん。ごほん、よんで」

私は絵本ごと恵を抱き上げて、組んだ脚の上に乗せる。

絵本を手に取り、恵の前に広げる。最初のページを開き、深呼吸をして気持ちを整えた。漸く頑張り始めたファンヒーターの燃焼音が少しばかり大きい。操作ボタンに手を伸ばし、温度を下げて暫くおとなしくしてもらうことにした。居間はもう十分に暖かい。



炎上の方程式

鈴木健之

「マジかよ」

大澤勝は、スマートフォン画面に釘付けになった。

「家の周りに燃えやすい物を置くと、何度も注意したのに分からない奴だ」

昨日の午前二時にXにポストされた眩きには、一枚の写真が添付されていた。

とある家の駐車スペースに置いてある自転車に、複数枚の折り畳んだダンボールが立て掛けてあり、付近には数十冊の雑誌が無造作に置かれている。そして火の着いたライターを持つ手が写っている。

「この手の輩には、教訓を与えないといけない」

続いて投稿された眩きには、燃えているダンボールの写真が添付されていた。

「間違いない」

確信に至るまで、かなりの時間を要したが、大澤は写真を何度も繰り返し確認し、写っている家が、三日前消防団員として消火活動をした火災現場であることに気付いた。

投稿者のアカウント名は「やすひさ@kfc827」で、アイコンには、祭りの法被の写真が使用されていた。プロフィール欄には「河越大好き人間」と言うシンプルな言葉が綴られているだけで、ネット上では目立ってやろうという下品な自己顕示欲は感じられず、刺激的な投稿を仕掛けるだけ仕掛けて、すぐに全て削除する一種のテロアカウントの可能性もないと思われ、アカウントが開設されて五年以上経過していることから、一過性の盛り上がりを楽しみたいだけの捨てアカウントでないことは明白だった。

「まさか」

大澤は過去のポストを確認した。

「無性にムシヤクシヤする」

直近は二ヶ月前に投稿されたシンプルな短文で、その前の投稿は三年以上前に遡り、祭りや防災訓練等、様々な地域の活動に関する眩きが多く、「河越大好き人間」に相応しい文言が多く含まれていた。

「大月分団長……」

大澤はそう眩くと、自身が所属する河越市消防団第四分団の、千野分団長に電話をした。

河越市では、二ヶ月前から放火と思われる火災が多発していた。手口が似ていることから、同一犯による連続放火の可能性が指摘されており、警察、消防共に、警戒体制を強化していたこともあり、大澤がたまたま発見した時にリポスト僅か八人、フォロワー数たったの二十二人だったアカウントから発信された投稿は、じわじわと拡散され「こいつが河越市の連続放火犯だ」とのリポストがトリガーとなり、溢れ出したように止まらないリポストは炎上状態となり、僅か数時間で九万五千リポストを記録していた。騒動がここまで大きくなると、このアカウントの持ち主は誰なのかという犯人捜しの特定班が動き出す。ネット上の僅かな情報を頼りに、ありとあらゆる多くの人間が「やすひさ@kfc827」の正体を暴くことにエネルギーを注ぎ出す。その迅速性とパワーは、公の捜査機関には到底及ばない巨大なものだった。

実際に火災現場で消火活動をし「やすひさ」という名前に心当たりのある大澤でさえ、特定に時間を要した「やすひさ@kfc827」のアカウントの持ち主を、特定班達は僅か三時間少々の中に、過去の防災訓練に関する写真や眩き、河越市消防団のホームページや、インスタ、フェイスブック等の情報を分析し、河越市消防団第六分団分団長大月泰久であると特定した。更にその数分後には、大月の経営する大月造園のホームページのURLと、社長挨拶の

ページの顔写真が公表された。

こうして「放火犯大月泰久」と人物が特定されると、いよいよ取り締まり系ユーザーと呼ばれる者達が一齐に動き出す。正義感から犯罪者を断罪する者も僅かながらいるが、そのほとんどは視聴回数を増やす為にインパクトのある映像を収めようと過激な行動に出たり、内容はどうでもよく、事実無根の刺激的なタイトルだけで、ネット上を騒がす者達であることは、SNSに明るい人間の間では最早周知の事実であった。

「後は頼んだぞ」

大月は社員達にそう告げると、一人だけ先に仕事現場を後にした。そして、夕方から開催される消防団分団長会議に備えて、軽く腹ごしらえをしようとコンビニに寄り、おにぎりやパンを買い込んだ。レジの店員が自分の顔を直視しているように感じ、妙な違和感を覚えつつ店を出ると、駐車場に停めた自分のトラックを数人の若者がスマホで撮影していることに気付いた。

「何か？」

大月が声を掛けると、若者達は無言で散り散りに去って行った。大月は不思議な気持ちのまま車に乗り込み走り出すと、沿道でスマホを構えている別の若者達がいることに気付き、一体何が起きているのか自問自答しながら車を走らせた。特別珍しくもないトラックだが、ミラーとタイヤ

は純正ではなく、両サイドの扉に描かれている「大月造園」という文字は、木の枝を模したイラスト風で、目立つといえは目立つのは確かだが、写真に撮って映える程のものでもない。大月は確かな答えを見付けることができないまま会社隣接する自宅に着くと、急いでシャワーを浴び、スーツに着替え、自家用車で消防局に向かった。家を出る時に会社の入口付近に人だかりがあったように感じたが、会議の時間が迫っていたため、気に留めることなく先を急いだ。

「お疲れ様です」

会議室に入った瞬間、異様な空気を感じた。いつもなら元氣よく挨拶を返してくれる分団長達は皆無言で、正副団長、事務局の職員達も一様に硬い表情をしていた。大月は、時計を見て遅刻していないことを確認しながら席に着こうとすると、副団長の下村が気色ばんだ顔で近寄って来た。

「大月君ちょっと」

下村に促され会議室を出た大月は、スマホの画面を見せられた。

「これはどういうことだ」

下村のスマホには「放火犯大月泰久」の文言が羅列されていた。そこには、特定班が人物を特定し、取り締まり系ユーチューバー達が独自の論説や映像を流布し、それらを鵜呑みにした誹謗中傷班の発信が留まることなく続く大炎

上が完成していた。下村が、画面を指で擦る度に展開される目を疑いたくなる文言の数々に、大月は頭が真っ白になり、言葉を失った。

「放火がどれだけ重い罪か、分かっているよな？」

「私には、どうしてこんなことになっているのか、さっぱり分かりません」

大月は混乱した頭で、絞り出すように答えた。

「とにかく今日はもう帰れ、処分については、これから会議で検討する」

「処分って私が放火なんてする訳ないじゃないですか」

大月を声を荒げた。

「いいから帰れ」

下村も語気を強めた。

「これだけの大騒ぎだ。警察も動いているだろう。これ以上消防に迷惑を掛けないでくれ」

大月は、下村の鋭い眼光に弁解を諦め、会議室に戻ると頭を下げた。

「ご迷惑をお掛けして申し訳ありません。でも全く身に覚えのないことです」

「もういいから」

大月は下村に促され、静まり返った会議室を後にした。

「分かっています。大丈夫です」

葉々美は気丈にそう言ったが、語尾は涙声になっていた。

消防局を出て、車の中でスマホを確認した大月は、何故こんな事態になっているのかは理解できなかったが、現状をやっと理解し妻に電話をした。菜々美は潔白を信じてくれ、現状に鑑み、暫くの間子供達と実家で暮らすことを了承した。また、大月は従業員達に今後の対応について、出社せず直接現場に向かうこと、社用車に表示されている「大月造園」の看板を別のマグネット看板で隠すこと、仕事のキャンセルや、いわれない誹謗中傷を受けても、冷静に対応すること等を指示した。従業員達は皆潔白を信じている、仕事は任せて下さいと元気に答えた。妻や従業員達の言葉に、絶望的な気分が少しだけ和らいだ大月だったが、この騒動が原因で、仕事が立ち行かなくなった時の不安を禁じ得なかった。仕事のキャンセルが相次ぎ、新規の仕事も入らなかった場合、従業員達に給料を払い続けることができるのは半年が限界だった。こんな騒動の渦中にいる人間に、融資してくれる金融機関もないだろう。大月は、最悪の事態を考えては打ち消し、考えては打ち消しを繰り返しながら、胃の痛みを感じつつ帰路に就いた。

帰宅すると、やはり自宅周辺には多くの人だかりがあったが、敷地内に侵入する者や、車道にはみ出した者等はおらず、思いの外整然としていた。大月は車から降りると、直ぐにその理由を理解した。

「河越警察の者です」

警察手帳を提示する二人の私服警官、人だかりが整然と

していたのは、彼らに制されていることであるのは明白であった。ネット上での噂に過ぎない段階のため、連行されることはなく、話を聞きたいとのことで大月は了承し、二人を自宅に招き入れた。その後、任意の事情聴取は二時間以上に及んだ。

「まずは早急に自主退団の手続きを行うべきかと思います」

大月が会議室を出て行った後、下村は第一声を発した。
「ちょっと待ってください」

直ぐに反応したのは千野だった。

「私は大月とは二十年以上一緒に消防団活動をして来ましたが、絶対に放火なんてする男ではありません。いずれ真実ははっきりする筈です。はっきりする前に処分の話をするのはどうかと思います」

「はつきりしてからじゃ遅いんだよ。万一の時、元消防団員と現役の分団長では、団が受けるダメージが全然違うんだよ」

下村は語気を強めた。

「それは大月君が本当に放火犯だった場合だよな」

黙って聞いていた団長の塩野が間に入った。

「私も大月君とは長い付き合いだけど、ネット上に発信されていることは何かの間違いだと思う」

「しかし団長、こういうことは早目早目に対応した方がよ

ろしいかと思ひます」

「いや、私は大月君を信じたい。長年真面目に消防団活動をして来た人間を、いわれのない理由で処分する訳にはいかない」

「では今回の件、どう対応するつもりですか？」

塩野の力強い言葉に下村はトーンの下がつた声で聞いた。「今回の件、必ず警察が大月君の潔白を証明してくれるとは思ふが、我々にもできることは沢山あると思う。それこそ早目早目の対応が必要だ。忘れた頃に無実が証明されても、大月君にも我々にも大きなダメージが残る。これは本来の団の活動とは趣旨が違うが、あえて団長令として、この問題の早期の解決を指示させてもらうが、その方法について皆の意見を聞きたい」

「私の分団には、IT企業に勤めている団員がいます。他の分団にもネット関係に明るい団員は多数いると思いますので、その連中を集めて、まずは大月分団長が疑われる原因となった投稿の、本当の発信者を特定する方策を検討することから始めるべきかと思ひます」

第一分団の大河内分団長の発言を皮切りに、様々な意見交換が活発に行われ、その後河越市消防団史上最も熱くて長い分団長会議は深夜にまで及んだ。

大月は、涙腺が緩み続けるのを必死に抑えた。

大炎上の翌日、やはり仕事のキャンセルが相次いだ。旧

知の取引先も、大月造園に仕事を依頼していることで、誹謗中傷の矛先が自分のところに向かつて来てしまつては決断するしかなかった。受注している公共事業は直ちにキャンセルとはならなかったが、担当者からは状況により契約停止の可能性もあると、内々に連絡が入つていた。しかし、大月の涙腺を緩める原因となつたのは、仕事のキャンセルではなく、その数を大きく上回る仕事の依頼が殺到したことだった。発注者は皆消防団関係者で、大月の窮地を少しでも救えればと、現役団員、OB、河越市のみならず、河越の団員から声を掛けられた隣接する坂田市や鶴ヶ丘市、狭川市の団員達からも仕事の依頼が次々に入つた。仲間達の温かい気遣いに、利益を求めることはできないが、すくなくとも従業員達の給料は何とか暫くは賄えると大月は安堵すると共に、感謝の涙を何度も拭いながら、仕事の段取りを組んだ。後は一日も早く潔白が証明されることを待つのみだが、大月には残念ながら事件発生時の明確なアリバイがなかった。毎週月曜と木曜の夜、ジョギングを日課としていたが、事件はその月曜と木曜の夜発生していた。火災現場に直ちに出勤できないことが続いたため、火曜と金曜に日程を変更したところ、今度は金曜夜に発生した。前夜の事情聴取では、全ての事件発生時にアリバイがないことに、警察担当者は明らかに怪訝な態度を示していた。一縷の望みは、消防団員達が潔白を証明すべくチームを作つて取り組んでくれていると連絡を受けたことだった。無言

の会議室を後にした時、もう消防団に自分の居場所はなく
なったと絶望的な気持ちになったが、仲間は変わらず仲間
だった。大月は強い絆の存在に安堵しながらも、その絆を
信じ切れていなかった自分を恥じた。

I T関連や通信関係の会社に勤めている団員、ホームペ
ージ作成やゲーム制作の会社を営んでいる団員等、ネッ
トに明るい団員を中心に作られたチームは、何故大月のア
カウントから問題の投稿が発信されたのか、原因の究明に
当たった。大月のスマホは警察に押収されてしまっていた
が、大月が関知していない投稿がされた二ヶ月前は、各分
団の車庫に、災害時に容易に情報が得られるよう、Wi F
iが設置されたのとはほぼ同時期だったため、Wi F iを通
して分団のP C内の個人情報を盗まれ、アカウントを乗っ
取られたのではとの結論に達し、分団のP Cを分析した結
果、その痕跡を確認するに至った。

分団車庫のWi F iから分団のP Cに侵入したのであれ
ば、分団車庫付近で通信機器を使用しなければならぬ。
郵便局や宅配、新聞配達や酒屋、八百屋等、日頃街中を配
送業務で頻繁に走り回る仕事をしている団員を中心に作ら
れたチームは、分団車庫付近で機器を使用していた不審者
情報の収集に当たった。その結果不審者の存在を確認する
に至った。その不審者は、大月に恨みを持つ人物の搜索に
当たっていた第六分団の団員達が特定した人物と合致した

ため、塩野団長を中心とする指揮チームは、物的証拠等は
無いものの、独自に犯人と断定することとした。

犯人が断定できた後は、放火のあった日の目撃情報、現
場付近の防犯カメラ映像の確認等、河越市消防団総動員で
行うこととなった。警察も当然同じ捜査をするはずではあ
るが、捜査員の数には限りがある。路地や抜け道、防犯カ
メラの設置場所等、地元の細かい情報を熟知し、多くの人
脈を持つ消防団員が二百名以上の体制で行うとなれば、そ
のポテンシャルは比べるまでもない。また、数時間で対象
者を特定するネット上の特定班にスピードでは及ばないが、
不確かな情報やデマではなく、顔の見える人脈を駆使し、
確かな情報を積み重ねて行くアナログなこの手法の方が、
真実に近づくスピードは間違いなく早かった。

結果、犯人が分団のP Cに侵入し、大月のアカウントを
乗っ取った痕跡、分団P C侵入時に、分団車庫付近で通信
機器を操作していると見られるドライブレコーダー映像、
火災発生時に犯行現場付近にいたことが分かる防犯カメラ
映像、そして火災発生時に大月が別の場所にいたことを証
明できるドライブレコーダー映像、それらの証拠を僅か五
日間で集めることができた。塩野団長は、それらの証拠を
まとめたものを消防局を通して警察に提出した。

犯人は山下稔四十一歳。

消防団では年に一度住宅用火災警報器の設置状況の調査

と、設置推進の啓蒙活動、そして防火診断と称した火災予防運動を行っていたが、二年前山下宅を訪れた団員が、家の周りに散乱する大量のゴミを見て、放火されるリスクがあると注意したところ逆切れされ、大騒ぎになったことがあった。翌年からトラブルにならないよう、山下宅付近を回るのは控えたが、消防団員を見ると不審者として一〇番通報したり、消防団車両の前をわざと自転車で蛇行走行したりと、いやがらせが続いたため、大月が分団を代表し話をしに行き、トラブルは起こらなくなった。しかし、プライドを傷つけられたと感じた山下の逆恨みの炎は収まることはなく、注意を受けた放火で大月と消防団をおとしめようと、今回の騒動を引き起こしたとのことだった。

消防団から提出された証拠を元に、警察が家宅捜索を行ったところ、その事実が直ちに確認され、山下は大月や消防団に対する身勝手な恨みつらみをまくし立てつつも、あっさりと罪を認めた。

連続放火犯逮捕の報道が直ちになされ、犯行動機の発表を切っ掛けに、ネット上では大月が犯人とされ大炎上していたことを知らなかったネット住民達も加わり、大月を犯人と決めつけた誹謗中傷班への誹謗中傷が相次ぎ、新たな大炎上が生まれていた。大月を誹謗中傷していた者の中には、謝罪を咄く者もいたが、大多数はリアクションなく、集中して攻撃を受けた者はアカウントを停止し、沈黙を貫

いた。中には性懲りもなく、更に刺激的なタイトルで動画をUPし続ける者もいた。

また、犯人逮捕に消防団員が関わったことで、消防団が警察の真似事をする問題点を指摘するネガティブな意見も多数出たが、それを大きく上回る消防団員達を称賛するコメントが、消防団に向けられそうになった誹謗中傷のスパイラルをあっという間にかき消した。実際の火災と同じで、大炎上を防ぐには初期消火が重要である。この初期消火には、全国に約八十万人もいる消防団員が少なからず関与していることは容易に想像ができた。

激動の一週間を過ぎた大月には、日常が帰って来た。今回のことで、ネット上での情報拡散の恐ろしさを痛感したが、消防団に地域に根差した多種多様な人間がいることでの情報収集力、機動力の大きさも痛感した。そして、多くの被災地で、ネット上のデマ情報の拡散で二次被害が発生した事案があったことを、よりリアルに理解するに至り、その対策の必要性を塩野に提案した。塩野は対策チームのリーダーに大月を指名した。今回の事件は、大規模災害発生時のネット上での情報管理について、河越市消防団として正式に取り組む大きな契機となった。

消防防火活動は、現実世界だけではなく、ネット上でも必要不可欠な時代になった。

夢喪の語り YUMEMONO-GATARI

平井 哲

〈第一の瞳〉

私は、一体どんな人だろう。何歳でどこに住んでいるのだとかいう事実的なことではなく、自分っていうのは一体全体どのような物で事なのか。なんとなくでも、一度は考えた事はないだろうか。

やってみれば分かる。自分の自分に対する偏見を全てとすれば、自分像は意外と直ぐに見付かるかもしれない。

けれども、そこに別の意見、例えば他の人からの意見も含めてみると、どうなるだろう。自分が考えたイメージと同じような評価を受ける人もいるかもしれない。でも私は、自分の思っていた私と、周りの人からの印象は違った。

なかなか見えにくいものだ。自分自身の評価に親の評価、学校からの評価にクラスメイトの評価等々。正確な答えを体系的に近づけようとすればするほど複雑にこんがらがってくるようで、ああもうって気分になる。

そんな問題は、グダグダと考えていても、上手く思いつくものじゃないね。風呂上がりに涼風にあたって火照りを冷ましている時にでもフツと降りてくるのだろう。エウレ

カと、彼のアルキメデスみたいにな!

高校生になってもう一年と四カ月ちよつとなる。その間に月が十七回も灯って消えてを繰り返したのかと思うと、なんだか面白い。

そろそろ十八回目の満月を迎える。満月の夜、月光に照らされて獣人にでもならないだろうか。生まれてこの方、変身なんてしたためしはないけれど。

もうすぐ、夏祭りがある。時期は、ちょうど望月の夜。

土手沿いを歩いていると、公園で出し物の準備か、真新しい割には少しカビ臭いテントや屋台のトラックが所狭しと立ち並んでいた。いつもは閑静な公園を盛り上げようとしている姿は、おめかしをして恥ずかしがっている幼児のようで、ちよつとこそばゆいように感じられた。

祭りの雰囲気というのは不思議なもので、眺めているだけで気持ち少し浮かれてくる。蒸した熱風を思いっきり浴びたいと思えるほどの活力が湧いてくるのを感じる。

まあ実際にはすぐにバテてしまいうだろうけれども。

田舎ながらに、いや田舎だからこそなのかもしれないが、花火大会が祭りの目玉だ。高密度な光の弾幕が一番の売りらしい。それが意外とかなりの人気があり、遠い県外からも足繁く通いに来るコアなファンがいるほどだ。かくいう私も、あの押されるような迫力を前に、火花の芸術に魅了された一人だ。またもう一度見たい、と思う気持ちも分かる。何度も見るのは、初めてを超える衝撃を求めている気

持ちの表れだろう。ある意味で、未知の体験への希望が生まれているのかもしれない。

私が初めて見たのはいつだったろうか。思い出せない。「ピュコッ」と気の抜ける音とともに、一件のメールが届いた。

珍しく通知マークの付いた部活のアイコンを目を細めながらタップした。その吹き出しは、天文部のグループチャットから出ていた。『素敵な会』と銘打たれた一見怪しいその内容は、要約すると「夏祭りの夜、校舎の屋上から花火を眺めながら夏を締めませんか？」というようなものであった。誰が考案したかは知らないが、粋な計らいだ。

一日くらい勉強せずに呆けてみるのもちょうどいい息抜きになるだろう。まだそこまで切り詰めているわけではないけれども。兎にも角にも、この日は塾を早めに上がることにしよう。ちょっとした先のご褒美だ……。

そして少し経ち今日こそ件のxデーだ。七時半前に学校に着けばいいと思っていたのだが、早めに着いてしまった。無意識に早歩きになっていたのかもしれない。

校門に着いてぐるっと一回り校舎を眺める。案の定というか、明かりのない校舎はおどろおどろしい様相を呈していた。だが私にとっては、見慣れない景色が一周回って面白くも感じた。恐怖感とは裏腹に、怖いもの見たさというのか、ラディカルな情緒に近いものがあつた。

意識を変えようと思い、軽めのポップを口ずさみながら

校舎の扉を開ける。少し先に見える階段には白色灯の灯りが点いていた。そこまで行けばまず一安心かな。

さつさと上まで行つてしまおうと歩を進めた。

階段を早足に駆け上がり、上がった息を抑えながら屋上の戸を押し開ける。見ると意外と多くの人が来ていた。皆思い思いに過ごしていて、スマホに前のめりになっている人もいれば、三脚を立てて何やらセッティングをしている人もいた。暗い中でライトを灯して佇む生徒たちの姿は、塑像のようだった。

天上では、薄気味の悪い白色の鈍重そうな雲が、如何にも気味の悪い活力を振り絞つてうごめいていた。

しかし暇だ。花火が打ち上がるまで二、三十分程もある。夜目が利いてはきたが、本を読める程の明るさでもない。折角なので、夜の校内を冒険がてらぶらついてこようと決めた。何事も、経験は積んでおくに損はない。しかもこんな機会は一生に一度あるかどうかのものだろう。

不思議と怖さは感じない。

それとなくぶらぶらと校内を徘徊した後に、ある場所にたどりに着いた。

遠慮気味に裝飾された少しばかり霞んだ洋風のドアを開くと、湿気った風に身体を包みこまれた。太陽が発した熱が、部屋中いっぱいに満ちて溜まっていたのだろう。

ふと長椅子に腰掛ける。息をつくのも束の間、ガコッと大きな音を立て、驚張りのような音を立てて扉が開いた。

いや、誰かによって開けられた。

目で追ってみると、その音の主は、天文部の副部長だった。いささかの威厳というものもなく口下手そうで、おとなしいような印象の人だ。では自分は人のことを言えるほど社交的なのかと言われると、黙らざるを得ないけれど。

こんな場所に来るなんて、奇遇過ぎる。まあ別に良いのだけれども。

ふうっと息を吐き落とし、周りを見渡してみた。本当に何気のない、暇つぶしにすらならないほどの動作で。

灯りと呼べるような灯りはここには無い。だが、一度夜目が利いてしまえば、窓越しに漏れる月明かりがまたとなほと鮮明に感じ取れる。

月の光は、太陽に比べてあまりに儂く弱々しかった。だが、普段目に見えない存在を顕した。桜の葉に型抜かれた月光が、臍げな輪郭の陰影を土に広げていた。何か特別な秘匿的な美しさの片鱗をふっと垣間見ることができた気がした。

窓のガラスがカタコトと笑うように揺れた。空気の塊が横つ面めがけて吹き込んできた。それこそ何気ない数えきれないほど無限に湧き起こる自然の現象の一部として流れ過ぎる事柄のはずであった。だが、押し付けられた印象には、確かに何か普通ではないという予感を感じさせる生暖かさが含まれていた。

私の感覚が異常なほどに過敏になっていたのだろうか。

生ぬるい汗が熱を奪い、気化しているのがよく分かる。謂れのない不穏な癖に抽象的な妄想が、水蒸気とともに襟元からもがくようにして這い上がってきた。

そんな予感を遮るかのように、キラリとした輝きがぐにやりぐにやりと尾を引きながら飛び出た。刹那、微細な粒子が放射状に咲き、その軌跡を一瞬の弧光として残した。遅れた爆発の響きが足元を震わす。それに共鳴するように、身体も震えた気がした。波が止まらずに続いているように。加速して、走っているみたいだ。

ああ、興奮さえ覚える。意識とも無意識とも言えずに瞳孔が広がり、口角が斜め横に広がり目尻に肉が溜まる。
(なにかおこりそうだなあ)

《第二の眼》

澄川 瞳は、物静かな印象の少女だった。凛とした容姿であり、少し伸びた前髪からたまに覗かせる瞳は、透き通ったクオーツのようだった。だがその割には浮いた話を聞くこともなく、学内でも特段名を聞くような人ではなかった。それも、彼女がこの空の下に居た頃の話だが。

高校二年生のちょうど夏の盛りが過ぎた頃だ。その日、町で比較的大規模な花火大会の催しがあった。天文部に所属していた僕は、数人のクラスメイトや天文部の学友達と校舎の屋上から花火を眺める計画を立てていた。件の彼女

も天文部の部員であり、その集まりにきていた。部活のグループチャットに「素敵な会」と題して送ったメールを見たのだろう。我ながら痛い名付けだとは思うが。屋上の使用許可は、既に顧問の先生から取り付け済みである。来年の今頃は受験シーズンの真っ最中だ。おちおち休日を謳歌することはできなくなるだろう。なので実質的にこの夏が高校生、もとい少年として最後の余暇となる。一般的に、二十代までの期間だけで人生の体感時間の半分以上が終わってしまふという。二度と訪れることのない上半期の最後だ。多少利那的になるのも自然だろう……。

当日は夜風が強く、多少肌寒かった。ぼつぼつと人が集まり始め、しばし談笑に耽りながら地上生まれの小さな天体が打ち上がるのを待った。

思えば、僕は彼女と深く関わり合うようなことはなかった。別段反りが合わないということではないのだろうが、話したことの内容の多くは事務的な事で交流とは呼べない程度だったということである。彼女はよく読書をしていて、その凜とした雰囲気は無作法に立ち入って崩してしまうことを恐れて、話しかけたことはなかった。

僕が臆病な意気地なしであっただけなのであろうが。

彼女がどこか下へ降りていくのが目に入った。もうすぐ花火が始まるのにどうしたのだろうと思ひ、彼女の後を歩いて行ってみることにした。彼女の事は良く知らない。だからこそちょっと知ってみたいという興味があつた。

この学校には、聖堂のような場所がある。そこは窓一面が色鮮やかなステンドグラスで装飾されており、日の射す頃にはガラスの一つ一つが色とりどりに煌めくという。その風景は、さも幻想的な景色だと聞いたことがある。もしやそこから花火を見るつもりなのか？ と確信はないながらもふと思つた。

すると彼女は本当に聖堂へと向かった。聖堂はかなり広く設計されているのが良く分かった。ほんのりと月明りに照らされていて、なんとも厳かな雰囲気を感じていた。そこからは一種の畏怖のような感情が生じ、膀胱が縮むようだった。

礼拝に使う長椅子に彼女の姿があつた。なかなか年季の入った椅子だ。浅黒い木目の散らばりが渦のようだ。

今更だがストーカーまがいの行為をしてここにいる自分のこの状況は明らかに不自然で、なんとも言えない心境と状況になった。少し楽になろうと思つて、僕も近くの椅子に腰を下ろす。花火が打ち上がるまでの間、何度か彼女に話しかけようとも思つたが、とつさに上手い言い訳を言える自信がなく、結局しなかった。

聖堂の構内は互いの心音が聞こえてしまうほど音のない静寂に包まれ、長針がゆったりと時間を進めていた。

一発目の花火が上がった。僅かに数秒の差があつた後に、空気を震わせる衝撃と轟音が鳴り響き、窓のガラスをカタカタと震わせた。

二、三発、空へと暗闇を火球が吹き抜けていく。その中で、花火の振動とは別の妙な響きが重なっていた。だが当時の僕にとっては、それは些細なことだった。ガラス越しの着色された光に映し照らされた彼女の横顔は、彼女の清廉な容姿とも相まって美しく、彼女に見惚れていた。

そして、惨劇がその胎動を始めた。

明らかに花火による振動ではないと分かる、異質な揺れが地表を碎いた。そして揺れは、すぐに椅子に掴まらないと立てないほどの激しさへと変貌した。いや、地面そのものがポロポロと崩れかけているようだ。僕は足を取られ倒れ込んでしまったが、奇妙なことに彼女はこの揺れが来るのを分かっていたかのようにステンドグラスの窓の前に呆然と立ち尽くしていた。

ガラスの近くは危険だということは分かっているはずなのに、彼女はそこから離れるような素振りを見せない。焦りを感じていないかのような表情でそっと佇んでいた。建物から異音も聞こえ始めている。一時も早く彼女を連れてここから立ち去りたい。だが、揺れは収まるどころか激しくなってきた。いや違う、地面自体が崩れてきているのだ。突然の貫くような破砕音とともにステンドグラスが建物の圧によって粉塵交じりに砕けちった。それに続き、連鎖的な甲高い音と細かな光の粒子が飛散し、僕の鼓膜と網膜を鋭く刺激した。

そして、ある特異な事実が気付く。それは僕の意識を

瞬時に捕らえた。僅かな瞬間さえ永く感じた。極めて緊張した状況下で、目の前の事実を逸早く理解しようとしたことにより、一種のタキサイキア現象が僕の中で起こったのだろう。

凄まじい圧力によって碎けたステンドグラスの条痕が、妙に幾何学的な様を呈していたのがよく見えた。その純白の軌跡が描き出だした彫像は、とても偶然現れたとは到底思うことができない運命的のしか言えないような様だった。彼女を中心として、十字架とも翼とも見える形状に割れていた。そして、彼女は何かを受け入れているかのように立っていた。美しくも見えるその異様で奇跡的な惨状を理解することもできずに、ただただ呆気に取られ半ば呆然としていた。そして刹那、最後の支柱が崩壊し、彼女と共に景色が視界から潰えた。けれど、彼女の表情は僕の脳裏に最後の一瞬まで焼き付いていた。

施設の深刻な老朽化。そこに大規模な内陸型地震が相まって起こった悲惨な地盤崩落事故、と世間に報じられたようだ。地震自体の震度も大きかったものの、若い命一つが人災によって失われた遺憾な事件として一時は大きく取り上げられたようだ。道に手向けられた献花の花弁が風に震えていた。

ただあくまでメディアの第一の興味は「飽くまで」だったのだろう。話題性の続かない情報は次第に埃を被っていき失われていってしまうのだろう。そう思った。

だが僕にとつて、そう簡単に関心が無くなることではなかった。メディアは、傍観者以上へとはなりはしないだろうが、僕は出来事の渦中に居るのだから。

不幸中の幸いと言うべきか、ひどく目立つ怪我はなかった。だが一応精密検査を要すると言われ、一時的に入院することとなった。

今も身体的には特別の異状はない。ほんの少しばかり動きが鈍いと感じる時がある程度であった。だが、人が眼前で潰えた瞬間の恨めしいほどに精巧に刻まれた写真的で写実的な記憶は、思考の強制的な拒絶の障壁となった。自分の内側でその片鱗をちらりと感じるようで意識の効かないような箇所から汗が湧き出し、院内着の襟袖を滲ませた。

廊下を過ぎる人達の扉越しの曇った話し声の内容にさえ敏感に反応してしまう時があった。誰が自分について話しているのだ。まるで根拠もない、以前ならば気にもしないようなことに對してもセンチティブに感じるようだった。されどミオクロオス的な緊張は暫くの間、静場に溶けずに溜まっていった泥の塊のように悶々と存在し続け、露に四肢を包まれているようで幾分悩まされた。

それから淡々と数日が過ぎ、退院日となった。退院と聞くことが大きくも思える響きに聞こえた。十八時を回り、室内と外との光のバランスが昼夜の境を過ぎた頃、普段の見慣れたようだが目新しくも感じる車が迎えに来てくれたようだ。その景色はいやに客観的で、他人が経験した景色

を通して見ているようで、下脛に薄い温かみを感じた。

病院の方々に軽く挨拶と数日間の感謝を伝え、その場を後にした。定型文のようで面白みには今一欠けた言葉になつてしまったかもしれないが、思いの外につらつらと言葉が流れ出た気がした。人との交流というのは案外感覚なのだろうか。

車窓から望む夕雲には、デジャブに近い感覚を抱かせられた。どこかの回廊でふと目に留まった風景画と、久方ぶりに巡り合ったかのような既視感だった。

見事な細密画は、時に実際の光景や景色に逆にデジャブを与える事があるのだと思った。絵や画像、動画などの感覚的印象物は、模造ながらに確かに本物らしい真実味を秘めていて、その本物さが感性、記憶にどう残るかという干渉性の有無は、発見的な美しさにおいての価値だろう。

こういう意味においてならば、あの惨憺たる壊落の様態も、受容の可能性を孕むかもしれない。

思えば、混乱の直後の印象には美しさもあった。あの場で居付いてしまったのは、それに圧倒されたためでないとは言いい切れない。

ただそれは猫の瞳のような愛らしいような美観ではなく、虐殺の中に発現したストックホルム症候群の信仰心と忠誠を見ているようなものだった。

現実と解離したような事象の記憶。そんな現実と想像の狭間に落ちているような感覚に毛筋が浮き、滲む汗が温度

を奪い去った。充血したように熱を帯びた瞳は、その景色の輪郭を徐々に薄めていった。

《第三の目》

彼には何が見えているのだろうか。事故後から経過を観察しているが、彼の他者からの関わりに関心のない様子は変わっていない。その慢性的な状態は、事故以前の状態への回帰の目処は未だ見えることはなさそうだという目前の事実それのみを私に与えた。

彼との会話は、人との対話というより彼一人による言葉紡ぎの時間という方が正確に思えた。目線はふらつき、多動気味な様子で言葉を出しては自分で改正したり、思案したりするのみであった。会話というのはただ思いついた個々の言葉を飲み込んでいくというだけの動作であると見なしているかのように、自分の感性のみに言葉を当てて反応を楽しんでいた。

彼は、状況の錯誤と混濁がある話を繰り返した。初めは何のことを話しているのか理解が及ばなかったが、注意深く聞くうちに、時系列の前後があるが、実際の状況に似た場面が見て取れる事柄が見られた。彼は自分の状況の追体験を試みていたのであったのだろう。

話の節目を繋げてみると、まるで現実味を感じない夢で見たような物語を言葉に並べたようだった。

彼の遭った事故は、最も耐え難く無惨なものであったら

うが、彼の言うほど劇的な情緒的な想起とはどこか一部異なったものだと感じていた。ああ僕には君が何を感じようとしているのか解る。きつと混乱に侵され無秩序的だった君の外殻は、粘土の中でもがく蚯蚓のように蠢いていたのだろう。そして理性が錯乱を極めた時、意思の触れられない無意識的な心理で、重力の作用のように自己の認識を歪曲し忘却で満たしたような被膜を張ったのだろう。

彼はどうその理性と付き合って行くのだろうか。いつかは内側から殻を切り開き、満ちた忘却液の蒸発にあてられ、事実の冷徹さに打ちひしがれるのだろうか。それとも以前の自己と精神的に絶縁し、上塗りの認識に自己を見出すかもしれない。どちらもあり得る事だが、どちらになつていくのか、その中間を彷徨い生きていくのか、僕にはこれ以上知る由はない。



小説の編集を終えて

残念なことに小説部門への投稿が年々減り続けている。今回はとうとう五編になってしまった。趣味で小説を書いている人は多くはないだろうから投稿者が少ないのは仕方ないことだ。だが、書いてみたいと思っている人は案外いるのかもしれない。今はやってみたいことは、何歳からでも始め易い時代である。『文芸川越』はそういう人に門戸を開いているので、ぜひ活用していただきたい。

この文芸誌は市内の図書館や公民館など身近な場所に置いてある。書く人も読む人も文学に親しんでほしいという願いの元に毎年発行している。できるだけ多くの作品を掲載するというのが『文芸川越』の基本方針だ。ただし、募集要項や原稿用紙の使い方などの決まりから外れると掲載することが難しくなってしまう。そして中身については小説というジャンルに当てはまるものを投稿してほしい。最近の小説として成立しない作品が増えている気がする。読者に思いが伝わり、最後まで興味を持って読んでもらえるような作品が次回は増えることを期待している。

今回五編全てを掲載することにしたが、それぞれの投稿者に考えていただきたい点がある。

以下に作品評を書かせていただく。

○「夢」 夢の世界を描くというのでもいいと思うが、最後に実は夢の話なのですよ、と書くだけでなく文中にそれを

予感させるような伏線が必要であろう。そして夢というのはたいがい脈絡のないもの。どうしてそういう夢を見たのかという部分を伝えないと小説にならない。林幹彦という名前が何度も出てくるあたり、読み辛い。書き終えたら音読してみると文章の欠点に気付くはずだ。

○「風」 情景描写が延々と並べられていて単調である。意味不明な箇所や時間の推移などに矛盾するところがあり、気になった。ジャンルが小説なのか、疑問が残った。

○「絵本」 家族の日常を綴った小説である。文章が平易で読み易く、幼い子供の会話は平仮名書きにするなどの工夫も見られる。職を失った自信のない主人公が家族と接する中で前向きに生きようという気持ちになる様が描かれていて、読後感がいい。

○「炎上の方程式」 現代社会の問題の一つを浮き彫りにしたシナリオのような作品である。主人公がどういう人物なのかが見えるように書く作品に厚みが増すと思う。

○「夢喪の語り YUMEMONO-GATARI」 言葉に関心の強い作者なのであろうと思いつながら読んだ。ただし言葉の意味をきちんと理解して使わないと読むものを混乱させてしまう。言葉の使い方の間違いについては直せるものは訂正させていただいた。楽しんで書くことは大事なことが、読み手に意味が伝わらないと始まらない。身近な人に読んでもらい率直な感想を聞くというのではないだろうか。

(木ノ原・河合・村上)

市内文芸団体一覧

部門	団 体 名	会員数	氏 名
短歌	蘆笛短歌会	1 6	曾根田 恵美子
	はつかり短歌教室	2 0	井 尾 洋 海
俳句	霞ヶ関俳句研究会	1 0	益 子 聰
	古谷俳句会	1 1	佐 藤 俊 春
	霞俳句同好会	9	益 子 聰
川柳	初雁川柳会	1 3	矢 澤 俊 美
	六星川柳会	1 1	平 柳 一 帆
	オアシス川柳同好会	1 0	島 田 精 一
	中央かがやき学園川柳クラブ	1 2	三田地 輝 憶
詩	プリズムの会	1 1	天 野 英
随詩筆・	バクの会	5	遠 山 昭 雄
その他	かすみ古典文学サークル	2 2	小 峰 貞 一
	川越ペンクラブ	2 0 6	小坂部 恵 子

文芸川越 第46号 資料

◎ 投稿数

部 門	投稿者数 (前年比)	投稿作品数 (前年比)	掲載作品数 (前年比)
詩	17人 (－ 1)	17編 (－ 1)	17編 (－ 1)
短 歌	43人 (－ 4)	86首 (－ 8)	86首 (－ 8)
随 筆	21人 (－ 3)	21編 (－ 3)	21編 (－ 4)
俳 句	59人 (－10)	295句 (－50)	295句 (－50)
川 柳	24人 (－ 7)	120句 (－35)	120句 (－35)
小 説	5人 (－ 5)	5編 (－ 5)	5編 (－ 3)
計	169人 (－24)	544点 (－96)	544点 (－93)
カット	6人 (－ 1)	19点 (－ 1)	13点 (－ 4)

◎ 年齢層

15～19歳	14人	8.28%	60～69歳	12人	7.10%
20～29歳	0	0.00%	70～79歳	56人	33.14%
30～39歳	2人	1.18%	80～89歳	64人	37.87%
40～49歳	0	0.00%	90～99歳	10人	5.92%
50～59歳	10人	5.92%	100歳～	1人	0.59%

計 169人
 最年長 100歳 最年少 15歳

《文芸川越（第四十六号）作品掲載者名簿（掲載順・数字は掲載ページ）》

●詩

志村奏	小野浩	大和友子	伊藤彰一	ウツドマン	大嶋一恵	中山正夫	中島貴	中島久美	関根涼真	アラン片山	あいだ澄	青柳謹一	曲山茂	平井正一	中島幸男	竹内京子
6	8	10	12	14	16	18	20	22	24	26	28	30	32	34	36	38

●短歌

安住信子	荒川恵子	荒木秀子	飯野喜代子	石澤昌子	伊藤富三	岩澤邦雄	遠藤洋	大澤洋子	大島秀子	小高常代	金子美美子	叶玲子	唐沢順子	栗原セイ子	黒木萌那	黒須恵	黒田紗矢
42	42	42	42	42	42	43	43	43	43	43	43	44	44	44	44	44	44

小出い子	古牧ゆき	小峯綾子	齊藤栞	齊藤隆子	齊藤洋子	酒井真結子	佐々木美千代	里村広美	重田美保	関口和奏	曾根田恵美子	高見沢登美子	土居かえな	104hero	長澤八千代	中島哲朗	中添三代子	永塚真歩	野原喜代子
45	45	45	45	45	45	46	46	46	46	46	46	47	47	47	47	47	47	48	48

●随筆

程塚文三	町田あや子	宮崎朝子	山田厚子	山田泰子	恵比根蘭	はっとりかな	大竹千穂	校條清	橋本美恵子	佐藤智子	豊田知枝子	佐藤正子	粕谷泰雄	スマイリーのぶ	渡邊明	小畔川霞
48	48	48	48	49	52	54	57	59	60	61	64	66	68	71	72	74

葛城	勝田	勝田	小倉	小川	岡本	大矢	大河内	内田	池田	新井	●俳句	村上	井原	山口	菅沼	鈴木	竹宮	山下	河辺	加藤
ゆうこ	雅夫	仁恵	佐紀	房子	好央	真紀子	喜久子	清子	隆生	咲那		トシ子	正人	英次	眞二	高雄	吉保	克吉		伸次
99	99	99	99	99	98	98	98	98	98	98		93	91	89	86	84	81	79	77	75

露崎	對崎	田中	瀧沢	高野	高瀬	高木	鈴木	鈴木	清水	清水	塩野	佐野	佐藤	坂根	齊藤	小林	小林	小林	神山	木内	金子	加藤
榮三	フミ	信子	潤子	英次	チエ子	茉莉	海南	敏雄	久枝	次男	薫功	俊春	陽子	博二	幸二	ケイ子	勝子	貴美代	勝代	隆司	幾美	
103	103	103	103	102	102	102	102	102	102	101	101	101	101	101	101	100	100	100	100	100	100	99

吉野	横山	横沢	山本	山野	矢島	村田	三浦	丸山	松本	舛田	益子	細野	星野	深見	平田	長谷部	野村	忽滑谷	新村	並木	中村	中島
一男	功和	子	直子	さくら	祥子	由紀子	知栄子	靖子	みち子	智哉	さとし	榮美子	直子	眞貴子	記美代	澄香	桂子	春雪	洋子	伸雄	和子	光江
107	107	107	106	106	106	106	106	106	105	105	105	105	105	105	104	104	104	104	104	104	103	103

野本	中村	中村	戸住	時枝	寺本	田中	関水	清水	島田	島田	金剛	栗原	榎本	指宿	伊藤	新井	新井	●川柳				
史雄	久雄	紀夫	澄枝	利幸	甚太	耕平	徳二	元氣	精一	繁夫	とみ	正歩	スミ子	恒子	南美	紀男	しま子			渡邊	米須	
114	114	113	113	113	113	112	112	112	112	111	111	111	111	110	110	110	110			107	107	

●
小説

平 鈴 加 浮 青
井 木 山 橋 木
健 透 洋
哲 之 聡 徹 平

141 134 127 122 118

渡 我 三 本 細 平
辺 妻 田 間 田 柳
健 信 輝 四 良 一
男 子 憶 郎 雄 帆

115 115 115 115 114 114

編集後記

「文芸川越」第四十六号が出来上がりました。昭和五十六年三月に創刊号が発行され、創刊以来一回も休むことなく発行を続けてこられたのは、市当局はもとより市民各位の熱心なご支持の賜物に他なりません。

川越市が「文芸川越」を発行する目的は、個々の市民の創作作品の発表の場を設けること、そして、さまざまなジャンルの作品を、老若男女、幅広い年代の市民から求め、文芸によって市民相互の文化交流、活性化を図ることにあります。

さて、今回の「文芸川越」の投稿者は百六十九人、全作品数は五百四十四点でした。前回四十五号が五年ごとになってくる「川越文芸賞」選出の年で増加があったことを考慮に入れたとしても、今回、投稿者が減り、作品数も減ったことは気になることです。

日本は、二〇二五年を境に団塊世代が七十五歳以上になり、二〇四〇年には団塊ジュニア世代が六十五歳以上になる、高齢化率の大幅な上昇の時代にあると言われていますが、個々の市民が互いに刺激を与え、また刺激を与えられ、競い、良い作品制作への意思を持つことは、老いへの抵抗でもあります。

美味しい朝食をとりながら、散歩しながら、ベンチに腰

をかけながら、生まれ出てくるアイデアを練る。

日常に詩は見出せ、誰でも詩は書けると語った谷川俊太郎さんの興味深い詩「地球へのピクニック」の書き出しは、「ここで一緒に縄跳びをしよう／ここで／ここで一緒におにぎりを食べよう／ここでおまえを愛そう／おまえの眼は空の青をうつし／おまえの背中はやもぎの緑に染まるだろう／ここで一緒に星座の名前を覚えよう」です。

谷川さんのひそみに倣えば、みなさん、大いに「ここで一緒に作品をのせましょう」ということになるでしょうか。また、この詩で、谷川さんは素敵な緑豊かな牧歌的な地球を描いてくれています。

しかし、悲惨な第二次世界大戦が終わって八十年、危惧されていたように、やはり、地球のたがは緩み、国際協調ではなく、自国第一主義がはびこりはじめています。

こうしたなかだからこそ、ますます、繋がりと、和といった言葉の重要性は増し、こうした文芸の饗宴の場は大切になってくるはずです。

川越市は、歴史的・文化的遺産の宝庫です。

それゆえに、その宝庫をもとに新しい要素を取り入れ、新たな歴史や文化を育てて行くべきで、「文芸川越」もその重要な一翼を担っています。今後、さらに訴求力のある「文芸川越」になるよう、編集委員一同、広報等につとめたいと思います。

編集委員長 寺島 悦恩

文芸川越 第四十六号

発行日 令和八年二月九日

編集 文芸川越編集委員会

発行 川越市文化芸術振興課
川越市元町一―三―一

印刷 有限会社 東京工芸社
鶴ヶ島市脚折町一―一九―四〇

頒布価格 千円

本誌に関するご意見・ご感想をお寄せください。

〒350-8601 川越市元町1-3-1

川越市役所文化芸術振興課

TEL 049-224-8811 (代)

